

愛知県立芸術大学音楽研究科

博士後期課程学位論文

(平成 25 年度)

アンリ・ジル＝マルシェックスによる日仏文化交流の試み
—4 度の来日(1925-1937)における音楽活動と日本音楽研究をもとに—

ピアノ専攻 2010895102 白石 朝子

目次

凡例.....	v
序論.....	1
第 1 章 ジル＝マルシェックスの経歴と彼の来日以前の日本における西洋音楽受容の状況.....	7
1. ジル＝マルシェックスの経歴.....	8
1) ピアニストとしてのジル＝マルシェックス.....	8
2) 作曲家としてのジル＝マルシェックス.....	11
3) 著述家としてのジル＝マルシェックス.....	11
4) 親交の深かった作曲家と献呈された作品.....	12
2. ジル＝マルシェックスの来日以前の日本における西洋音楽受容の状況.....	13
1) 東京音楽学校におけるドイツ音楽至上主義.....	13
2) 大田黒元雄、小松耕輔によるフランス音楽の紹介.....	15
3) 外来演奏家の活動.....	16
第 2 章 1925 (大正 14) 年の日本滞在における音楽活動—フランス・ピアノリズムによる日本初演とその反響.....	20
1. 来日目的.....	21
1) 薩摩治郎八との交流.....	21
2) 来日の期待を寄せた文化人.....	22
2. 音楽活動.....	24
1) 帝国ホテルにおける 6 夜の演奏会.....	24
2) 御前演奏と 15 の演奏会.....	26
3. 日本の音楽界の反響.....	27
1) 演奏に対する評価.....	27
2) ジル＝マルシェックスの発言に対する反応.....	30
4. 日本の音楽界への影響・貢献.....	32
1) フランス留学への道標.....	32
2) 作曲界への働き.....	33
5. まとめ.....	34

第3章 1931（昭和6）年-32（昭和7）年の日本滞在における音楽活動—レクチャー・コンサートと松平頼則、須永克己への影響	36
1. 来日目的とスケジュール	37
1) 来日に至る経緯	37
2) レクチャー・コンサートに重点を置いた音楽活動	38
3) フランス政府による日本の音楽界への関心	39
4) コンサート・スケジュール	40
2. レクチャー・コンサートの概要	41
1) 東京と大阪における5日間のレクチャー・コンサート	41
2) 『フランス音楽と日本人の感受性』	44
3. 日本の音楽界への影響・貢献	47
1) 松平頼則への影響	47
2) 須永克己への影響	48
4. まとめ	49
第4章 1937（昭和12）年の日本滞在における音楽活動—日本の作曲界との交流による活動	51
1. 来日目的とスケジュール	52
1) 日仏両国からの期待	52
2) 5つのテーマによるレクチャー・コンサート	52
3) コンサート・スケジュール	53
2. ジル＝マルシェックスによるレクチャー・コンサートの内容	54
1) 『十六世紀より二十世紀に至る欧羅巴舞踊音楽（第二講）—ショパン及びリストよりバルトック及びラヴェルまで』	54
2) 『民衆の現代音楽に及ぼしたる影響』	57
3. 日本の楽壇に支えられた活動	60
1) ジル＝マルシェックス音楽会後援会	60
2) 日本現代作曲家連盟の演奏会への助演	61
4. 日本の音楽界への影響・貢献	61
5. まとめ	62
第5章 4回の来日（1925-1937年）における日本音楽研究曲—9本の論文とレクチャー・コンサート、作品発表	63
1. 1920-30年代の西洋における日本音楽研究	64
2. ジル＝マルシェックスによる日本音楽研究の成果	64
1) 記事や論文の執筆	64

2) 作品の発表	65
3) レクチャー・コンサート	66
3. 1925年の日本滞在における日本音楽研究	67
1) 日本音楽との出会い	67
2) 日本における音楽文化とその継承	68
3) 日本音楽の特徴と西洋音楽への有効性	70
4. 1931-32年の日本滞在における日本音楽研究	71
1) 日本音楽研究の本格化	71
2) 音楽教育の現状	72
3) フランス音楽と日本人の美意識	72
4) 日本音楽の現状と西洋音楽に対する重要性	73
5. 1937年の日本滞在における日本音楽研究	74
1) 国際文化振興会の支援	74
2) 東京音楽学校の教育体制への批判	75
3) 日本の作曲界の進歩と新たな提案	76
6. 日本人作曲家の紹介	77
1) 日本における交流を通して	77
2) パリにおける交流を通して	78
7. まとめ	80
結論	81
参考文献	86
ジル＝マルシェックスの音楽活動と日本音楽研究に関する雑誌記事、新聞記事一覧	95
資料編（公演内容）	102
1. 1925年の日本滞在における音楽活動	103
1) 演奏活動	103
2) ジル＝マルシェックスによる演奏曲目一覧	109
2. 1931年-32年の日本滞在における音楽活動	111
1) 全国各地における演奏活動	112
2) 日佛會館と各大学におけるレクチャー・コンサート、演奏会	115
3) 新たにプログラムに取り入れられた作品	119
4) マーテル在日フランス大使からブリアン外務大臣に宛てた手紙（1931年12月18日付）	119

3. 1937年の日本滞在における音楽活動	121
1) 華族会館におけるレクチャー・コンサート	122
2) 各大学におけるレクチャー・コンサート	122
3) その他のレクチャー・コンサートと演奏会	124
4) 新たにプログラムに取り入れられた作品	125

凡例

音楽作品の曲集は《 》で示した。

音楽作品の曲集中の各曲は〈 〉あるいは‘ ’で示した。

日本語文献は『 』で示した。その中に含まれる論文は「 」で示した。

欧文文献はイタリック体で示した。その中に含まれる論文は“ ”で示した。

註は、脚注に付けた。

訳、表において記載のないものは、筆者によるものである。

序論

明治以降の日本における西洋音楽の受容は、1887（明治 20）年に音楽取調掛を改組した東京音楽学校（現在の東京芸術大学）を中心に、演奏・教育の両面でドイツ音楽に比重が置かれていたことはよく知られている。そのような中、1925（大正 14）年にアンリ・ジル＝マルシェックス（Henri Gil-Marchex 1894-1970）¹が、パリで多くの芸術家と交流していた実業家、薩摩治郎八（1901-1976）の斡旋により来日した。彼は、ディエメ（Louis Diémer 1843-1919）やコルトー（Alfred Denis Cortot 1877-1962）に師事し、1911年にパリ音楽院を首席で卒業後、ヨーロッパを中心に活躍したフランス人ピアニストである。彼は日本滞在中に、帝国ホテルで 6 夜の演奏会を行いフランス音楽や近現代作品を初演して、官主導のもとドイツ音楽偏重であった日本の音楽界に衝撃を与えた。

日本における西洋音楽受容史研究では、ジル＝マルシェックスによる演奏会が、日本で初めてのフランス・ピアノ音楽の紹介として言及されてきた。しかし、これまで彼の活動がそれ以上考察され、評価されることはほとんどなかった。彼は、1925 年以降も 1931（昭和 6）年（2 回）、37（昭和 12）年にフランス政府の文化使節として来日し、日本の音楽界と関係を築いてきた。彼は、大正から昭和にかけて急速に変化する日本の音楽界とどのように関わり、音楽活動²を行ったのであろうか。

またジル＝マルシェックスが日本音楽研究を行ったことは、これまで全く言及されることはなかったが、実は、彼の活動において大きな比重を占めている。彼が 1925 年に来日して以来、日本音楽研究をもとにした作品の作曲、講演、執筆は、当時フランスの楽壇では広く知られており、1937 年には、日本の国際文化振興会から外国人研究者として支援を受けている。フランス政府によって、自国芸術の対外宣伝の一環として世界各国に派遣されていた彼が、なぜ日本音楽の研究を行ったのであろうか。

ここで、ジル＝マルシェックスの音楽活動について言及した先行研究について 3 つ挙げ、彼に対するこれまでの認識や評価を確認する。まず、ジル＝マルシェックスによる 4 回の来日と彼の演奏会プログラムを初めて明記した堀成之の連載記事、次に、ジル＝マルシェックスの音楽活動に関する資料が含まれるものとして、フランス国立図書館所蔵のモンパ

¹ 日本においてジル＝マルシェックスの経歴を紹介しているものとして『音楽大事典』平凡社、1982 年と『演奏家大事典』財団法人音楽鑑賞教育振興会、1982 年が挙げられる。二冊ともジル＝マルシェと表記されているが、本論文では来日当時の表記や先行研究を優先して、ジル＝マルシェックスと表記する。

² 本論では、演奏活動と、演奏を伴う講演活動の総称として音楽活動と示す。

ンシエコレクション³に初めて言及した笠羽映子の論文、最後に、近代日本文化の形成における近代フランス音楽の影響について論じた佐野仁美の著作である。

堀成之は「日本ピアノ文化史」⁴のなかで、「第 14 回ジル＝マルシェックスの来日（フランスピアノ主義の紹介）」⁵と題し、帝国ホテルでのリサイタルのときに作成されたプログラムやジル＝マルシェックスに関する雑誌記事などをもとに、彼の音楽活動をまとめた。そこには、彼の簡単な経歴や帝国ホテルでの演奏曲目、演奏会に対するいくつかの批評が載せてあり、彼が 1925 年の初来日後に 3 回来日した事が明記されている。

笠羽映子は、「日本とラヴェル—西洋音楽の受容をめぐる一考察」⁶で、パリ国立図書館所蔵資料モンパシエコレクションの調査により、ジル＝マルシェックスの音楽活動を詳しく紹介した。1925 年の来日に加えて、1931 年、37 年の来日における音楽活動についてもいくつか記されていることが注目される。また笠羽は、ジル＝マルシェックスによる 4 回の来日が、「西洋芸術音楽、特に同時代のフランスを中心としたヨーロッパのピアノ音楽の日本における受容に果たした役割、直接的な刺激は少なくなかった。」⁷と述べている。

佐野仁美は、『ドビュッシーに魅せられた日本人—フランス印象派音楽と近代日本』⁸で、近代日本文化の形成における近代フランス音楽の影響について論じており、ジル＝マルシェックスの 1925 年の来日を非常に重要なものであると評価している。

このように、日本の西洋音楽受容史においては、ジル＝マルシェックスの 1925 年の来日が日本の音楽界の発展におけるひとつの重要な出来事として捉えられてはきた。しかし、彼が 4 回の来日時に行った活動の詳細は明らかにされず、ジル＝マルシェックスの活動は、断片的なものによってしか評価されてこなかったといえる⁹。4 回の来日について初めて詳

³ Fonds Montpensier <http://rasp.culture.fr/sdx/rasp/document.xsp?id=f1179302319960> (2013 年 6 月 6 日アクセス) このコレクションには、主に 2 つの世界大戦の間の時期の、フランスをはじめ世界で行われた音楽活動に関する新聞記事などの資料が収められている。これらの資料は、フランス芸術支援協会 (l'Association Française d'Action Artistique) によって、1948 年にフランス国立図書館へ寄贈された。この協会は、フランスの対外宣伝のために 1922 年に文部外務両省によって作られ、翌年公益団体として認可された。1938 年まで音楽批評家ロベール・ブリュッセル (Robert Brussel 1874-1940) が会長を務めている。

⁴ 全 14 回あり、『音楽の世界』に 1982 年 10 月から 1984 年 12 月まで不定期に連載された。

⁵ 堀成之 (1984,12 : 12-19)

⁶ 笠羽映子 (1998,第 24 号 : 142-165)

⁷ 同上 (同上 : 148)

⁸ 佐野仁美 (2010 : 88-90)

⁹ 文学的研究ではあるものの、小林茂の「一九二五年の器乐的幻覚—アンリ・ジル＝マルシェックスの演奏旅行と梶井基次郎」(2005) が、1925 年に行われた帝国ホテルの演奏会以外のジル＝マルシェックスの

しく言及した笠羽が提示した資料でさえ、モンパンシエコレクションに含まれていたものに限られている。さらにこれまでの研究では、ジル＝マルシェックスの4回の来日が日本の音楽界に対して持つ意味を、1925年から1937年にかけて大きく変化した日本の音楽界の状況と絡めて考えることがなかった。この点が、ジル＝マルシェックスの活動の意義を考察する上で大きく欠落している事項である。

これらのことから本研究では、ジル＝マルシェックスの音楽活動と日本音楽研究を詳細に検証して彼の活動の真価を明らかにする。彼の活動が日本の音楽界に果たした役割を考察するために、日仏の各方面に保管されている資料（彼のパリ音楽院時代に関する資料¹⁰、彼が来日した当時の音楽雑誌¹¹や新聞19紙¹²、大学新聞6紙¹³、演奏会で配布されたプログラム現物など）を入手し、彼の公演内容や、それに対する評価、また、日仏で報道された彼の活動を明らかにし、これまでジル＝マルシェックスの活動で見逃されていた、旧帝国大学をはじめとする全国各地の大学などの教育機関におけるレクチャー・コンサートの内容、そして日本の作曲界とのつながりを詳しく論じる。また、彼の来日を日仏両国の関係という視点から捉えるために、モンパンシエコレクションに含まれている外務大臣の手紙や国際文化振興会関連の資料（*KBS Quarterly*¹⁴、『国際文化振興会月報』¹⁵など）の調査・分析を行い、彼の来日を取り巻く状況、つまり薩摩治郎八による日本への文化的貢献から始まった彼の来日が、1931年以降フランス政府の対外文化政策という目的によってなされたこと、そして、1937年には国際文化振興会から援助を受けたことについても言及する。

音楽活動についても触れ、ジル＝マルシェックスが1925年に行った帝国ホテルの演奏会以外の公演についてのプログラムを載せており、重要な資料として挙げられる。

¹⁰ パリ音楽院の在籍者名簿や、入学試験、定期試験、修了試験などの結果と批評

¹¹ 『音楽と蓄音機』、『音楽評論』、『音楽新潮』、『月刊楽譜』、『音楽世界』、『ムジカ』、『フィルハーモニー』

¹² 『東京朝日新聞』、『東京日日新聞』、『東京讀賣新聞』、『報知新聞』、『都新聞』、『時事新報』、『横浜毎朝新報』、『横浜貿易新報』、『京都日日新聞』、『京都日出新聞』、『朝日新聞京都版』、『大阪朝日新聞』、『大阪毎日新聞』、『大阪時事新報』、『神戸新聞』、『名古屋新聞』、『福岡日日新聞』、『*The Japan Times*』、『*The Japan Advertiser*』

¹³ 『帝國大学新聞』、『京都帝國大学新聞』、『三田新聞』、『早稲田大学新聞』、『日本大学新聞』、『一橋新聞』

¹⁴ JFIC ライブラリー所蔵。ライブラリーには、国際交流基金（ジャパンファウンデーション）の実施事業に関する資料や、国際文化交流・文化政策に関する図書資料、外国語で書かれた日本を紹介する図書・映像資料などが所蔵されている。

¹⁵ 国立公文書館アジア歴史センター <http://www.jacar.go.jp/>（2013年6月6日アクセス）

これらの方法によって、彼の活動を来日時の日本の音楽界の状況と照らし合わせて考察し、それらを日仏の相互的な視点から捉えることで、日本における西洋音楽受容史の中だけでなく、日仏文化交流史の中に位置づけようと試みる。

本論文は、全5章で構成されている。

第1章「ジル＝マルシェックスの経歴と彼の来日以前の日本における西洋音楽受容の状況」では、ジル＝マルシェックスが、ピアニスト、作曲家、執筆者として行った活動と彼の交友関係について述べる。また、彼が来日する以前の日本における西洋音楽受容の状況を概観する。

第2章から第4章では、彼の来日時の音楽活動を詳しく述べ、彼の音楽活動と日本音楽界との関わりを明らかにする。

まず、第2章「1925年の日本滞在における音楽活動—フランス・ピアノリズムによる日本初演とその反響」では、1回目の来日を取り上げる。ジル＝マルシェックスが行った22回の演奏会と、音楽雑誌及び新聞に載せられた彼に関する記事を検証し、彼の来日が相当な期待をもって迎えられ、彼の音楽活動が大きな反響を得たことを示す。そして、彼の音楽活動に刺激を受けた作曲家、演奏家達について述べる。

次に、第3章「1931年-32年の日本滞在における音楽活動—レクチャー・コンサートと松平頼則、須永克己への影響」では、2回目、3回目の来日を取り上げる。これらは、全国各地の大学などで行ったレクチャー・コンサートを中心とした音楽活動によって特徴づけられる。東京と大阪での5日間のレクチャー・コンサートは、コルトー（Alfred Denis Cortot 1877-1962）の委嘱によってエコール・ノルマル音楽院で行われたものに基づいており、「描写的作品の解釈」など5つのテーマによって構成された。また、日仏会館と大学におけるレクチャー・コンサートは、『フランス音楽と日本人の感受性』をテーマにフランス音楽の紹介に重きを置いたプログラムによるものであった。これらの内容を当時の資料をもとに検証する。また、松平頼則や須永克己（1900-1935）に与えた影響を考察する。

第4章「1937年の来日における音楽活動—日本の作曲界との交流を通じた活動」では、4回目の来日を取り上げる。今回の来日でとりわけ特徴的なのは、日本の作曲家と協力して活動を行ったことであり、ジル＝マルシェックスによる日本人作曲家の作品の演奏や彼が設立に携わった日仏音楽同好会について示す。また、5つのテーマによる彼のレクチャー・コンサートを検証し、彼が日本の聴衆に何を伝えようとしたかを明らかにする。

第5章「日本音楽研究と日本人作曲家の紹介—9本の論文と講演活動、作品発表」では、これまで述べてきた4回の来日を通してジル＝マルシェックスが行った日本音楽研究と、日本人作曲家の紹介について述べる。彼が日本音楽について著した9本の論文と作曲作品、フランスの新聞や雑誌記事を検証し、国際文化振興会から受けた支援を示すことで、彼の日本音楽研究と日本人作曲家の活躍に対する貢献を明らかにする。

最後に、結論において、これまで述べてきたジル＝マルシェックスの音楽活動が日本の西洋音楽受容史だけでなく、日仏文化交流史の中に位置づけられることを示す。

また、巻末の資料編では、ジル＝マルシェックスが4回の来日時に行った公演と演奏した作品をまとめて示す。

第1章

ジル＝マルシェックスの経歴と彼の来日以前の 日本における西洋音楽受容の状況

ジル＝マルシェックスは、1894年にサン＝ジョルジュ・デスペランシュ（St Georges d'Esperanche）に生まれ、1911年にパリ音楽院を首席で卒業後、ヨーロッパを中心に活躍した。ディエメ（Louis Diémer 1843-1919）やコルトー（Alfred Denis Cortot 1877-1962）に師事している。1927年から30年の間、エコール・ノルマル音楽院において教鞭をとり、1953年からはポワティエ音楽院院長を務めた。彼はピアニストであったが、作曲家としても作品を遺している。さらにピアノ作品についての演奏法に関する論文をいくつか執筆した。また彼は、当時芸術の中心地であったパリで多くの芸術家たちに囲まれていた。彼の音楽的才能、文才、社交性は、のちに日本における音楽活動と日本音楽研究に発揮された。

彼は、1925年に初めて日本を訪れた。当時日本は、東京音楽学校における教育を中心にドイツ音楽の受容に努めており、フランス音楽は演奏によって聴かれる事はほとんどなく¹、1910年代後半から増え始めた外来演奏家も、古典派、もしくはショパン、リストなどのロマン派の作品を中心に演奏していた²。そのため、ジル＝マルシェックスが演奏したフランス音楽やヨーロッパの近現代音楽は、そのほとんどが日本初演であった。この章では彼の、ピアニスト、作曲家、著述家という3つの顔と交友関係を明らかにすると同時に、彼の来日以前の日本の音楽事情を概観する。

1. ジル＝マルシェックスの経歴

1) ピアニストとしてのジル＝マルシェックス

① パリ音楽院時代

ジル＝マルシェックスは、1903年パリ音楽院ソルフェージュ科に入学し、その後、1907年ピアノ準備科に、そして1908年ピアノ本科に入学して、1911年1等賞を獲得して修了した。国立古文書館に収められているパリ国立音楽院の名簿³をもとに、在籍クラスについてまとめたものが、表1である。この表から、彼が毎年

西暦	年齢	在籍クラス
1903年	9歳	パリ音楽院ソルフェージュ科 (Schvartzクラス) 入学
1905年	11歳	パリ音楽院ソルフェージュ科 第3メダル獲得
1906年	12歳	パリ音楽院ソルフェージュ科 第2メダル獲得
1907年	13歳	パリ音楽院ソルフェージュ科 第1メダル獲得
1907年	13歳	パリ音楽院ピアノ準備科 (Falkenbergクラス) 入学
1908年	14歳	パリ音楽院ピアノ本科 (Diémerクラス) 入学
1910年	16歳	パリ音楽院ピアノ本科クラス 2等賞獲得
1911年	17歳	パリ音楽院ピアノ本科クラス 1等賞獲得

¹ 軍楽隊を通じたフランス音楽の移入に関しては、佐野（2010）を参照。

² 外来演奏家の活動については、秋山（1966）を参照。

³ パリ国立音楽院在籍者名簿（資料請求番号 AJ/37/299-AJ/37/302）

順調に成績を上げて卒業したことがわかる。

また彼はピアノ準備科入学試験以後、定期試験や修了試験を受けており、国立古文書館所蔵の資料⁴（写真1-写真3）から、演奏曲目や成績が明らかになった（表2）。全4回の定期試験では、担当教授によるコメントが寄せられ、最後の定期試験では、ディエメから「大変注目される、完璧な音楽的才能とすばらしい技巧をもつ。」と高評価を得ている（写真3）。これらの資料から、彼の演奏曲目は古典派やロマン派のピアノ曲で占められていることが判明した。彼はパリ音楽院卒業後、特に近現代の作品の演奏家として注目を浴びたが、在学中にはむしろ古典派やロマン派の音楽を学び、評価されていたということがわかる。彼が日本においてもバロックから近現代まで西洋音楽史を網羅したプログラムを演奏することができたのは、学生時代の古典派やロマン派の作品に対する十分な取り組みによって裏付けられる。特にベートーヴェン（Ludwig van Beethoven 1770-1827）、リスト（Franz Liszt 1811-1886）、シューマン（Robert Alexander Schumann 1810-1856）のピアノ曲は、彼の得意とした作品であり、日本でも繰り返し演奏された。

試験題目	日付	演奏曲目	得点(満点)
入学試験	1906.10.18	ベートーヴェン:ソナタ第14番 作品27-2	7(8)
定期試験	1907.6.18	ウェーバー:ソナタ 第1番	5(7)
入学試験①	1907.10.15	ベートーヴェン:ソナタ第32番 作品111	9(10)
入学試験②	1907.10.17	ブラームス:狂詩曲	9(10)
定期試験	1908.5.29	ベートーヴェン:ソナタ第23番 作品57	記載なし
定期試験	1909.5.26	リスト:「二つの伝説」より波を渡るパオラの聖フランシス	6(6)
修了試験	1909.7.5	シューマン:謝肉祭	10(12)
定期試験	1910.6.7	シューマン:交響的練習曲	8(8)
修了試験	1910.6.29	ベートーヴェン:ソナタ第32番 作品111	11(12)
定期試験	1911.5.20	ブラームス:バガニーニの主題による変奏曲	記載なし
修了試験	1911.6.29	カミーユ・シュヴィヤール:テーマと変奏曲	11(11)

写真1 修了試験のチャシ(1909)

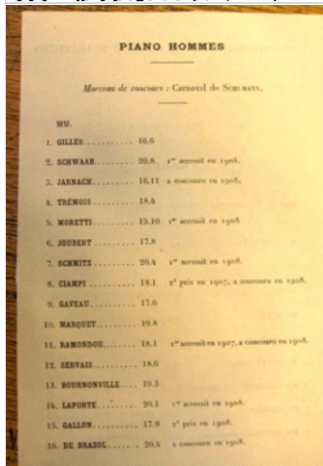


写真2 修了試験の議事録(1909)

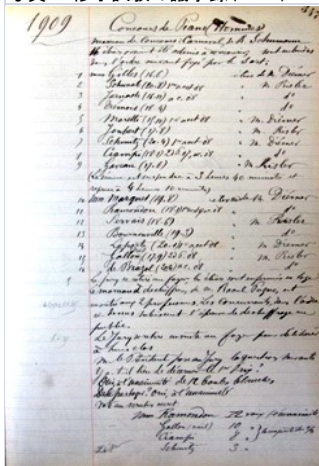
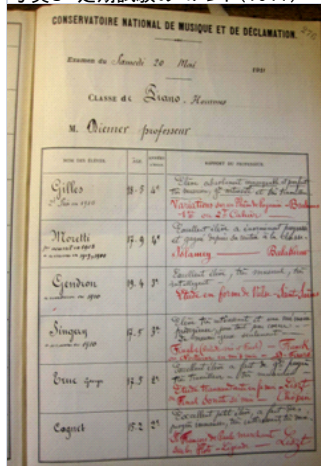


写真3 定期試験のコメント(1911)



⁴ パリ国立音楽院入学試験（資料請求番号 AJ/37/245-2, 245-3）、定期試験の議事録（AJ/305-2,305-3）、定期試験のコメント（AJ/37/300-302）、修了試験の議事録（AJ/37/253-3, 254-1）

② パリ音楽院修了後の演奏活動

ジル＝マルシェックスは、1923年にザルツブルクで行われた第1回国際現代音楽祭で、フランス人作曲家の作品⁵を演奏して一躍注目を浴び、パリ、スイス、ベルギー、オーストリア、イギリスなどの主要都市で80の演奏会を行った⁶。各地では、パリのラムルー管弦楽団、コンセール・パドルーなどと共演し、ロンドンのクイーンズホールでソリストを務めた。

1924年には、彼はロンドンで行われたラヴェル (Joseph-Maurice Ravel 1875-1937) の音楽祭で、ヴァイオリニスト、ジェリー・ダラニー (Jelly d'Arányi 1893-1966) とともに《ツイガヌ *Tzigane*》の初演を行った。その後は26年にかけて、フランス国外で演奏会を開催し、スペイン、スイス、ベルギー、イギリス、オランダ、ラトビア、ロシア、そして日本を訪れている。スペインでは、ファリャ (Manuel de Falla y Matheu 1876-1947) の《スペインの夜の庭 *Nuits dans les jardins d'Espagne*》をビルバオ交響楽団と共演し、各地ではドビュッシー (Claude Achille Debussy 1862-1918) やラヴェルはもちろん、ルーセル (Albert Roussel 1869-1937) やイベール (Jacques François Antoine Ibert 1890-1962) など、フランス人作曲家の、当時最先端であった作品を演奏している。彼は、このレパートリーによって、1925年来日時に多くの作品の日本初演を成し遂げたのであった。

彼は、1927年から1930年にかけてエコール・ノルマル音楽院で教鞭をとりながら演奏活動を続け、1929年には5夜の連続コンサートを行った⁷。そして1930年以降ヨーロッパの主要都市で演奏活動を続け、1931年には日本へ、1937年には日本だけでなく、エジプト、フィリピン、ベトナム、オランダ領東インド (現在のインドネシア) でも演奏している。

③ 録音媒体

ジル＝マルシェックスの演奏録音は、1931年に日本コロムビアから4枚のレコードが発売されている (表3)。ドビュッシー〈ヴィーノの門〉以外は、来日時に彼が度々演奏した作品が並んでいる。

番号	作曲家	作品	値段
J482	スカルラッティ	ジーク ハ長調	1円50銭
	モーツァルト	トルコ行進曲	
J483	クーブラン	翻るバウアレ	1円50銭
	ダカン	かっこう	
	ラモー	タンブラン	
J484	ドビュッシー	ヴィーノの門	1円50銭
		ミンストレル	
J5178	ラモー	メヌエツト 長調	2円
	バルトーク	アレグロ・バルバロ	

⁵ 音楽祭を報じた1923年8月27日付 *Comedia* には、ラヴェル、シュミット、ローセル、ロラン・マニュエル、ミヨー、オネゲル、プーランクの名前が挙げられている。

⁶ 「Henri Gil-Marchex joue les pianos pleyel」1924年6月発行。

⁷ 第3章第1節参照。

2) 作曲家としてのジル＝マルシェックス

ジル＝マルシェックスは、パリ音楽院でピアノ科に在籍したが、卒業後には作曲も行った。今回の調査で明らかになった彼の作品は、表4、5の通りである⁸。

作品名	出版社	出版年	資料請求番号(国立図書館)
Cette fille, elle est morte.	Paris, M. Sénart	1927	Cote : FOL-VM7-21257
Dans l'interminable ennui de la plaine.	Paris, M. Sénart	1927	Cote : FOL-VM7-21258
Le rideau de ma voisine.	Paris, M. Sénart	1927	Cote : FOL-VM7-21344
Chanson d'automne.	Paris, M. Sénart	1931	Cote : FOL-VM7-21257
Élégie	Paris, M. Sénart	1931	Cote : FOL-VM7-24378
Lorsque j'étais presque inutile.	Paris, Pierre Schneider	1934	Cote : FOL-VM7-28222
Sept Chansons des geishas.	Paris, Pierre Schneider	1935	所蔵なし (古沢淑子楽譜コレクション蔵書)
Deux images du vieux Japon.	Paris, Eschig	1935	Cote : FOL-VM12-14392 (1-2)
La complainte du voleur.	Paris, Pierre Schneider	1937	Cote : FOL-VM7-37236

作品名	作曲者	出版社	出版年	資料請求番号(国立図書館)
Five o'clock fox-trot : fantaisie extraite de "L'enfant et les soltilèges"	M.Ravel	Durand	1927	Cote : FOL-VM12-11415
Le Trefor d'Orphe d'Antoine	Francisque	Paris, Pierre Schneider	1927	Cote : FOL-VM7-21257
Passacaille	L.B.Lulli	Paris, M. Sénart..	1922	所蔵なし (ロチェスター大学図書館所蔵)

1922年から1937年の間に、オリジナル作品が9曲（ピアノ曲1曲と声楽曲8曲）と編曲作品が3曲、計12曲の楽譜が出版されている⁹。

これらの作品のうちで注目すべきものは、ジル＝マルシェックスが日本で世界初演した《五時フォックス・トロット“子供と魔法”による幻想曲 *Five o'clock fox-trot : fantaisie extraite de "L'enfant et les soltilèges"*》¹⁰、日本の文化をテーマにした《芸者の7つの歌 *Sept Chansons de Geishas*》と《古き日本の2つの映像 *Deux Images du Vieux Japon*》¹¹である。

3) 著述家としてのジル＝マルシェックス

ジル＝マルシェックスは、ラヴェル¹²、ルーセル¹³、リスト¹⁴のピアノ作品について論文

⁸ 《芸者の7つの歌 *Sept chansons des geishas*》と《パッサカリア *Passacaille*》は、フランス国立図書館には所蔵されていなかった。それぞれ、古沢淑子楽譜コレクション（東京芸術大学音楽学部声楽研究会寄託資料）とロチェスター大学図書館

<https://urresearch.rochester.edu/institutionalPublicationPublicView.action?institutionalItemId=3400>（2013年6月4日アクセス）で確認した。

⁹ 『音楽大事典』平凡社には《東京の夜 *Les nuits de Tokyo*》という作品も掲載されているが、詳細は不明。

¹⁰ 第1章第2節参照。

¹¹ 第5章第1節参照。

¹² Gil-Marchex“La technique du piano”*Revue Musicale*, numéro spécial a Maurice Ravel, N°6（1925）

¹³ Gil-Marchex“La Musique de Piano d'Albert Roussel”*Revue Musicale*, N°400-401（1970）

を書いている。ラヴェルのピアノ作品に関する論文については、小松耕輔（1844-1966）によって訳され、日本でも紹介された¹⁵。また、日本音楽研究に関する論文などを音楽雑誌に寄稿している¹⁶。

4) 親交の深かった作曲家と献呈された作品

ジル＝マルシェックスと親交のある西洋人作曲家として、第一に、ラヴェルが挙げられる。ラヴェルは、1924年、《ツィガーヌ *Tzigane*》の初演を依頼したことからわかるように、彼をピアニストとして評価していた。また、1925年、彼がラヴェルのオペラ《子供と魔法 *L'enfant et les sortilèges*》から抜粋して編曲した《五時フォックス・トロット；“子供と魔法”による幻想曲 *Five o'clock fox-trot : fantaisie extraite de “L'enfant et les sortilèges”*》を日本で世界初演したことに対して大変喜んだという¹⁷。

また、ジル＝マルシェックスは、ラヴェルのピアノ作品の技巧に関する論文¹⁸も書いており、彼の演奏レパートリーには、数多くのラヴェルのピアノ作品が含まれている。彼はラヴェルのピアノ作品の日本初演を多く行い、演奏会プログラムには2人の写真が掲載された（写真2）¹⁹。



次にルーセルが挙げられる。ルーセルは、1934年《前奏曲とフーガ *Prélude et Fugue Op.46*》を完成させ、1935年、作品を献呈されたジル＝マルシェックスが初演を行った。また、ジル＝マルシェックスは、ルーセルのピアノ技巧に関する論文を書いている²⁰。

その他にも、ジル＝マルシェックスに対して作品を献呈した作曲家として、オーリック（Georges Auric 1899-1983）、フェルー（Pierre-Octave Ferroud 1900-1936）、シュルホフ（Erwin Schulhoff 1894-1942）、ロザンタール（Manuel Rosenthal 1904-2003）が挙げられる（表6）。

¹⁴ Gil-Marchex “A propos de la technique de piano de Liszt” *Revue Musicale*, numéro spécial, mai (1928)

¹⁵ ジル＝マルシェックス、小松耕輔訳「ラヴェルのピアノの技巧について」（1925年10月-11月帝国ホテルにおける演奏会プログラム）47頁-51頁。

¹⁶ 第5章参照。

¹⁷ オレンシュタイン、アービー（2006：7）

¹⁸ 第1章第4節参照

¹⁹ 同好會パンフレット『ジルマルシェックス』（1931年10月22日-30日文化学院にて行われた講演シリーズプログラム）、17頁。

²⁰ 第1章第4節参照。

表6 ジル＝マルシェックスに献呈された作品

作曲家	作品名	出版社	出版年	作曲年
Pierre-Octave Ferroud	Bourgeoise de qualité "Types"	Paris: Rouart, Lerolle et Cie	1924	1922-24
Manuel Rosenthal	Six Caprices	Paris: Heugel Editeur	1927	1926
Erwin Schulhoff	Piano Sonata no.3	不明	不明	1927
	Suite Dansante en Jazz op.74	Paris: La Sirène Musicale	1931	1931
Albert Roussel	Prélude et Fugue op.46	Paris: Durand & Cie.	1934	1933

2. ジル＝マルシェックスの来日以前の日本における西洋音楽受容の状況

1) 東京音楽学校におけるドイツ音楽至上主義

日本では、1879（明治12）年に初めての音楽教育機関である音楽取調掛が創設され、1887（明治20）年に東京音楽学校（現在の東京芸術大学）へ発展した。日本における初期の西洋音楽受容がドイツ音楽中心であったことの大きな要因として、この官立の音楽学校においてドイツ人御雇教師が中心となりドイツ音楽至上主義によって教育がなされていたことが挙げられる。『東京芸術大学百年史』をもとに当時の教師の名前を確認すると、以下の通りである。

ユンケル（August Junker 1879-1944：在職期間 1899-1912）

ヴェルクマイスター（Heinrich Werkmeister 1883-1936：在職期間 1908-1923、
1931-1936）

ハンカ・ペツォルト（Hanka Petzold 1862-1937：在職期間 1910-1926）

クローン（Gustav Kron 1874-？：在職期間 1913-1921、1922-1925）

ショルツ（Paul Sholz 1889-1944：在職期間 1913-1922）

彼らが勤めていた頃の状況について、音楽評論家の野村光一（1895-1988）が証言している。

ドイツ万能主義は常にクローン氏やその他上野御雇外人教師ショルツ氏、ヴェルクマイスター氏等のドイツ系が抱いていたばかりでなく、上野を圍繞するあらゆる邦人音楽家、即ち教師や生徒達迄総てが絶対的に尊奉していた信条であった。彼等はクローン氏と同じくドイツ音楽以外の音楽は音楽に非ずと考え、イタリーやフランスの音楽を演る輩は民間の連中で、而も音楽の掟に背く無法無頼の徒と

見放して、これを甚だ侮辱の眼で見ているのである。²¹

このような記述、特に「ドイツ音楽以外の音楽は音楽に非ず」という野村の表現は、彼らのドイツ音楽信奉による極端に偏った姿勢を如実に示しているといえる²²。また 1924 年から 27 年まで東京音楽学校に在籍した作曲家、高木東六（1904-2006）は、当時の状況を以下のように回想する。

日本に招く大先生たちは、ドイツ本国から迎えられ、日本の教授たちもドイツへ留学させられていたのだ。東京音楽学校開校当時から、ドイツの音楽をそっくりまね、そこに基礎を置いて発展してきた。…現に、大正の末期と昭和の初期にかけて、ぼく自身が東京音楽学校へ入学したころは、与えられる楽曲も合唱曲も、また演奏されるシンフォニーも、何もかにもがドイツ一辺倒であった²³

この二人の記述から分かるように、当時の音楽教育におけるドイツ音楽偏重は、東京音楽学校の在籍者と外部者双方が認める確かなものだといえるであろう。そして、1925 年にジル＝マルシェツクス初来日を迎えた時のことを野村はこう証言している。

ヂルマルシェツクスを日本に呼んだことは大きな刺戟になったと思いますね。しかし、彼の演奏はアカデミックで固まっている上野のピアノの先生たちにはきわめて評判が悪くて、あんな無法なことをやって、規則はずれの演奏ばかりやっているのはけしからん、とひとたまりもなくやられていましたよ。それほど日本のピアノ界の長い伝統と第一次大戦後に起こったフランスの新しい流派との間には、大きな喰い違いがあつたのです²⁴。

²¹ 野村光一（1942,6：100）

²² 彼ら教師の中で、ペツォルトは唯一ドイツ人ではなく、ノルウェーの出身であるが、彼女でさえも次の様な考えを持っていた。「音楽を勉強なさる上に於いて、妾は独逸の音楽が一番便利だろ存じます。何となれば此処三十年間の独逸音楽の発展は實に驚くべきものがあります。」ハンカ・ペツォルト、訳者不明（1914,4：73-75）

²³ 高木東六（2003：171）

²⁴ 野村光一（1975：149）

「無法なこと」「規則はずれ」という表現は、ジル＝マルシェックスの演奏におけるテンポや音楽的な流れの自由さを指すのであろう。彼の録音を聴くと、音の均一さ、正確さというよりも、音の表情、自由さが感じられる。その当時東京音楽学校の教育では、楽譜通りに正しく演奏することが第一に求められていたのであろう事を考慮すると、彼の演奏が受け入れられなかったのも仕方がないといえる。しかし、一方で大変な期待を持ってジル＝マルシェックスの来日を迎える人々がいた。それは、主として反アカデミズムの考えを持ち、雑誌の発行を中心にフランス音楽の紹介を試みていた音楽愛好家たちであった。

2) 大田黒元雄、小松耕輔によるフランス音楽の紹介

日本におけるフランス音楽の受容が、ヨーロッパの新しい思潮に敏感であったフランス文学者に端を発することは、佐野仁美が『ドビュッシーに魅せられた日本人 フランス印象派音楽と近代日本』²⁵で詳しく論じている。その流れのなかで重要な役割を果たしたのは、音楽評論家の草分けの一人、大田黒元雄（1893-1979）と作曲家で批評家の小松耕輔（1844-1966）であるといえよう。彼らは直接ヨーロッパへ渡り、そこで演奏、研究、評論など新しいものを得て帰国し、その経験をもとに最先端のヨーロッパ音楽の動向を日本へ知らせた。

① 大田黒元雄

大田黒は、大企業家（東芝の創業者）の息子であり、1912年から約2年間、ロンドン大学で経済学を学ぶ傍ら、足繁く音楽会へ通い芸術に親しんだ。この経験をもとにして彼が1915年に著した『バッハよりシェーンベルヒ』は、それまでの日本の音楽界では未知であった同時代のヨーロッパ音楽を重点的に紹介したことで有名である。それに続き、1916年には富尾木知佳の『西洋音楽史綱』、1917年には大田黒の『續バッハよりシェーンベルヒ』によって、フランス音楽について少しずつ記されるようになっていった。

また、1916年に大田黒を中心にして発行された『音楽と文学』は、ドビュッシー、スクリャービンからプロコフィエフに至るまで、当時最先端であった音楽を紹介した。この雑誌について野村光一が以下の様に述べている。

東京音楽学校で出していた《音楽》という雑誌があったな。これは牛山充さん

²⁵ 前掲書。3頁を参照。

の編集なるものだ。ところがドイツ音楽一辺倒なものだから、…新しい西洋の楽壇事情を紹介したんだよ。反抗したわけだ²⁶。

このように、雑誌の刊行においても、アカデミズムと反アカデミズムの対立があったところが興味深い。また、それに付随して自宅サロンで行われた演奏活動『ピアノの夕』では、大田黒がアマチュアながらもドビュッシーのピアノ作品を中心に演奏していた²⁷。

② 小松耕輔

1919年フランスに渡り西洋音楽の研究を深めた小松も、著作においてフランス音楽の紹介に努めた。まず、彼が留学先にフランスを選んだことが注目される。それまでの作曲家たちは、1900年に滝廉太郎（1879-1903）、1910年に山田耕筰（1886-1965）、1920年に信時潔（1887-1965）と、いずれもドイツのベルリン音楽学校を選んでいたのである。小松は、当時のパリ楽壇において新しい音楽を数多く聴き、その時の体験をもとにして、460頁の大著、『現代仏蘭西音楽』を1927年に発表した。さらに同年、主幹として『アルス西洋音楽講座』を刊行している。

大田黒や小松は、ジル＝マルシェックスの初来日に大きな期待を寄せており、『音楽新潮』にジル＝マルシェックスについて投稿し、演奏後には批評を記した。彼らのような海外へ目を向けていた者による紹介、論評は、最先端のヨーロッパの音楽動向について全く知識のなかった日本の音楽愛好家がジル＝マルシェックスの音楽活動を理解する上で一助になったといえよう。

3) 外来演奏家の活動

これまで述べてきたように、日本の音楽界では東京音楽学校を中心にドイツ音楽の受容に懸命になる中で、大田黒や小松のような海外で演奏を聴いた者の著作によってフランス音楽が知られるようになってきた。さらに、1910年代後半からは、外来演奏家による活動が目立ってきたといえる。ここでは、彼等の活動を2つの観点から示す。1つ目は、1917年に起きたロシア革命による亡命音楽家の活動、2つ目は帝国劇場とストロークによる興行である。

²⁶ 野村光一、中島健蔵、三善清達（1978：63）

²⁷ 野村光一、中島健蔵、三善清達（同上：64）

① ロシア革命と亡命音楽家

第1次世界大戦中に起きたロシア革命は、多くの演奏家を国外に排出し、来日する演奏家が現れてきた。これについて野村が以下のように語っている。

日本は連合国側だと言うのでどんどん亡命してきたわけですね。その中にいた演奏家、しかもこれはみんな二流三流の連中なんだけど、彼等が当時のロシアの新しい作品などを紹介してくれたし、テクニックの面でもそれまでわれわれの知らなかったロシア風の演奏というものを紹介してくれた²⁸。

この中で、特筆すべき人物として、マキシム・シャピロ (Maxim Schapiro 生没年不詳) が挙げられる。彼はその後日本に長く滞在し、1932年の第1回日本音楽コンクールで第1位となったピアニスト甲斐美和子 (1913-2012) を育て、近衛秀麿 (1898-1973) と『世界音楽全集』の編集に携わるなど日本の音楽界に貢献した。

② 帝國劇場とストロークによる興行

a プロコフィエフの来日

1918年、作曲家プロコフィエフ (Sergei Prokofiev 1891-1953) が日本を訪れたことは広く知られており、彼の日本滞在については伊藤 (2007) が詳しく論じている。プロコフィエフはアメリカへ行く途中で日本を訪れて約2ヶ月間滞在した。彼は、当時「上海を拠点として東アジアやジャワ、シヤムといったエキゾチックな国でもっとも活躍している興業師」²⁹であったストロークの手配のもと、7月6、7日に帝國劇場、9日に横浜グランドホテルで演奏会を開いており、自作とショパンの作品を演奏した。演奏会の開催は彼の来日後に急きょ決まったことであり、集客が期待された財界人たちが避暑で東京を離れていたため、演奏会場にはあまり客が入らず成功しなかった。プロコフィエフは日本の聴衆について以下のように述べている。

日本人の反応は (概してここでのコンサートの特徴は、あまり知られていない西洋音楽に関心を持ち始めている日本人に、本物の音楽を聞かせる機会を与える

²⁸ 野村光一、中島健蔵、三善清達 (1978 : 80)

²⁹ セルゲイ・プロコフィエフ エレオノーラ・サブリーナ、豊田菜穂子訳 『プロコフィエフ 短編集』、176頁

ことにある)、一方で非常に注意深く聞いているが、その一方で、どんなに注意を払ってもわかっていないのは明らかで、彼らにベートーヴェンのソナタを聞かせようが演奏者の即興を聞かせようが、違いがわかりはしないのである。³⁰

当時の日本の音楽界がプロコフィエフの演奏を理解するにはあまりに時期尚早であったが、彼の来日は、今では歴史的な出来事といえるだろう。彼は、大田黒とも親交を深めてプライベートでもピアノ演奏を披露し、それらは大田黒の著作によって紹介されている。

b 一流演奏家の来日

プロコフィエフの演奏会を主催したストロークは、他にも多くの一流演奏家を日本に呼んだ。彼について野村が以下の様に述べている。

第1次世界大戦中だったかその直後だったか、ユダヤ人のマネージャーでストロークというのが日本へやってきた。それが朝日新聞社の村山さんとコネクションがあったというんだけど、当時じゃ村山さんもどうしようもないものだから、朝日ビールの山本さんを通じて帝劇の山本さんに紹介したらいいんですね。それで帝劇がストロークとタイアップして世界の演奏家を呼ぶようになったというわけです。ユダヤ人の勢力はすばらしかったものだから、それで一流の連中もくるようになったんでしょう。それと、歌舞伎の出し物の変わり目で、稽古のため月末の5~6日劇場が空く。それを埋めようということもあったんですね。³¹

このように、彼の働きによって来日した演奏家は、帝国ホテルで連夜の演奏会を行った。『音楽明治百年史』と『日本の洋楽百年史』をもとに名前を挙げると以下の通りである。

1921年2月16日-18日、3月11日-13日 エルマン (Mischa Elman 1891-1967)

1921年9月21日-29日 露西亜歌劇団

1922年5月1日-5日、5月19日-21日 ジンバリスト (Efrem Zimbalist 1889-1985)

³⁰ 同上、190頁。

³¹ 野村光一、中島健蔵、三善清達 (1976: 87)

1922年11月1日-5日 ゴドフスキー (Leopold Godowsky 1870-1938)

1923年5月1日-5日、18日-20日 クライスラー (Fritz Kreisler 1875-1962)

1923年11月9日-11日 ハイフェッツ (Jascha Heifetz 1901-1987)

1924年12月1日-5日 ジンバリスト・2回目

1925年11月26日-30日 レヴィツキ (Mischa Levitzki 1898-1941)

これらの記録から、世界的なヴァイオリニストやピアニストが日本を訪れたことがわかる。堀内は以下のように述べている。

これまで邦楽の演奏にだけあって洋楽の演奏からはほとんど感じ得なかった「芸の力」を初めて外来音楽家から味わわされた。日本の聴衆は敏感に「芸の力」を感じる。…大正期の新現象として忘れることのできない外来演奏家と外来歌劇団の演奏は、日本の聴衆を非常に教育したのである。³²

ストロークの興行のおかげで、日本では世界一流の演奏家によって初めて西洋音楽の本格的な演奏に接したといえる。しかし、彼らのレパートリーはロマン派の作品が中心であり、ジル＝マルシェックス自身も述べているように³³、いわゆる名人芸を聴かせる演奏であったことも否めない。彼らの活動を概観すると、改めてジル＝マルシェックスの音楽活動が稀有なものであるといえるのではないだろうか。彼らのなかで1925年に来日したロシア人ピアニストのレヴィツキは、ジル＝マルシェックスと同じ時期に来日しており、日本の音楽界は二人の演奏を対比して批評している³⁴。この記述はとても興味深いものである。

³² 堀内敬三 (1968)

³³ Gil-Marchex“Schumann au Japon”*La Revue Musicale*, numéro spécial, N° 161 (1935) p.125

³⁴ 第2章第3節参照

第 2 章

1925（大正 14）年の日本滞在における音楽活動
—フランス・ピアノリズムによる日本初演とその反響

ジル＝マルシェックスは、1925（大正 14）年に当時ドイツ音楽偏重であった日本の音楽界に対し、フランス音楽や近現代の作品を数多く日本初演して大きな衝撃を与えた。この章では、彼の活動について述べるとともに、当時の雑誌記事や新聞記事を精査し、当時来日していた他のピアニストの活動やジル＝マルシェックスの演奏に対する評価、日本人作曲家の発言を分析することで、彼の活動が日本の音楽界へ与えた影響を考察する。

1. 来日目的

1) 薩摩治郎八との交流

ジル＝マルシェックスは、1925 年に初めて日本を訪れた。ドイツ音楽偏重であった日本において、彼の来日はどのように実現したのだろうか。先行研究により、薩摩治郎八（1901-1976）が彼の来日に尽力した事は周知の事実である¹。薩摩治郎八は、大富豪の家庭に育ち、その財力によって 1922（大正 11）年からパリに移り、社交界に参加して華やかに暮した。彼は多くの芸術家と交流しており、ジル＝マルシェックスもその一人であった。

小林茂は、薩摩とジル＝マルシェックスの出会いからジル＝マルシェックスの来日と演奏会開催に至る経緯を、薩摩の遺した遺品などの資料調査をもとに明らかにした²。それによると、1924 年 4 月 15 日に薩摩はマダム・プレヴェのサロンで、ジル＝マルシェックスの妻でモデル、画家であるジャンヌ・ジル＝マルシェックスと初めて出会い、彼女を通して多くの芸術家と親しくするようになった。既に藤田嗣治（1886-1968）などの日本人画家を支援していた薩摩は、「日本人の画家たちの集団とはまた違う、フランス人の芸術家と相識って、しかもその両者を結ぶ位置に自分があることを認識した。」³この思いが、薩摩にとって文化的貢献活動の原動力になったといえる。薩摩は、「ジャンヌを通じて、ジル＝マルシェックスと親しくなり、さらに、ラヴェル、ドラ

¹ 大正 14 年度『財団法人日佛會館第二回報告』にも「美術音楽ニ於テハ佛國ニ學ハサル可カラサルモノ少ナカラサルニ、従来本邦ニ於ヒテハ佛國の音楽ヲ閑却シ居リタルノ感アリ。會々佛國ピアノ名手ジルマル、セツクス氏、薩摩治郎八氏ノ招キニ慶シテ来朝」との報告が寄せられている。

² 小林（2010：171-198）

³ 小林（2010：173）

ージュなどとの交友の中から、ピアニストの日本での演奏会を発想した」⁴。そして薩摩は、フランス政府に交渉し、「仏蘭西外務省及文部省設立仏蘭西音楽普及交換会会長ロベール・ブリュッセル氏」⁵による演奏会への協力を得て、演奏会実現へと向かったのである。

2) 来日の期待を寄せた文化人

ジル＝マルシェックスの来日は、日本の音楽界にどのように迎えられたのだろうか。1925年3月17日付 *The Japan Times* の「昨晚帝国ホテルで、薩摩治郎八が今秋日本を訪れるすばらしい若手ピアニスト、アンリ・ジル＝マルシェックスの来日を期待し、音楽関係者に夕食をふるまった」という報道からも明らかなように⁶、薩摩の働きかけによって、同年3月には既に新聞社4社が写真入りの記事を載せた。そのうち、初めてアンリ・ジル＝マルシェックスの名前を日本に紹介した3月9日付『讀賣新聞』には、以下のように記されている。

(ジル＝マルシェックスは) フランス音楽の精華を日本に紹介し且つ我が國固有の音楽を研究して彼の國に傳へるためフランス政府と東京フランス大使館ヂアンチー代理大使⁷と打合せの結果この重い任命を帯びてはるばる来朝する。

そして、「純藝術的の立場から興行的演奏はやらぬ」⁸という薩摩の談話と「将来作

⁴ 小林 (2010 : 188)

⁵ 1918年、「一群の芸術家・政治家達が文部省芸術局の承認を得て、フランスの芸術活動を国外で発展させるために創設し、外務省の国外活動部と協力して作業を始めた。その後、「1922年に仏蘭西芸術普及交換会が、文部省両省によってつくられ、翌年公益団体として認可された」(小林 2010 : 188)

⁶ 小林茂 (2010) には、薩摩治郎八が駐日フランス大使ポール・クローデル宛の招待状を送ったこと、それに対してクローデルの代理大使ジャンティは、大使館付武官ルノンドーおよび第一通訳官ボンマルシャンとともに、3月16日晩餐への招待に喜んで行くと、3月4日付で返事を出したことが報告されている。晩餐会が開かれた場所については「薩摩邸」ではなく、帝国ホテルであったと推測される。

⁷ Francois Gentil、前述の夕食会で Georges Bonmarchand のスピーチを代弁している。Georges Bonmarchand については『来日西洋人名事典』(日外アソシエーツ株式会社、1995年) 454頁参照。

⁸ 『讀賣新聞』1925年3月9日付。

曲の希望もあるので日本演劇、能狂言も見たい」⁹というジル＝マルシェックスの言葉を掲載した¹⁰。それらは、この演奏会が単なる営利目的ではなく、日仏の文化交流を目的として行われるという前例のない公演である事実を知らせると同時に、その後の彼の音楽活動を予期させるものであったといえよう。

その2ヶ月後には、『音楽新潮』5月号に寄せた薩摩治郎八の6ページに亘る文章によってジル＝マルシェックスの実績が明らかになる¹¹。また、6月号には大田黒元雄（1893-1979）がロンドンで実際に彼の演奏するラヴェルの作品を聴いた記憶から、それは「鋭敏なる繊細な感覚に溢れてみると同時に、熱情に富んだ演奏であつた」¹²と語り、彼の実力を認めた。さらに大田黒は「日本の好楽家は、今日まで想像の範囲を出なかつた現代の音楽について、始めて新しい智識と忘れがたい感銘とを得るであらう。」¹³と演奏会に期待を寄せた。次いで7月号においては、帝国ホテルで行われる6夜の演奏会プログラムが明らかにされた¹⁴。また、このプログラムを「あのやうな曲目をしかも六回も続けて聴くといふ幸運は西洋にみてもさへ滅多に得られるものではない」¹⁵と評した大田黒が、9月号において、演奏曲目中のフランク、ラヴェル、ドビュッシー、ファリヤ、シマノフスキ、ロード・バーナーズ、グーセンスの作品について紹介している。さらに8月号と9月号には、ジル＝マルシェックスの論文「ラヴェルのピアノの技巧について」が小松耕輔の翻訳により掲載された。これは、*La Revue Musicale* 1925年5月号に掲載されたものであり、その僅か3ヶ月後に日本で紹介されたことは驚くべきことである¹⁶。論文には、《水の戯れ》や《高雅で感傷的なワルツ》

⁹ 『讀賣新聞』1925年3月9日付。

¹⁰ 小林茂（2010）には、1925年5月号『婦人画報』に載せられた「今秋来朝する仏国の洋琴家 アンリーヂルマルシェツクス」と題する記事について紹介されている。「この記事が掲載されたことは、この段階で、大使館の協力が得られると確実になったことを意味している。」との記述は、3月に載せられた新聞記事においても既にいえるのではないだろうか。

¹¹ 薩摩治郎八（1925：25-30）同内容の文章が『音楽と蓄音機』9月号、10頁にも掲載された。

¹² 大田黒元雄（1925,6：23）

¹³ 同上

¹⁴ 主幹（柿沼太郎）（1925,7：21-23）。このプログラムは第1日『唯神論者の音楽』、第2日『自己表現の音楽』、第3日『追想の音楽』、第4日『描写的音楽』、第5日『舞踊の音楽』、第6日『現代音楽への捧げ物』と題され、実際の内容とは構成が異なっており、シマノフスキ、バーナーズの作品も含まれている。

¹⁵ 大田黒元雄（1925,9：40）

¹⁶ 英訳で紹介されたのは、1926年1月のことである。詳細は以下の通り。Fred Rothwell 1926
“Ravel's pianoforte technique.” *The musical Times* No.1006

などの作品を演奏する上で必要なテクニックが部分的に紹介され、「ペダルのヴィヴラ
アトが定かなる響を空中に漂はす」¹⁷という説明や「ピアニストたる者は、例へて云
はゞ彼自身で配色した音調のパレットを持つて居ねばならぬ。その色調の變化が無数
で、到底一々數へ上げ得ぬ程である」¹⁸という記述に、彼の持つテクニックや音楽観
を垣間見ることができる。ラヴェルという名前さえ未だ広く浸透していなかった日本
の音楽界において、この論文の内容がどれほど理解されたかは疑問であるが、ラヴェ
ルとごく親しい演奏家による文章が紙面を飾り、10月にはその演奏家による演奏を聴
くことが出来るという期待は、音楽愛好家の間でますます大きく膨らんだのではない
だろうか。そして、10月号の柿沼太郎による記事では、以下のように記された。

六回の獨奏會こそは眞に空前絶後の大偉觀だ。・・私達は氏の來朝に多大の
感謝と期待を寄せると共に、氏の使命が有終の美を結ぶことにいさゝかの疑
念をも持たない。¹⁹

このように『音楽新潮』では、5月号から10月号まで毎号ジル＝マルシェックスに
関する記事が載せられ、その期待は大きなものだったことが分かる。

2. 音楽活動

1) 帝国ホテルにおける6夜の演奏会

ジル＝マルシェックスは、『主観的音楽演奏会 *Consacrés à la musique subjective*』（10
月10日、11日）、『追想的音楽演奏会 *Consacrés à la musique evocatrice*』（10月17日、
24日）、『舞踊音楽演奏会 *Consacrés à la musique de danse*』（10月25日、11月1日）と
題し、帝国ホテルにおいて6回シリーズの演奏会を行った。このテーマ設定は、後の
ジル＝マルシェックスの音楽活動から、彼自身によるものだと推測される²⁰。演奏会
のために作成されたプログラムは、マティス（Henri Matisse 1869-1954）の描いたジル

¹⁷ ジル＝マルシェックス 小松耕輔訳（1925,9：29）

¹⁸ 同上（1925,9：30）

¹⁹ 柿沼太郎（1925,10：7）

²⁰ 第3章第2節参照。

＝マルシェックスの肖像画が表紙を飾り²¹、ジル＝マルシェックス自身による曲目解説が掲載された。そして、マリー・ローランサン（Marie Laurencin 1883- 1956）の描いたプーランクなど、名だたる画家達が描いた作曲家の肖像画や写真が添えられ、51頁にもなる大変豪華なものであった。これには、前述の『音楽新潮』に掲載された薩摩と大田黒による紹介文と小松耕輔の訳によるジル＝マルシェックスの論文も載せられている。

このプログラムの全演奏曲目については、別冊資料に記した。それによると、6夜の演奏会で、16世紀の作曲家フランシスク（Antoine Francisque 1575-1605）²²やリュリ（Jean-Baptiste Lully 1632-1687）²³、クープラン（François Couperin 1668-1733）、ラモー（Jean-Philippe Rameau 1683-1764）、バッハ（Johann Sebastian Bach 1685-1750）、スカルラッティ（Domenico Scarlatti 1685-1757）を始めとしたバロック期の作曲家からモーツァルトとベートーヴェンといった古典派の作曲家、さらにショパン（Frédéric François Chopin 1810-1849）、シューマン、リスト（Franz Liszt 1811-1886）などロマン派の作曲家、そしてドビュッシー、ラヴェル、ファリャ、アルベニス（Isaac Manuel Francisco Albéniz y Pascual 1860-1909）、ストラヴィンスキー（Igor Fyodorovitch Stravinsky 1882-1971）など近現代の作曲家、計35名による93の作品²⁴が演奏されたことがわかる。また、この演奏によって世界初演1曲を含む50曲の日本初演が成し遂げられた²⁵ことになり、この公演は歴史的な意義のある演奏会であったといえる。このとき世界初演された《五時フォックス・トロット；“子供と魔法”による幻想曲 *Five o'clock fox-trot : fantaisie extraite de “L'enfant et les soltilèges”*》が、ラヴェル作曲のオペラ《子供と魔法 *L'enfant et les soltilèges*》²⁶からの抜粋をジル＝マルシェックスが編曲した作品²⁷であったことは前述の通りである²⁸。《子供と魔法》がパリで初演された

²¹ 演奏会プログラムとマティスの肖像画は国立西洋美術館に所蔵されている。

²² 《オルフェの宝》は、ジル＝マルシェックスがピアノ用に編曲した作品を演奏したと推測される。

²³ 《パサカイユ》についても同上。

²⁴ いくつかの小品で成り立っているものは、小品を一曲と数えている。

²⁵ 事実とは異なるが、プログラム表記に基づいて数えた。例えば、ドビュッシーの作品は大田黒元雄が既に演奏していたものも初演と記されている。

²⁶ 初演はモンテ・カルロ歌劇場にて1925年3月21日に行われている。

²⁷ 実際のプログラムに編曲との表記はないが、『音楽新潮』に「ジルマルシェックス編」との記載がある。

²⁸ 第1章第1節参照。

のは 1926 年 1 月であり、部分的ではあるが、パリ市民よりも先に日本国民がその音楽を耳にしたことには大変驚かされる。

この演奏会に足を運んだ文化人は数多く、作曲家の松平頼則や清瀬保二(1900-1981)、柴田南雄(1916-1996)、ピアニストの井口基成(1908-1983)、また音楽評論家の野村光一(1895-1988)、中島健蔵(1903-1979)、小松耕輔、文学者の中野好夫(1903-1985)や小説家の梶井基次郎(1901-1932)などの著書に、その記憶が記されている。一方で、当時の報道としては、例えば 1925 年 10 月 11 日付『都新聞』の記事が挙げられ、「来場者は内外の外交官、斯道の専門家、好樂者等で近来稀にみる大演奏会」であり、ジル＝マルシェックスの演奏は「技巧と感覚に秀で、同情と熱情に富むとの評判は全くの事実で、演奏曲目の組合せの巧妙なると作曲者の精神と人格とを現さうと努めてみる上に、いふにいはいはれぬ絃音の美しさは誰人も魅了せずにはおこなかつた」と記されている。

2) 御前演奏と 15 の演奏会

ジル＝マルシェックスは、帝国ホテルの演奏会シリーズを終えると、東京だけでなく横浜、京都、大阪、神戸を訪れ、各地で演奏会を行った。12 月 23 日付 *The Japan Advertiser* は「多くの私的なコンサートを除いて少なくとも 18 回以上の演奏会を催した」と報告しており、資料調査により 22 公演が確認された(表 1)。

10月3日	来日	11月25日	関西学院ホール(神戸)
10月10日	帝国ホテル(1)	12月1日	大阪中之島中央公會堂
10月11日	帝国ホテル(2)	12月2日	大阪中之島中央公會堂
10月17日	帝國ホテル(3)	12月3日	オリエンタルホテル(神戸) ③
10月24日	帝國ホテル(4)	12月4日	岡崎市公会堂(京都)
10月25日	帝國ホテル(5)	12月8日	送別宴 ④
11月1日	帝國ホテル(6)	12月12日	帝國ホテル(慈善演奏会) ⑤
11月7日	日佛會館	12月13日	帝國ホテル
11月11日	丸の内日本工業俱樂部	12月14日	横濱高等工業学校講堂 ⑥
11月13日	女子學習院(御前演奏) ①	12月15日	日本青年會館 ⑦
11月21日	上野音楽学校講堂	12月22日	報知講堂 ⑧
11月22日	日本青年會館 ②	12月23日	退京

既に先行研究で 14 回の演奏会²⁹については曲目が明らかにされており、本調査によ

²⁹ 小林茂(2005)による。また、同(2010)には、11月22日と12月14日の演奏会が加えて報告されたが、詳細は明らかにされていない。また、「14日は、帰国の船に乗るための横浜に移動して、その横浜で、出発前の最後の演奏会を開いた」という記述は誤りであると考えてよい。

って、その他の8公演（表1① - ⑧）が新たに判明した。全22公演の内容について、詳細を別冊資料に記した。また、この来日で彼が演奏した全曲目を一覧表にした。

新たに判明した公演の中で、特に御前演奏は、フランスにおいて大きく報じられた事実であり注目に値する。ジル＝マルシェックスがこの祝賀会に参加することになった経緯は定かではないが、閑院宮殿下が足を運ばれた11日の演奏会における成功がその一因であると考えられよう³⁰。御前演奏を行ったことは彼の成果の一つとされ、12月23日付 *The Japan Advertiser* や1926年1月23日付 *Journal des débats*、2月15日付 *Paris-Midi* が「アンリ・ジル＝マルシェックスはこれまでどんな優秀な外国人芸術家でさえ許されなかった御前演奏を初めて成し遂げた演奏家である」と記している。

3. 日本の音楽界の反響

これまで述べてきたように、ジル＝マルシェックスは日本滞在中22回の演奏会を行った。ここでは、当時の資料の検証により、彼の演奏が実際にどのように受け入れられたのかを明らかにする。また、彼の発言に対する日本の音楽界の反応についても述べる。

1) 演奏に対する評価

① 新聞掲載の批評から

ジル＝マルシェックスの演奏について、当時の新聞に批評を載せたのは、増澤健美、小松耕輔、平田義宗の3人であり、彼らの演奏批評を読み解くと一つの共通点が浮かび上がってくる。それは、プログラム構成だけでなく作品解釈や演奏方法においても、彼がこれまで来日した演奏家とは一線を画していると評価されたことである。

まず、ジル＝マルシェックスを「先進的ピアニスト」と称した増澤は、以下のように述べた。

バッハ、モーツァルト、ベートーベンを驚くべき個性的解釈を以て演奏し…

³⁰ 『第二回日仏會館報告書』に「日本工業俱樂部ニ演奏会ヲ催ホシタルニ、閑院宮殿下ハ姫宮殿下御同列ニテ御台臨ノ榮ヲ賜ハリ」という一文が載せられている。

デビュツシーを中心とする印象派、ラベル、ルツセルの作品の完全なる解釋者であり、又ストラビンスキーその他急進派の作品の卓越せる演奏家である。…氏はこれ等の音楽の眞精神を知り、その探究的な頭脳と藝術的情感とに依つて最も現代的な夫々の特徴ある音の世界を形成する。…赤い血のみなぎった現代音楽—特に現代フランス音楽を完全なる現代香気を持つて我樂界に與へた最初のピアニストである。³¹

次に彼を「驚くべき音響の詩人」と名付けた小松は以下のように評した。

彼れのピアノ演奏は、いはゆる普通よびなされてゐるピアニストのそれではない。彼れのピアノを通して自己の秘密を語らうとする詩人である。…表現の鋭さと明快性とは、たしかに仏蘭西人のもつ著しき特徴である。彼れは決して情熱におぼれない。明晰な智力が絶えずそれを重視してゐる。そして楽曲の全体を冷静に見通してゐる。³²

そして二人よりも幾分冷静に批評している平田も以下のように記した。

ベートーヴェンの最後のソナタ。…僕にはブゾーニのが脳に染込んでいて、どうも彼に比肩し得るとは思はれないがホフマンよりも数倍力もあり、熱もあり、またデリケートなフランス人らしい解釋で演奏した點は敬服する。ショパンのプレリュードとエチュード。是等は餘程自信のあるものらしく見受けられた。氏獨特の個性は遺憾なく、大胆に演奏された。…ドイツ人の弾くドイツ曲、フランス人の弾くフランス曲、これは各民族性の發露であつて決して他民族の侵し得ない領域を各自に持つてゐる。³³

³¹ 増澤健美「ゲルマルシエツクスを聴く」『東京朝日新聞』1925年10月15日付。

³² 小松耕輔「音楽評 驚くべき音響の詩人ゲルマルシエツクス(2)」『東京日日新聞』1925年10月15日付。

³³ 平田義宗「ゲル・マルシエツクス氏のピアノ演奏を聴く(主観的音楽第一回演奏)」『讀賣新聞』1925年10月15日付。

これらの記述から、ジル＝マルシェックスは近現代の作品はもちろん、古典派やロマン派の作品をも独自の解釈によって演奏し、日本の音楽界へ提示したといえよう。また、その解釈による音楽の世界を表現するための奏法として、小松が次のように述べている。

彼れの技巧のうちでも、我々の最も感服するのは、タッチとペダリングである。彼れが鍵盤に触れるまでのあの一瞬時の呼吸、そして音になつて現はれた刹那の感情。我々はたしかに一種の歓喜の戦慄を禁じ得ない。…彼れのペダリングとタッチングの巧妙さは、その音響に無限の変化と驚くべき多様の色彩と陰影とを與へる。³⁴

これは、ジル＝マルシェックスの論文を翻訳した小松ならではの分析といえるだろう。

② レヴィツキとの比較から

『音楽評論』No.4には、ジル＝マルシェックスと同じ時期に来日したロシア系アメリカ人ピアニスト、レヴィツキ (Mischa Levitzki 1898-1941) との対比が13人の音楽関係者³⁵によって述べられている³⁶。まず記事の趣旨について以下のように説明が記された。

レヴィツキイとジル・マルシェツクスの二氏は、両方とも青年であり、しかも傾向は全然相反してられるものと見られます。この両者を「孰れが上手か」といふ対比の意味ではなく、コントラストな両者に對して、どういふ感想があるかといふやうなつもりで楽壇の諸家に御回答を願ひました。³⁷

2人のピアニストは、どちらも帝国ホテルで連夜にわたる演奏会を開いた。レヴィツキは、古典派、ロマン派を中心にしたプログラムを演奏しており³⁸、この聴き比べは、日本

³⁴ 小松耕輔「音楽評 驚くべき音響の詩人ヂルマルシェツクス (3)」『東京日日新聞』1925年10月16日付

³⁵ 近衛秀麿、野村光一、小泉洽、鈴木賢之進、大田黒元雄、堀内敬三、門馬直衛、弘田龍太郎、柿沼太郎、高折宮次、増澤健美、牛山充、小松耕輔

³⁶ 近衛秀麿他 (1925, No.4 : 6-11)

³⁷ 同上 (同上 : 6)

³⁸ 大正14年11月26日-30日まで帝国劇場において5夜に亘る演奏会を行っている。プログラムに

の聴衆にとって大変興味深いものであったに違いない。

回答者の中には、どちらかしか聴けず対比を述べていない者もいるが、例えば、小泉洽と大田黒元雄によって、レヴィツキは「テクニックの名人」「洗練された技巧を持つ嫌みのないピアニスト」であるのに対し、ジル＝マルシェックスは「心の名人」「ピアニスト中の稀に見るピアニスト」と称された。

またその他にも、ピアニスト井口基成が自伝で記した、妹の井口愛子との会話のなかで、ジル＝マルシェックスとレヴィツキに対する評価が示されている。

(ジル＝マルシェックスの演奏について) ぼくたちはフランスの古典から近代までの作品をあまり知らないものだから、非常に参考になり知識を得た。繊細で情感豊かな演奏でありぼくは割合に感激した。ところが妹はその当時ミッシェル・レヴィツキーというピアニストがやはり帝国劇場で演奏会を開いたが、それに比べたらジル＝マルシェックスの方は駄目だというので議論したことがある。たしかにレヴィツキーはテクニックはしっかりしていて素晴らしかったけれど、なぜか冷たい印象だった。けれども、それよりも自分としてはピアノ音楽とその演奏についてばかりではなく、広く音楽すべてについての世界の動きに次第に知識が芽生えていたものだから、ジル＝マルシェックスの方により興味が惹かれたのである。³⁹

これらの発言から、ドイツ、ロマン派音楽を巧みなテクニックで演奏したレヴィツキと、フランス音楽、近現代音楽を中心としたプログラムを情感豊かに演奏したジル＝マルシェックスという対比を汲み取ることができるのではないだろうか。

2) ジル＝マルシェックスの発言に対する反応

ジル＝マルシェックスは、日本滞在中インタビューや取材に応じ、新聞や雑誌に言葉を記している。その中で、彼は演奏家の姿勢として以下のように述べた。

については、秋山龍英（1966）を参照。

³⁹ 井口基成（1977：47-48）

譜面に現はされてある記號を、たゞ音に再現しようとのみかゝつてゐるのではないのです。私はその作品中から自己を発見しようといふのです。そして自己を擲み出し得たならば、ピアノの上にその自己を擴充して行きます。⁴⁰

これは、音符それぞれを正確に演奏するというよりも音がつくりだす音楽の世界をどのように表現するかにかゝる重きをおくという自身の芸術観の表れであり、日本の音楽界が受けた印象、例えば「色彩感」や「陰影」そして「音楽の心髄」というイメージに結び付いたと考えられる。

加えて、彼は身をもって体感していた当時のフランス音楽の傾向についても以下のように語っている。

シューマン、シューベルトの時代に於いては旋律が主となつてゐて、それに對する和聲は従のものだといふ傾がありました。そしてその形式は…表面的に複雑なものであつて全体としては平面的のものです。けれど現代の新運動を見ますと、表面的にみるならば単純です。けれど一度中に入つてみれば實に複雑した感情が盛られてゐます。既に旋律とその和聲との間に主従の關係はありません。…過去の音楽は平面的でした。現代のは立體的です。その立體的のものゝの中に一つの流れを見出さうとしてゐるのです。⁴¹

そして、この言葉を聞いた鹽入龜輔は、「成程と思つた。美術の主流は既に後期印象派となつてゐる。未来派、立體派、表現派、数々の新運動が起こつて来て、或ひは後期印象派に代わつて主潮となるかもしれないと云ふ有様である。それがなぜ音楽のみ、過去のロマンティシズムを脱してはならないのであらうか」⁴²と述べ、「既にヂルマルシエツクス氏の語つたパリーの樂況は印象派impressionismにまで進んでゐることを見せてゐる。此

⁴⁰ 鹽入龜輔 (1925,11 : 17-18)

⁴¹ 同上、(同上 : 17)

⁴² 鹽入龜輔 (1925,11 : 17-18)

れが本當だ。」⁴³と衝撃を受けた。ジル＝マルシェックスによって知らされたヨーロッパの楽壇の最新の動向は、日本の読者にも大きな驚きをもって受け止められたといえる。

また、ジル＝マルシェックスはこれからの西洋音楽の動向として「嘗てはドイツ音楽の影響をうけてみました。現代はニグロ音楽の影響をうけてみます。が近き将来は日本の影響をうけるであらうと見てみます。」⁴⁴と述べて、日本音楽の重要性を挙げた。さらに「元来日本樂は全然メロディーとリズムだけで出来てゐます、そしてハーモニックな處はその中に無いやうです」⁴⁵と分析したうえで、最近ストラヴィンスキーが「日本樂のメロディックな處を取入れてゐる」⁴⁶ことを紹介し、日本の作曲家に「欧州の音楽のハーモニーを取り入れよ」⁴⁷と提言している⁴⁸。

4. 音楽界への影響・貢献

以上のように、ジル＝マルシェックスの音楽活動は当時の日本の音楽界に対して大きな衝撃を与えた。ここでは、彼が日本を去った後の記事や日本の音楽界に起こった動きに注目し、彼が日本の音楽界へ与えた影響を考察する。

1) フランス留学への道標

ジル＝マルシェックスの帝国ホテルにおける演奏会プログラムには、エコール・ノルマル音楽院の宣伝記事が載せられた。これには「各國の学生を年齢を問はず無試験にて入学を許下す」との一文と、ピアノ科教授として「M.I.PHILIPP M.A.CORTOT M.L.REVY」の名前が記され、「入學御希望の向は直接巴里同校宛或は東京市神田區駿河臺鈴木町二十一番地薩摩治郎八宛御照介の事」と案内が載せられている（写真）。

⁴³ 鹽入龜輔（1925,11：18）

⁴⁴ 同上（同上：18）

⁴⁵ 「静かなる聴衆 私の藝術が判るのか—佛國ピアニストの疑ひ」『時事新報』1925年10月15日付。

⁴⁶ 同上。

⁴⁷ 同上。

⁴⁸ これらの発言は、彼が行った日本音楽研究の発端となっていることから、第5章第3節で詳しく述べる。

この記事がどれほどの音楽家（を目指した若者）の関心を集めたのかはわからないが、実際にエコール・ノルマル音楽院への繋がりが日本において提示されたということはこれまでになく、注目すべきことである。

また、ジル＝マルシェックスの離日後、1926年2月15日付 *Paris-Midi* は以下のように報じた。

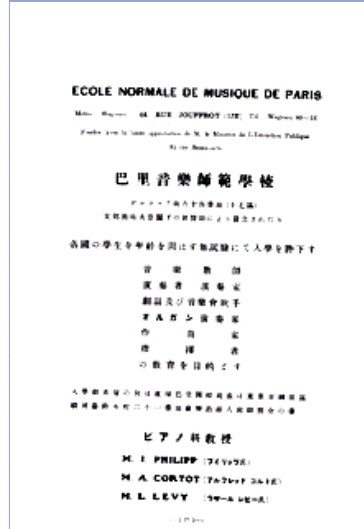
ジル＝マルシェックスがクープラン、ラモーからドビュッシー、ラヴェルに至るまで私たちの代表的な芸術家たちを知らせ、親しみを持たせたという点で、日本に一種の音楽の革命を引き起こしたことは確かだ。この発見によって驚嘆させられた東京の若い人々はフランスに音楽を学びに行くことを決めた。

実際に、原智恵子（1914-2001）と宅孝二（1904-1983）は、パリでジル＝マルシェックスにピアノを教わった⁴⁹。なかでも、当時天才少女と呼ばれた原智恵子の留学は、1926年1月24日付『東京朝日新聞』に「天才ピアニスト少女 遙々沸國へ ジルマル・シェツク氏に発見された千枝子[マ]さん音楽修行の旅に」と大きく採り上げられた。彼女は、教育熱心な父とともに日本滞在中のジル＝マルシェックスの元を訪れて演奏を披露した。その演奏を聴いた彼は、「この子はきっともっと伸びるはずだ…もし留学させる気があるのならばパリに住む自分の家を訪ねてくるように」と声をかけた⁵⁰。そして、原は1927年にジル＝マルシェックスの元へと旅立つことになったのである。

2) 作曲界への働き

ジル＝マルシェックスの演奏を聴いたときは10代、20代であり、その後日本の音楽界で活躍した作曲家たちの音楽活動からも、ジル＝マルシェックスによる影響を発見

写真 プログラムに載せられた広告



⁴⁹ 細川周平・片山杜秀監修（2008：397）

⁵⁰ 石川康子（2001：20）

することができる。

「そのときにそのような刺激を、われわれの年代の作曲家は受けた」⁵¹と述べた松平頼則（1907-2001）は、慶応義塾大学在学中にこの演奏会を聴き、その後、大学を中退して本格的に作曲家の道を進むことになった。さらに、松平はジル＝マルシェックスが2度目の来日中であった1931年4月に第1回ピアノリサイタルを開いて、ドビュッシー、ラヴェル、サティ、オネゲル、プーランクというフランス近現代音楽、そして最後に自作曲を演奏するというジル＝マルシェックスと同じスタイルのプログラムを披露している⁵²。また、のちにジル＝マルシェックスと親交を深めることとなる⁵³大澤壽人も、当時、関西学院の学生であり、母校のホールで彼の演奏を聴いて作曲家を志した⁵⁴。

それに加え、ジル＝マルシェックスの演奏したフランス音楽を聴いて、「これまで自分が探し求めてみたのはこんな音楽ではなかつたろうか…それまで聴いていたドイツ音楽の重苦しさから解放されてこんなにも明るい自由な音楽があるのかと知った」⁵⁵石田一郎（1909-1990）⁵⁶や「大いに感激した。…フランクの人となり音楽辞典で知り、それからフランス音楽を見直すようになり、ドビュッシーやフォーレに入つていった。」⁵⁷と述べた清瀬保二（1900-1981）も、彼の演奏に感銘を受けたことが、その後の作曲活動に対して影響を与えたと言えるのではないだろうか。

5. まとめ

ジル＝マルシェックスは約3ヶ月の日本滞在中、帝国ホテルでの演奏会を始め22回の演奏会を行い、総数137曲を披露したことが明らかになった。その演奏活動自体が一人の演奏家の成し遂げた偉業といえるが、これを当時ドイツ音楽が主流であった日本の

⁵¹ 松平頼則、湯浅譲二（1969,6 ; 30）

⁵² 松平頼則はその後もジル＝マルシェックスのレッスンを受け、「ドビュッシーのプレリュードの演奏方法（ジル・マルシェックス氏に據る）」『音楽新潮』1932年3月、4月を記した。詳しくは第3章第4節参照。

⁵³ 第5章第2節参照。

⁵⁴ 序論参照。

⁵⁵ 石田一郎（1935,1 : 88）

⁵⁶ 細川周平・片山杜秀監修（2008）「ジル＝マルシェックスの音楽会を観て作曲を志す」との記載がある。

⁵⁷ 増澤健美、中島健蔵、清水脩、平島正郎、吉田秀和（1956,8 : 70）

音楽界における出来事として捉えたとき、さらにその重要性が増すのではないだろうか。彼が披露したバロック期から始まる音楽史を網羅したプログラムは、その構成によって偏重のないピアノ音楽の歴史を語り、彼のもつ音楽観や新しい奏法による演奏は、バロック、古典派、ロマン派の作品の新たな魅力を伝え、近現代の作品への興味を抱かせた。また、彼の来日は、後年日本の音楽界で活躍することになる日本人音楽家のフランス留学への道を切り拓くきっかけとなり、彼の音楽活動は、後に日本の作曲界を牽引する存在になる青年たちに影響を与えたといえよう。

第 3 章

1931（昭和 6）年-32（昭和 7）年の日本滞在における音楽活動
—レクチャー・コンサートと松平頼則、須永克己への影響

ジル＝マルシェックスが再び来日した 1931（昭和 6）年、日本ではラジオ放送¹や一般に普及しはじめたレコードによって音楽が楽しまれるようになっていた。作曲の分野でも、1930（昭和 5）年には新興作曲家連盟（現・日本現代音楽協会）が発足し²、より本格的な活動が見られるようになる。一方、1925 年のジル＝マルシェックスの初来日を経て、日本がドイツ音楽偏重であったことを把握したフランス外務省は、彼を日本に派遣し、フランス音楽の普及を目指した。この章では、彼がレクチャー・コンサートを主とした音楽活動によって日本の聴衆に行った働きかけを明らかにし、どのような影響を与えたのかを考察する。

1. 来日目的とスケジュール

1) 来日に至る経緯

ジル＝マルシェックスは、初来日した 1925 年から 6 年後の 1931 年に再び日本を訪れた。この 6 年間、彼はヨーロッパ各地で演奏活動を行った。また、1927 年-30 年にはエコール・ノルマル音楽院で教鞭をとっており、1929 年 11 月から 12 月にかけて 5 夜の演奏会シリーズを行っている（写真 1、2）。

プログラムは、第 1 夜が、バッハ、ショパン、ドビュッシーの前奏曲、第 2 夜が、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ 5 曲、第 3 夜が、ショパンのバラード全 4 曲と練習曲集全 24 曲、第 4 夜が、シューマンの作品、第 5 夜が、モーツァルト、ブラームス、フランク、ラヴェル、リストの作品

写真1 プログラム表紙



写真2 プログラム内容

PROGRAMME	
Vendredi 22 Novembre 1929, à 9 heures du soir	
PREMIER RECITAL	
12 Préludes (Extraits de différents livres imprimés)	J. S. BACH
24 Préludes op. 28	Fred. CHOPIN
12 Préludes	Claude DEBUSSY
Vendredi 29 Novembre, à 9 heures du soir	
RECITAL BEETHOVEN	
Sonate en ut mineur op. 27 n. 2	BEETHOVEN
Sonate en ré mineur op. 31 n. 2	BEETHOVEN
Sonate en la mineur op. 37	BEETHOVEN
Étude Appassionata	BEETHOVEN
Sonate en mi bémol maj. op. 51	BEETHOVEN
Les Adieux, L'Adieu, Le Retour	BEETHOVEN
Sonate en ut mineur op. 111	BEETHOVEN
Vendredi 6 Décembre, à 9 heures du soir	
RECITAL CHOPIN	
Les 3 Ballades	CHOPIN
Les 24 Études op. 10 et op. 25	CHOPIN
Samedi 14 Décembre, à 9 heures du soir	
RECITAL SCHUMANN	
Études Symphoniques en forme de variations op. 13	SCHUMANN
Scènes d'enfance op. 15	SCHUMANN
Fantaisie en ut majeur op. 17	SCHUMANN
Carnaval op. 9	SCHUMANN
Vendredi 20 Décembre, à 9 heures du soir	
CINQUIÈME RECITAL	
Fantaisie en ut mineur	MOZART
Variations sur un thème de Paganini	BRAMMS
Les 2 Caprices	César FRANCK
Prelude, Choral et Fugue	Maurice RAVEL
Cinque de la Nuit	LISZT
La Légende de St-François-de-Paule marchant sur les flots	LISZT
La Campanella	LISZT
Rhapsodie Espagnole	LISZT

¹ 1925 年開始。

² 中心となったメンバーとして、箕作秋吉、清瀬保二、橋本國彦、松平頼則が挙げられる。

によって構成されている。

これだけ多くの、内容の濃い曲目を演奏したことには驚かされる。この演奏会についてアンドレ・クーロワ（André Coëroy 生没年不詳）は、以下のように評した。

彼は5夜の演奏会において、自身のもつ知性、技術によって新しい時間を作りだした。彼は、この時代の最もすばらしい演奏家の一人である。彼は、磨かれた技術、練り込まれたプログラム、コントロールされた感情によって自らが稀有な演奏家であることを示した³。

これらの資料から、パリ楽壇における彼の評価が、以前の来日時とは比較にならないほど高くなっていたことがわかる。

彼は、1930年にパリを発ち、ウィーン、ベルリン、モスクワ、レニングラードなどでの演奏を経て、1931年3月に日本に到着した。フランスでは、彼の各地での演奏会について報道がなされている。モスクワで25回の演奏会を成功させた彼は⁴、3月17日に日本へ到着し、約1ヵ月間日本に滞在した。そして彼は一度日本を離れた後、10月に再来日した。10月6日付『東京朝日新聞』は、彼が、日佛會館、音楽同好会、放送局の人々に出迎えられて来日したことを報じ、『大阪朝日新聞』は、彼の談話として、「紅葉の美しい日本にまた来ました。私は日本が非常に好きで今回は二ヶ月位演奏と音楽講演に行脚をするのを待ち切れぬ思ひで喜んでゐます。」⁵と記した。

2) レクチャー・コンサートに重点を置いた音楽活動

ジル＝マルシェックスはフランス外務省の派遣により来日し、その目的は「佛蘭西近代音楽ノ紹介トラテン系楽人ノ音楽ニ對スル解釋ノ紹介」⁶であった。

日本では、彼の来日について以下のように報じられている。

今回の来朝は単なる演奏旅行ではなく、フランス外務省の囑託で欧州主要都

³ *Paris Midi* 1929年12月30日付。

⁴ *Paris Midi* 1931年2月23日付。

⁵ 『大阪朝日新聞』1925年10月6日付。

⁶ 『財団法人日佛會館第八回報告書』1932年3月、8頁。

市の各大学に講演を続けてきたので、我國でも日佛會館等で講演會を開くことゝなつてをり、フランス大使館でもマルテル大使以下が非常に乗気になつて奔走してゐる。⁷

一方フランスにおいても、「ジル＝マルシェックスの講演旅行」⁸の見出しで、彼の訪日について以下のように報じられた。

彼は日本に招待されて大学で一連の音楽についての講演や演奏會を開催し、レッスンをを行う。ジル＝マルシェックスはその後、世界各地でコンサートの長い巡業を行う。彼は8ヶ月後にしかフランスに戻つてこない。

これらの資料からも読み取れるように、今回の来日は演奏會のみが開催された初来日とは異なり、レクチャー・コンサートが行われることに重点が置かれていたといえる。

3) フランス政府による日本の音楽界への関心

なぜジル＝マルシェックスは、レクチャー・コンサートの形式にこだわったのか。その答えの手掛かりとなる資料がある。それはパリ国立図書館所蔵⁹のマーテル (Martel) 在日フランス大使からブリアン (Briand) 外務大臣に宛てた 1931 年 12 月 18 日付の手紙¹⁰である。全文は資料編 (119 頁) に掲載したが、以下、手紙の内容を抜粋する。

自らの芸術的伝統に配慮し、西洋の様式を吸収しながら西洋人と肩を並べようという野心をもつ (日本) 国民に対して、この 20—30 年の間、音楽の分野でドイツ人が自分たちの考えを吹き込むことができたことができたとしても、ドイツ人はヨーロッパでは、唯一の創造者、あるいは巨匠ではないということ

⁷ 『東京朝日新聞』 1931 年 3 月 17 日付。

⁸ *Chauteclès* 1931 年 9 月 12 日付。

⁹ フォンモンパンシエコレクション Fonds Montpensier
<http://rasp.culture.fr/sdx/rasp/document.xsp?id=f1179302319960> (2013 年 6 月 6 日アクセス)

¹⁰ Œuvres No.64 Concerts de propagande donnés par M.Gil Marchex à Tokio 8 Décembre 1931 M.D. de MARTEL, Ambassadeur de la République Française au Japon à Son Excellence Monsieur BRIAND Ministre des Affaires Etrangères à Paris

示すことは意味があります。そして、日本人がその巨匠を知りたい、学びたいと大変興味を抱くであろう独自の楽派を、フランスも生み出したことを示すのは重要であるでしょう。

この手紙からフランス外務省は日本音楽界がドイツ音楽中心であったことを把握した上で、ジル＝マルシェックスを日本に派遣したことがわかる。1925年の彼の初来日は、薩摩治郎八の交渉によってフランス政府の支援を受けたものであったが¹¹、1931年の彼の来日に対する援助はフランス政府主体で行われたものであることを示唆している。フランス政府は自国芸術の対外宣伝の一環として、ジル＝マルシェックスを世界各国に派遣したが、この手紙から、日本に対しても大きな関心を寄せていたことが示されている。

4) コンサート・スケジュール

マーテル大使の働きかけが実を結び、ジル＝マルシェックスは1ヵ月という短い期間に東京の他、大阪、神戸、京都を訪れ、12回の公演を行った(表1)。そして10月の再来日においては、約4ヶ月の滞在中、名古屋、京都、大阪、神戸、福岡と全国各地を訪れ、京城、奏天、大連へも足を運んだ。またラジオ放送にも3回出演して演奏を披露している。(表2)。

3月17日 来日	4月11日 朝日會館(大阪)
3月18日 華族會館	4月14日 神戸下山手通青年會館
3月21日 朝日新聞社講堂	4月15日 京都帝國大学
3月23日 華族會館(共演 林龍作)	4月21日 東京帝國大学
3月28日 日佛會館	4月25日 東京音楽学校
3月30日 ラジオ放送出演	4月27日 シベリヤ經由で帰国
4月7日 朝日新聞社講堂	

10月5日 シベリヤ鉄道で来邦	10月30日 文化學院	12月4日 土佐堀 Y.M.C.A.ホール
10月6日 ラジオ放送出演	11月13日 名古屋医科大学	12月7日 土佐堀 Y.M.C.A.ホール
10月13日 東北帝國大学	11月14日 名古屋市公會堂	12月8日 土佐堀 Y.M.C.A.ホール
10月17日 東北帝國大学	11月22日 東京音楽学校	12月9日 京都帝國大学
10月19日 朝日新聞社講堂	11月25日 日本青年會館	1月6日 華族會館
10月22日 文化學院	11月26日 日比谷公會堂	1月12日 ラジオ放送出演
10月23日 文化學院	12月1日 慶応義塾大学	1月14日 日本青年會館
10月26日 文化學院	12月2日 土佐堀 Y.M.C.A.ホール	2月7日 横濱出帆海路帰国
10月27日 文化學院	12月3日 土佐堀 Y.M.C.A.ホール	

¹¹ 第2章第1節参照。

2. レクチャー・コンサートの概要

ここでは、今回の来日で、最も特徴的な活動である5日間のレクチャー・コンサートと、『フランス人と日本人の感受性』をテーマにしたレクチャー・コンサートについて述べる。その他の講演及び演奏活動については、別冊資料に記す。

1) 東京と大阪における5日間のレクチャー・コンサート

ジル＝マルシェックスの1931-32年における日本滞在のうち、最も内容が充実した企画は、東京（文化學院）と大阪（土佐堀Y.M.C.Aホール）で行われた5日間にわたる『音楽解釈についての講義』である。これらのレクチャー・コンサートは「国際音楽會聯盟Bureau International de Concert」が斡旋したものであり、それぞれ24ページと12ページにわたる豪華なパンフレット（写真2、3）が作られた。

東京のパンフレットには「昨年高野武郎氏が巴里に於て其地のBureau International de Concertと契約し、その東洋に於けるエジントとなりましたので、此度の演奏會も其のエジントを通じて斡旋」したと記されている。

写真2 東京・パンフレット表紙

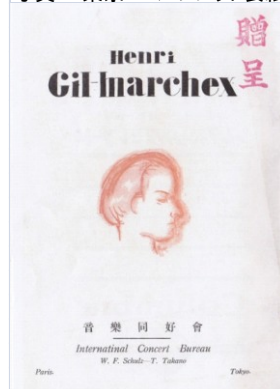


写真3 大阪・パンフレット表紙



① コルトーと公演関係者からの期待

レクチャー・コンサートの内容は、エコール・ノルマル音楽院でコルトーの主宰するピアノ科のために、彼の依頼を受けて講義したものに基づいており¹²、それぞれのパンフレットには、彼からジル＝マルシェックスにあてた直筆の手紙とその訳文、二人の並んだ写真が載せられた¹³。

コルトーは、以下のように記している。

貴兄の日本訪問、エコール・ノルマルで私が創始した教授法を、浚瀾として理

¹² 「ジルマルシェックスに依る五つの音楽解釈についての講座」『月刊楽譜』第20巻第10号128頁。

¹³ 『月刊楽譜』第20巻第10号にも載せられている。

解力のある日本の若い人達の前に示すことは、貴兄の實力に十分な信頼を持つてゐる私は現在其処へ行かれない迄も、貴兄が行かれることによつて慰められます。…貴兄が自身、私に示してくれた多くの實證に、また教育に對する驚くべき天稟に、満腔の信頼を持つてゐる私は、貴兄が佛蘭西の音樂的文化を日本に紹介するために選ばれたことを慶賀せずにはをられません。

この佛蘭西の音樂的文化こそは貴兄が私に話してくれたやうに、あの偉大にして高貴なる國に於ける西洋音樂研究の近年の驚く可き發達に對して、まさに有効に寄與することが出来、また、寄與しなければならないものでありませう。

世界的ピアニスト、コルトーの来日は、1952年まで待つことになったが、彼の名声は既に日本でも広く知られていた。この年には彼が著した「クロード・ドビュッシーのピアノ曲」が『月刊楽譜』に掲載されている¹⁴。

一方、大阪のパンフレットにはBureau International de Concertのディレクターのシュルツ(W. F. Schulz)の言葉として、「コルトーを最もよく知るジル＝マルシェックスに依て、同方法に依る講義が我々の為に為される事は、何と云つても我樂壇近来の快事と云はなければならない」と彼の活動に對する期待が記されている。

② レクチャー・コンサートの内容

ジル＝マルシェックスは、『音樂解釈の講義』というテーマ設定の理由について、以下のように説明した。

樂器演奏上の技術を賢く進歩させる迅速且つ的確な唯一の方法は技術そのものを嚴密に詩的解釈の配慮に従はせるにあると私は信じてゐる。技術が種々の變化を與へられ、練り和らげられ、演奏にあたつて様々な色合の出すことの出来るのは、實に此の方法に依つてである。そして此の様々な色合いなるものこそ、何等かの部類に属する音樂作品への理解を容易ならしめ、且つそれを浚漉たらしめる唯一のものである¹⁵。

¹⁴ アルフレッド・コルトー、松本太郎訳『月刊楽譜』第20巻第4号、第6号、第7号に掲載。

¹⁵ ジル＝マルシェックス、尾崎喜八訳「音樂解釋の講義に就いて」文化学院講演プログラム、5頁。

そして、演奏作品を「描写的作品」や「童心の感銘による作品」などに分類し、プログラムを構成した。これらの分類は、1925年に行った帝国ホテルでの演奏会における3つのテーマ設定に通じている¹⁶。大阪のパンフレットには「東京に於て此の企は…非常な賞賛と感謝の内に終始した…今同じプログラムを以て関西の諸子に…胸の奥深く得らるゝ何物かを期待する」とあるが、東京と大阪におけるプログラムの表記には若干の違いがあるため、それぞれについて内容を報告する。

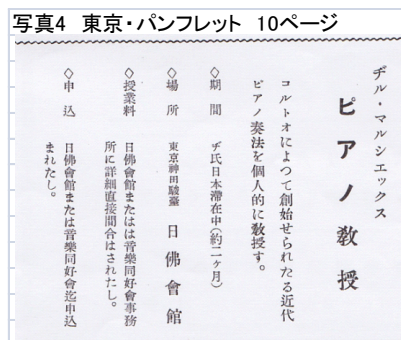
a 東京（文化學院）

ジル＝マルシェックスは、文化學院主催フランス大使後援により、表3のテーマで5日間のレクチャー・コンサートを行った。この公演では、聴講者として200名が募集され、パンフレットには、テーマに「該当する代表的な作品を抜粋して演奏しつゝ、解釋と註解を加へながら講義に生彩を與へる。」として以下の作曲家名が載せられている（表記は原文の通り）。

表3 文化學院(10月22日-30日)
第1講(10月22日)
描写的作品及び宗教的感銘による作品についての解釋
第2講(10月23日)
感傷的表現の作品及び文學的感銘による作品についての解釋
第3講(10月26日)
自然及び可視的現實の感銘より生れたる作品についての解釋
第4講(10月28日)
傳説的作品及び幻想的性質の作品についての解釋
第5講(10月30日)
童心の感銘による作品及び民俗の感銘による作品についての解釋

バッハ、ヘンデル、クーラン、ラモー、モーツァルト、ベートーヴェン、ウェーバー、メンデルスゾーン、ショパン、シューマン、リスト、ブラームス、フランク、シャブリエ、ドビュッシー、アルベニス、ラヴェル、ファリャ、グラナドス、バルトーク、プーランク、ミヨー、グーゼンズ、イベール、プロコフィエフ、シマノフスキ、マルティイニ、グラドステイン、ラフマニノフ、リアプウノフ、ウェブリック、フンベルト、アルレンデ、カセッラ、テデスコ

また、プログラムの他にもフランスの新聞に載せられたジル＝マルシェックスの演奏批評（三瀧末松訳）を集めた「巴里樂壇の見たるジル・マルシェックス演奏批評」が載せられている。パンフレットには、写真4のように個人レッスンの申し込み方法についても載せられた。



¹⁶ 第2章第2節参照

b 大阪（土佐堀Y. M. C. Aホール）

ジル＝マルシェックスは、12月22日から28日までのうち5日間に亘りレクチャー・コンサートを行った。プログラムは表4のとおりである。出席した近江屋二郎は、「第1日目は五十名餘りでしたが、日を重ねるに順ひ、人数が増して来て、最後の日は六十四名になつてゐた…この事實は、純な眞に藝術家らしい講演者に対して、思はぬ感激を與へたらしく、後半の二日といふものは、二時間の予定がぎつしり三時間に延びて、寧ろ、聴者に満喫を與へるところか、のぼせさしたほどだった」¹⁷と報告している。

表4 12月2日-8日・土佐堀Y.M.C.Aホール			
第1回(12月2日)宗教的感銘による作品の解釋		第4回(12月7日)童心の感銘に依る作品の解釋	
バッハ	プレリユードとフーガ	シューマン	子供の情景
ベートーヴェン	ソナタ 作品111	ゲーセンス	万華鏡
フランク	前奏曲 コラールとフーガ	ショパン	子守歌
リスト	水の上を歩くパオラの聖フランチェスコ	バルムグレン	子守歌
ドビュッシー	沈める寺	グラドステイン	子守歌
セヴラック	春の墓地の片隅 組曲「ラングドックにて」より	tousman(ママ)	子守歌
		ドビュッシー	雨の庭、ゴリウオーグのケーキウォーク
		ブーランク	三つの無窮動
第2回(12月3日)描寫的作品の解釋		幻想的性質の作品に就ての解釋	
クーブラン	お気に入り、翻るバヴァレ		
ダカン	かっこう	リスト	メフィスト・ワルツ
ウェーバー	舞踏への招待	プロコフィエフ	つかの間の幻影
シューマン	謝肉祭	ラヴェル	夜のガスパール
ドビュッシー	グラナダのタベ、西風の見たもの、ミンストレル	第5回(12月8日)民衆的感銘に依る作品の解釋	
イベール	めぐり逢い	ラモー	ミュゼットとタンプリン
モンボウ	郊外	シューベルト	美しきウインの夫人への讃歌(ママ)
ストラヴィンスキー	ピアノ・ラグ・ミュージック	ショパン	マズルカとポロネーズ
		リスト	ハンガリー狂詩曲 第2番
		ファリャ	アンダルシア狂詩曲
第3回(12月4日)		アルベニス	トゥリアーナ「イベリア」第2巻第6番
モーツァルト	幻想曲 ハ短調	アルレンデ(ママ)	トナダス (チリ民謡の性格の12のトナーダス)
ベートーヴェン	ソナタ 作品57「熱情」	ミヨー	ブラジルの郷愁
シューマン	幻想曲 作品17	テデスコ	ピエディグロッタ
ショパン	ソナタ ロ短調 作品35	バルトーク	ルーマニア舞曲
フォーレ	ノクターン 第6番	ウェプリック	ロシア舞曲
シエーンベルク	6つのピアノ小品		

2) 『フランス音楽と日本人の感受性』

ジル＝マルシェックスは、『フランス音楽と日本人の感受性』をテーマに、日仏會館（3月28日）と京都帝國大学（4月15日）でレクチャー・コンサートを行った。ここでは、彼が何を伝えたのかを講演筆記¹⁸をもとに考察する。

まず彼は、日本人に哲学的で理念的なものとして捉えられてきたドイツ音楽とフランス音楽を以下のように比較した。

¹⁷ 近江屋二郎（1932,第4巻第2号：121）

¹⁸ ジル＝マルシェックス、記者不明（1931,第3巻第5号：16-21）

フランスの音楽は、胸に手をあてるとか、祈りのために手を合せるとか、軽蔑をあらはすためにまばたきをすとか云ふ身振りの様に、容易に理解し得る物真似の音から組み立てられています。故に形而上学の一部内であると主張することも全くないし、両手で頭を抱へるとか、拳を顎に当てるとか云ふ様な重々しい態度で聴かれてはならないのであります。¹⁹

そして、日本人の感受性と、日本人とフランス人に共通する趣味を以下のように語った。

日本人のように我々も生活の具体的な事実とその暗示には非常に敏感であります。日本の藝術は種種雑多な表現をとつても非常に極端なもの、無定形なものから遠ざかり、此の混乱せる世界の洗練されない又混沌たる質料をその最少の部分に至るまで浄化し、和げ、精神をその中に行きわたらせ、正しい且繊細な感受性のデリケートな法則に従ふて之を整理し、その調和ある魂の幸福、清浄な明瞭さを以て之を照らしてをるのであります。その優雅な趣味は魂と生活の此の完全な平衡の表現に外ならぬのであります。…日本精神は、フランス精神の如く他國の觀念を攝取同化し、之に調和のとれた平衡を與へることが出来ました。²⁰

この考えをもとに、彼は表 5 のようなフランス・バロックの作曲家フランシスク²¹、クーブラン、ラモーから近現代の作曲家ドビュッシー、ラヴェルに至るまで、フランス人作曲家の作品を演奏しながら、フランス・ピアノ音楽史を紹介した。

ダッカンの Coucou (かっこう)は可愛らしい鳥の音楽的な繪画—光琳の或る繪に似た繪

フランシスク	オルフェの宝 (ジル=マルシェックス編曲)
クーブラン	翻るバウオレ
ダカン	かっこう
ラモー	ミュゼットとタンブラン
ショパン	エチュード プレリユード
フランク	プレリユード、コラールとフーガ
ドビュッシー	前奏曲集第1集より 沈める寺、西風の見たもの
サティ	小曲2曲
プーランク	ノヴェレット2曲
ラヴェル	五時フォックス・トロット (ジル=マルシェックス編曲)

¹⁹ 同上 (同上 : 16)

²⁰ 同上 (同上 : 17)

²¹ フランシスク《オルフェの宝》はジル=マルシェックス編曲であるため、純粋なバロック作品ではない。

一である。ラモウのミュゼットとタムブーランは王女が羊飼の着物を着て楽しく遊んでゐる一つの牧歌を思ひ出させます。恰も之は日本の平安朝を思出させます。²²

ドビュッシーやラヴェルは十八世紀の巨匠が残したフランスの傳統を再興したのであります。無意識的な深遠から引き離され、明るみへ出された音楽は、フランス音楽の影響の下で、眼のくらんだ鳥の様に、可視的な宇宙のみならず、此の宇宙の最も新しい、最も瞬間的な形相をも表現しようと試みました。かくてハーモニー、リズム、メロディーは魂の諸状態を固定する魅力がある、又は悩しい象徴の機縁となつたのであります。それは例へば日本の生花で枯れ木を寄るゝ[マ]花瓶か螺旋状をなして飛び出してゐる蔓草を以て激しい願望が高くされ、激情がブロンズや青銅の花瓶に生けられた松の小枝であらはされる如くである。²³

このように、説明では随所に彼が感じた日本文化との接点が入り入れられていることが興味深い。そして、彼は西洋音楽の今後の展望についても以下のように示した。

永久不動の種種變化ある側面を通じて、我國の現實主義的傳統は論理的に繼續してゐます。此の年代に並べた番組は音による我々の内的なものゝ發表の進化、緩徐に而も確實に遂行せられる變遷の生きた證據であります。その作品の現在我々には優しきがあると見える大音楽家はその同時代の人人からはその表現方法の新奇の故に不協和音であるとそしられた事を考へる必要があります。音楽の進化は人間生活の組織に並行しています。…欧州人は西欧文化の領域外に於ても音楽は民族誌の興味以後の興味を有ち得るとは今以て殆ど考へてゐない。それは誤である。…貴國の方法、特に、その傳統、工業化が全世界を通じて趣味を粗野ならしめてゐる今日に於て奇蹟的にも完全に残されてた日本の傳統は、我國の音楽にとって更新の契機となるであります。²⁴

²² ジル=マルシェックス、訳者不明（1931,第3巻第5号：18）

²³ 同上（同上：19-20）

²⁴ ジル=マルシェックス、訳者不明（1931,第3巻第5号：21）

以上のようにジル＝マルシェックスは、西洋音楽の歴史についてだけでなく、これからの世界において音楽がどのように発展していくべきかについて自身の音楽観によって論じている。その中で、日本固有の文化の伝統を重要視し、西洋音楽の受容に懸命であった日本人の聴衆に対して気づきを与えたことは重要である。この主張に特に影響を受けたのは須永克己であり、次節第2項で詳しく述べる。

4. 日本の音楽界への影響・貢献

1) 松平頼則への影響

松平頼則は『音楽新潮』第8巻第5号に「ジル・マルシェックスを訪ふ」を掲載し、彼とオネゲルやプーランク、オーリックなどの作曲家の近況について話したことを紹介した。さらには、ジル＝マルシェックスに「親しく就いて五回の個人教授を受け、その結果ピアノ演奏に関して精神的並びに肉體的整形手術をほどこされ驚くべき光明を與へられた。」²⁵とし、『音楽新潮』第9巻第3号、第4号において「ドビュッシイのプレリユード演奏方法に就て（ジル・マルシェックスに據る）」を記した。このなかで、前奏曲6曲についてのテクニック（ペダリング、運指法、表現など）をジル＝マルシェックスからの教えとして提案している。松平は、ピアニストとして4月23日赤坂三會堂、また11月24日保険協会にて演奏会を行った。

プログラムは表6-1、6-2の通りである。

ドビュッシイ	子供の領分
ラヴェル	亡き王女のためのパヴァーヌ ソナチネ
サティ	ひからびた胎児
オネゲル	ロマン地方の思い出
プーランク	3つの無窮動
松平頼則	幼年の追想

フランク	プレリユード、コラルとフーガ
ドビュッシイ	前奏曲集第1巻より デルフィの舞姫たち、野を渡る風、亜麻色の髪の乙女、とだえたセレナード、沈める寺、ミンストレル
クーラン	ゆりかごの愛 翻るパヴァーレ
ダカン	かっこう
ラモー	ミュゼットとタンブラン
サティ	太った人形のスケッチとからかいより トルコ風のチロル舞曲、やせた踊り
マリピエロ	捧げもの(全3曲)

最初の演奏会（表 6-1）は、現代フランス作曲家の作品を連ね、最後に自作曲を演奏するというジル＝マルシェックスと同様のスタイル、次の演奏会（表 6-2）は、ジル＝

²⁵ 松平頼則（1931,第9巻第3号：17）

マルシェックスの演奏した曲目と同じ作品とイタリア人作曲家マリピエロ（Gian Francesco Malipiero 1882-1973）の日本初演（ジル＝マルシェックスはテデスコの作品の日本初演を行った）²⁶によって成り立っており、そのプログラム構成には、ジル＝マルシェックスからの影響が如実に表れている。

また、この時に披露した自作曲《幼年時代の思い出（プログラム表記 幼年の追想）》について、松平は後に、以下のように述べた。

ジル＝マルシェックスの演奏したユージュヌ・グーセンス（英）の《Kaleidoscope》に触発され、ドビュッシー、ラヴェル、プーランク、タンスマン、ストラヴィンスキー等の影響がある²⁷。

ジル＝マルシェックスは、1925年11月21日に東京音楽学校でグーセンス（Eugene Aynsley Goossens 1893-1962）の《万華鏡 *Kaleidoscope*》を演奏した。この曲は1917年に作曲された作品である。当時、「現代感覚の表出には先ず現在進行形のヨーロッパ音楽を研究することから始めねばならない」²⁸と考えていた松平にとって、ジル＝マルシェックスの演奏、また、彼との語らいは、大きな刺激となった。これらのことから、松平はピアニストとしてだけでなく、作曲家としてもジル＝マルシェックスの音楽活動に影響を受けたといえることができる。

2) 須永克己への影響

須永克己は、「ジル＝マルシェックスの来朝が我國に於けるフランス音楽隆盛の一つの動機となったことは確かである」²⁹と述べたほか、1931年にジル＝マルシェックスのレクチャー・コンサートを聞き、自身の日本音楽観に対して影響を受けたことを明らかにしている³⁰。

²⁶ 1931年10月19日朝日新聞社講堂。当日のプログラムについては、資料編（表16-3）を参照。

²⁷ 松平頼則（1988,第2号：4）

²⁸ 同上（同上：5）

²⁹ 須永克己（1936：7）

³⁰ 「あなたが私の国に来てから、日本人にとってその時までほとんど未知の世界である、フランス音楽の美しさを与え、最新の、洗練された音に没頭しました。…あなたが最近行った講演で、フランス音楽と日本芸術の間の調和を論じたことは、疑問に強い衝撃を与えました。…私たちは、

須永は、生活に根ざした文化として捉えることによってはじめて真の価値を見出される日本音楽は、純粹形式の芸術とみなされるような大規模な形式を持つ西洋音楽とは、全く異なる方向に発達した音楽であり、日本音楽を支える日本国民が向上的な精神力を有することで、西洋音楽に対する唯一のアンチテーゼとみなされるのであると述べた³¹。そして、ジル＝マルシェックスも用いた『世界音楽』³²という言葉を使って以下のように述べている。

世界音楽の観念を一つの理想として解釈する時、ヨーロッパ音楽即世界音楽と考へて居た欧米人の迷妄を打破して、之と性質を異にはするが、同様に高い襲達の程度を持ってある他の系統の音楽、例へば東洋音楽、就中、日本音楽の特徴を宣揚することが、眞の意味の世界音楽に到る道であることが判明する³³

この考え方は、ジル＝マルシェックスがレクチャー・コンサートで述べたこと、また、論文に記した内容と一致する。

5. まとめ

1931年のジル＝マルシェックスの2回の来日は、日本音楽界の状況が当時ドイツ音楽偏重であったことを把握したフランス外務省の派遣によるものであった。フランス政府は、彼に自国の芸術の宣伝を命じたのである。1925年の初来日より6年が過ぎ、日本の音楽界では少しずつフランスの近現代の作品も知られるようになっていた³⁴。しかし、その中でジル＝マルシェックスは、レクチャー・コンサートの形式をとり、作品を単に聴くだけでなく、作品の成立背景を理解させようとしたこと、また、彼の演奏によっ

フランスと私たちの国の間の友好的な関係を築きあげるためにあなたが示す情熱に尊敬を表します。」 Gil-Marchex “La Musique Moderne Japonaise” *France-Japon*, 1939

³¹ 須永克己（1933：8-11）

³² クルト・ザックスによって定義され、今日使用されるものとは意が異なる。

³³ 須永克己（同上：9）

³⁴ ラジオ放送の開始やレコードの普及によって、西洋音楽がより広く聴かれるようになった。また、演奏会の数も増加し、プログラムには、近代フランス音楽が載せられることも稀ではなくなった。

て当時芸術の中心地であったパリにおける芸術潮流がそのまま日本に持ち込まれたことは注目に値する。彼は、レクチャー・コンサートで、日本の伝統的な美とフランス音楽の美意識が類似していることを高調し、近現代の音楽、特にフランス音楽を紹介した。それと同時に『世界音楽』の発展のために西洋人の考える西洋音楽の優越性を否定し、日本音楽をはじめとする東洋音楽を重要視することも説いた。これらの彼の活動は、特に松平頼則や須永克己に影響を与えた。松平はジル＝マルシェックスの演奏によって当時最先端の音楽を聴くと同時に、彼との語りによってヨーロッパの音楽事情を知り、その経験を自身の音楽活動に生かした。また須永克己は、ジル＝マルシェックスのレクチャー・コンサートによってフランス音楽の魅力を知り、『世界音楽』という観念に共感して独自の日本音楽論を展開したといえる。

第 4 章

1937（昭和 12）年の日本滞在における音楽活動 —日本の作曲界との交流による活動

ジル＝マルシェックスは、1937年に4回目の来日をした。彼の初来日から12年が経ち、日本の音楽界、特に作曲界は大きく変化していた。池内友次郎や大澤壽人といったフランスに留学した作曲家達も活躍し始め、1936年には現代作曲家連盟が発足した。また1934年から1937年にかけて幾度か来日し、楽譜の出版や演奏という形で世界に日本の作曲家を知らせたチェレプニン（Alexander Tcherepnin 1899-1977）の活動により、他国にも日本の音楽家が知られるようになった。ジル＝マルシェックスも、彼に劣らず日本人作曲家との交流を通して音楽活動を行っている。この章では、彼が現代作曲家連盟演奏会の助演や日仏音楽協会の設立に携わったこと、レクチャー・コンサートによって西洋音楽史を様々な視点から伝えたことを示す。

1. 来日目的

1) 日仏両国からの期待

ジル＝マルシェックスは、1937年、前回の来日と同様にフランス政府の文化使節として日本を訪れたが、これまでと大きく違う点は、日本の音楽を欧州に紹介するために¹、日本の外務省国際文化振興会の招聘で来日し、日本音楽研究を行なったことである。国際文化振興会からの援助については、日本音楽研究との関わりが強いため第5章で詳しく述べるが、フランス政府ばかりでなく日本政府からも援助を受けたことは、これまで日仏文化交流を試みてきた彼の活動が、両国から認められて期待されたということを証している。また同時に、日本も自国芸術の対外宣伝としての役割を彼に期待したのであった。

2) 5つのテーマによるレクチャー・コンサート

ジル＝マルシェックスは、この来日においてもレクチャー・コンサートを中心に音楽活動を行った。テーマは以下のように様々なものであった。

「16世紀から20世紀のヨーロッパ舞踊音楽」(4月27日・日仏会館など)

¹「日本の音楽を欧州に紹介するために佛國政府及び我が外務省の後援によって来日した。また、一方日本に佛蘭西音楽の正しい紹介をその講演と演奏とによつて行ふ使命も帯びている」(1937年5月27、28日明治生命講堂演奏会パンフレット記載)

写真1 1933年 チラシ

BUREAU INTERNATIONAL DE CONCERTS
C. KIESGEN & THÉO YSAÏE
252, Rue du Faubourg Saint-Honoré - PARIS (8^e)
Télé. : Opéra-Paris-42 Télé. : Carnot 84-20, 74-27
F. C. Suisse 1.626 Télé. : Carnot 89-46

Salle des Concerts de
ÉCOLE NORMALE DE MUSIQUE
78, Rue Cardinet (Métro : Malherbes)

Les **JEUDI 23**, **JEUDI 30 NOVEMBRE 1933**
SAMEDI 9 DÉCEMBRE
à 21 heures

Trois Conférences-Récitals
LA MUSIQUE DE DANSE EN EUROPE
du XVI^e au XX^e Siècle

par
GIL-MARCHEX

Prix des Places par séance : 20 - 15 - 10 - 5 Frs
Abonnement aux trois séances : 40 - 30 - 20 - 10 Frs

BILLETS EN VENTE :
ÉCOLE NORMALE DE MUSIQUE, 114 bis, Boulev. Malherbes ;
chez BUREAUD, Éditeur, 4, Place de la Madeleine, aux WAGONS-
LITS COOK, 14, Boulevard des Capucines ; à l'AMERICAN-
EXPRESS, 11, Rue Scribe, et au BUREAU INTERNATIONAL
DE CONCERTS C. KIESGEN & THÉO YSAÏE, 252, Faubourg
Saint-Honoré (Carnot 89-46).

写真2 1936年 プログラム表紙

ÉCOLE NORMALE DE MUSIQUE

Avec la haute approbation du Ministère
de l'Instruction publique et des Beaux-Arts.
Sous le Patronage du Ministère des Affaires Étrangères
114 bis, Boulevard Malherbes - PARIS-17^e
(Métro Malherbes ou Monceau) - Tél. Wagram 80.16

ANNÉE 1936

Les Jeudis 16, 23, 30 Janvier
6, 13, 20, 27 Février
5, 12, 19, 26 Mars et 2 Avril
à 17 heures précises.

Douze Cours d'Esthétique Musicale
PAR
HENRI GIL-MARCHEX

Les Cours auront lieu dans la Salle de Concerts de l'École
(Entrée 78, rue Cardinet)

写真3 プログラム内容

PROGRAMME

Les Danses et les Chants d'origine populaire
(3 cours).
L'Esprit mystique et philosophique (2 cours).
La Musique descriptive (2 cours).
La Virtuosité (1 cours).
Les Passions humaines (3 cours).
L'Humour (1 cours).

Chaque séance sera illustrée d'importantes
auditions musicales pour lesquelles Henri Gil-
Marchex s'est assuré déjà le concours de :

Cantatrices : Madeleine Grey, Lucy Dewinsky,
Marthe Lebasque, L. Granger-Daniel, Elsa Ruhl-
mann, R. Kanter, Mad. Dubuis, Renée Pui-tienne
et Maryse Villy ;
Chanteurs : Henri Fabert (de l'Opéra), Doda
Conrad ;
Violonistes : Carmen Forté, Françoise Soulé,
Paul Bouquet, Colette Génissien ;
Violoncellistes : Lucienne Radisse, Louis Four-
nier ;
Pianistes : Colette Cras, T. Hara, Nadine Desou-
ches, Marcelle de Mayo ;
Flûtiste : René Cortet ;
Chorale Nivard : Suzanne et Jean Dum, Mmes
Boulingre, A. Bréguet, Mary Costes, P. Delpeuch,
Lucienne G. Grovlez, M. Labat, Jacques Lemoine,
Comtesse Jean de Polignac.

「巴里ニ於ケルシヨパンノ音楽生活」(11月9日・日仏会館など)、

「ドビュシイニ於ケル異國ノ影響」(11月17日・日仏会館など)

「象徴主義時代の音楽」(6月23日・東京帝國大學など)

「民衆音楽が現代作曲家に及ぼす影響」(5月20日・早稲田大学など)

これらのレクチャー・コンサートは1933年(写真1)、36年(写真2、3)にエ
コール・ノルマル音楽院で行ったものもとになっている。1936年に行われたレ
クチャー・コンサートは、ジル＝マルシェックスが主催し、他の教師を招いて行
われた。ピアニストとして T.HARA (原智恵子) の名前があることが注目される。

3) コンサート・スケジュール

ジル＝マルシェックスの音楽活動は
表1の通りであり、約8ヶ月間に行わ
れた計21回の音楽活動が明らかにな
った²。各活動の詳細は、別冊資料に記
した。また、詳細は不明だが、東北帝

表1 アンリ・ジル＝マルシェックスの音楽活動(1937.3-11)

3月28日	入京	6月10日	東京商科大学
4月11日	華族會館	6月23日	東京帝國大學
4月24日	日本青年會館	6月26日	関西日仏會館
4月27日	華族會館	7月3日	海員會館
4月28日	華族會館	7月4日	華頂會館
5月11日	華族會館	11月9日	華族會館
5月12日	日本大學	11月12日	日佛會館
5月20日	早稲田大學	11月13日	関西日佛會館
5月24日	ラジオ出演	11月15日	慶応義塾大學
5月27日	明治生命講堂	11月17日	華族會館
5月28日	明治生命講堂	11月23日	関西日佛會館
6月4日	丸ノ内保険協会		

² 『第14回日佛會館報告書』には「夏季休暇ヲ利用シ、8、9月ハマニラニ演奏旅行ヲナシタリ」と報告されている。

國大學、武蔵野音楽学校でも講演を行っている³。

しかし一方で、「ジル＝マルシェックスは日本政府の後援のもとに日本縦断の見事な興業を成し遂げた。彼は、60を超えるリサイタルとレクチャー・コンサートを全ての大都市と帝國大学、多くの私立大学で催した。」⁴と報道した新聞記事があり、多岐に亘った音楽活動を行ったことが推測されることから、今後も調査が必要であると考えている。

2. ジル＝マルシェックスによるレクチャー・コンサートの内容

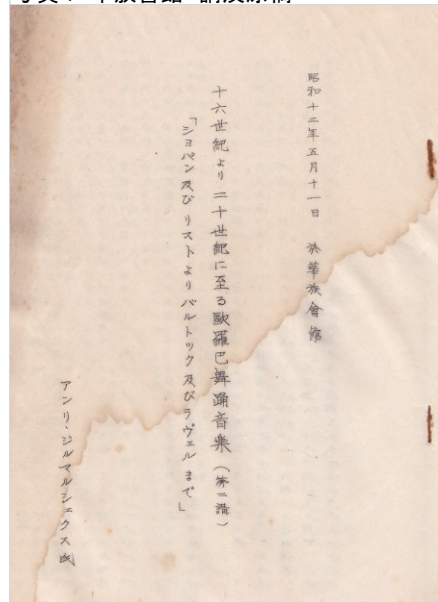
ここでは、ジル＝マルシェックスが行ったレクチャー・コンサートの中から、詳細が記された資料を入手することができた二つの公演内容について記す。

1) 「十六世紀より二十世紀に至る欧羅巴舞踊音楽（第二講）—ショパン及びリストよりバルトック及びラヴェルまで」

ここでは、19ページに亘る原稿（訳者不明、写真4）をもとに、5月11日に行われた公演について紹介する。

ジル＝マルシェックスは、前回（4月27日）のレクチャー・コンサートで、最後にショパン（Frédéric François Chopin 1810-1849）の《ポロネーズ *Polonaise*》を演奏し、「どんな具合に十九世紀の舞踊音楽が古典時代には知られていなかった国民感情の熱烈な表現形式をなすに到ったかをお話しかけたところで終わった。」そのため今回のレクチャー・コンサートは、ショパンの《マズルカ *Mazurka*》の演奏から始まり、表2のような曲目を取り上げて行われた。

写真4 華族會館 講演原稿



³ 『第14回日仏會館報告書』1938年3月。

⁴ *France-Japon* No.37(Jan,1939) pp.30-31

彼は、まずショパンとリスト（Franz Liszt 1811-1886）について説明し、演奏を行った。ショパンの《マズルカ

ショパン	マズルカ
リスト	ハンガリー狂詩曲第2番
ムソルグスキー	ゴパック オペラ『ソロチンツィの定期市』より(ラフマニノフ編曲?)
グリーグ	ノルウェー民族舞曲 (抜粋2曲)
アルベニス	2つのスペイン舞曲
ファリャ	火祭りの踊り
バルトーク	アレグロ・バルバロ
ドビュッシー	子供の領分よりゴリウオーグのケイク・ウォーク 前奏曲集第1集より 沈める寺、デルフィの舞姫たち、パックの踊り
ミヨー	ブラジルの郷愁
ラヴェル	亡き王女のためのパヴァーヌ 五時フォックス・トロット (ジル＝マルシェックス編曲)

Mazurka》は、西洋音楽にとって「伊太利、仏蘭西、独逸に生れた因襲のメロディーとリズムに依拠してきた伝統」を打破し、「欧州諸國各自の國民舞踊に還るといふ、十九世紀独特の現象を示しはじめた…烽火の如き」ものであったと紹介した。ショパンが「愛する波蘭土に暮してゐた青春時代の追憶を偲びながら作曲した」《マズルカ *Mazurka*》を、シューマンの「花の蔭に隠された大砲である」という言葉を借りて、「ショパンの祖国を亡くした独逸と露西亜に向けられた大砲である」⁵と述べている。一方、リストは、「ヂプシーの藝術に深い理解を示し…欧羅巴音楽精神の革命を齎した立役者の一人」であると紹介し、ジプシー音楽の特徴を「本質的に東洋風な溢るゝばかりのフィオリトゥーレ[ママ]、自由奔放なリズム、転調なくして突如一つの旋法から他の旋法へと思ひも寄らぬ推移を示す」様式と述べ、曲を構成する「ラッサン」と「フリスカ」の部分の説明した。

次に、「他の民族調の舞踊曲を」紹介するために、「ゴパックというコサック舞踊」と「ノルウェーの春を呼ぶ踊り」を説明した上で、ムソルグスキー（Modest Petrovich Mussorgsky 1839-1881）とグリーグ（Edvard Hagerup Grieg 1843-1907）の作品を演奏した。それに続き、スペインの舞踊について「極めて古いものであり…娯楽でも慰みでもなく…快樂ではなくして、已むに止まれぬ欲求を満たすもの、民族全体の言葉」であると述べ、アルベニス（Isaac Manuel Francisco Albéniz y Pascual 1860-1909）とファリャ（Manuel de Falla Matheu 1876-1946）の作品を演奏した。

さらに、話をハンガリーへと移し、「1900年頃、匈牙利に一つの新しい動向が油然として湧起った…欧羅巴の影響を一切蒙らぬ古い傳統、教養ある人々からは顧みられない古い傳統が尚ほ匈牙利農民の間に傳えられてゐることを明確に指摘

⁵ この発言からは、フランス側の対ドイツの意識が見られる。

した」とバルトーク (Bartók Béla Viktor János 1881-1945) の出現について説明した。「リストの匈牙利狂想曲[マ]にしる、ブラームスの匈牙利舞踏曲[マ]にしる、これは匈牙利音楽といふより寧ろジプシー音楽に属するものであり…音楽の創意は…匈牙利農民の粗野質朴な音楽藝術とは没交渉な當時流行のメロディーからヒントを得た」のに対し、バルトークの音楽は、「古い歌謡から一つの力強い独創性が湧き出た…彼の募りゆく憤怒につれて、殆ど痛々しさへも感ぜられるリズムの旋風である」と、彼らとの違いを強調している。

そしてジル＝マルシェックスは、ドビュッシー (Claude Debussy 1862-1918)、ミヨー (Darius Milhaud 1892-1974)、ラヴェル (Joseph-Maurice Ravel 1875-1937) の作品を説明し、演奏した。ドビュッシーに関しては、「舞踊曲のリズムを存分に駆使する一方、浪漫時代に光栄を僭つたリズムはこれを出来る限り使用しないやうに心懸けた」作曲家であると述べ、「アメリカン・ニグロの踊りの節分されたリズムを怖れ気もなく借りて、愉しい皮肉な想像力を働かせた小さな傑作」である〈ゴリウオーグのケイクウォーク *Golliwogg's Cakewalk*〉、「アングロ・サクソンの大衆に持囃された肌の黒さもとりぐの黒奴の気狂じみた踊手と歌手」を示す〈ミンストレル *minstrels*〉など4曲を披露した。次に、「タンゴのリズムを様式化した」ミヨーの作品を紹介している。そして最後に、ラヴェルの異なった傾向を示す2曲を演奏した。それは、「宗教舞踊」を示す〈亡き王女のためのパヴァーヌ *Pavane pour une infante défunte*〉と「西洋芸術にアメリカン・ニグロの異国情緒を輸入した」作品であり、「黒人の演ずるジャズの音楽的描寫、欧羅巴が我を忘れて熱狂する如き激烈なリズムを伴ふ騒々しいオーケストラをピカソ風に描寫した」《五時フォックス・トロット；“子供と魔法”による幻想曲 *Five o'clock fox-trot : fantaisie extraite de "L'enfant et les soltilèges"*》⁶であった。

以上のようなプログラムで解説を交えながら演奏した彼は、最後にこのような言葉で公演を締めくくっている。

時代から時代へと文明は進化変装し、時に思ひかけない変貌を呈するけれども、我等はその千差万別な相貌の蔭に隠れた傳統の感性を明瞭に認識せねばならぬ…地球上の諸人種が彼らのその時々豹変する相貌の

⁶ ジル＝マルシェックス編曲作品。この作品に関する詳細は第2章第2節を参照。

ジル＝マルシェックスは、最初に 19 世紀以降の西洋音楽の歴史について以下のように説明した。

ドイツ音楽がその全盛を誇った時代であり…僅かにリストとショパンだけが、これらと違った方向を示してゐた。…ドイツ音楽専制からの解放の第一聲は、最初先ずロシア派ムソルグスキーによつて挙げられた。ついで、シャブリエ、ドビュッシー、更にスペインの作曲家たちが続き、かうして次々にあらゆる國々の人々にとつて、自由な創造の世界、舊い、あらゆる専制的な主義から全く獨立した、自由な新しい世界が無限に展開されることになった。

そして、レクチャー・コンサートのテーマに関連して、「その國の民衆音楽を知るといふこと、それこそは、その國民の感受性について言語などでは到底あらはし得ないやうな深奥な秘密に至るまで、これをその深きに分け入つて突き止めさせてくれるものなのだ」と説明した。

演奏は、「フランスの國民的伝統のその最初の復興者の一人」として紹介されたシャブリエ (Alexis-Emmanuel Chabrier 1841-1894) の作品から始まった。続いて、「シャブリエの交響詩〈エスパニャ〉やビゼー〈カルメン〉が一つの前触れとなった…二十世紀初頭を飾るスペイン音楽の花々しい復活」について語り、「スペインのフォークロアについて種々重要な探求を試みた」音楽史家フェリペ・ペドレル (Felipe Pedrell 1841-1922) の、「彼の民族的源泉への復帰の諸説を身を以て行つた」ファリャとアルベニスの作品の解説を交えて演奏した。

次に、ジル＝マルシェックスは、ロシア音楽へと話を移した。

グリンカこそは、ロシアの民謡と西洋諸國の音楽形式との間に完全な統合を試みた最初の人である。そしてバラキレフ、ボローディン[ママ]、セザール・クイ[ママ]、ムソルグスキー、リムスキー・コルサコフ等ロシア國民音楽派を形式する人々がこれに続いた。

しかし、ムソルグスキー以外の作曲家は、「ロシアのメロディに対し、ワーグナーの方法、またヴェルディ、或いはブラームスの方法を當てはめようとした」と

批判した。そして、「ストラヴィンスキーがその初期において、そして現今ではプロコフィエフがロシアの民謡の魂にしつかり結び」ついたと述べ、プロコフィエフ (Sergei Sergeevich Prokofiev 1891-1953) の作品を演奏した。

続いて、ジル＝マルシェックスは、バルトークの作品の特徴を説明し、演奏を行った後⁸、ドビュッシー、セヴラック (Marie-Joseph-Alexandre Déodat de Séverac 1872-1921)、サティ (Erik Alfred Leslie Satie 1866-1925) を順に紹介した。ドビュッシーに関しては「錦繪といふ日本の民衆芸術に対して何人にも負けないほどの賞讃を捧げて」おり、「日常卑近な情景を北斎風内至広重風に、といふのは寫実的ではあるが俗悪に流れず、簡素な卑俗に墮しない手法でこれを音楽的に表現しようと試みた」と述べ2曲を演奏した。そしてドビュッシーが次々と作品を発表する一方で、「フランクの弟子たちの率あるスコラ・カントルムでも、過去の音楽の中に現代音楽に対する指標を求めようとする企てが起こり…ワーグナーの音楽を防ぐためどうしても民族の聲に呼び掛ける必要、民謡をよく理解するの必要を感じた」⁹ため、「ダンディはセヴェンヌ地方とヴィヴァレ地方を、ギ・ロパルツはフレムやブルターニュを、シャルル・ボルドはバスクを、セヴラックはラング・ドック地方をと、各々地方的音楽の源流に遡つての研究が始められた」と説明し、「自然をその傳統的情感に即して美事に再現してのけた」セヴラックの作品を演奏した。

また、先に紹介したドビュッシーが「客観的に好んで道化師を描いた」のに対し、「自分自身が道化になり切ろうとし…晩年ミュージックホールやサーカスなどに示唆されて、明確な民衆藝術—あらゆる余計なお荷物をすつかり取り去つた民衆藝術を鼓吹しようとした」サティの作品を演奏した。

そして最後に「現今世界を征服しつくした民衆音楽の形式である」ジャズが「音楽の進歩に与えた影響の偉大さ」を述べて、ストラヴィンスキー (Fyodorovitch Stravinsky 1882-1971) とラヴェルの作品を演奏した。

ジル＝マルシェックスは、民衆音楽が諸民族の感受性を理解する鍵であり、それにより19世紀以降の西洋音楽が発展してきたことを説くことで、日本の聴衆に西洋音楽史、また、各々の作品の理解を促したといえよう。

⁸ 詳細な説明内容は5月11日の講座と同じであるため省略する。

⁹ ワーグナーに対する記述から、対ドイツの意識が見受けられる。

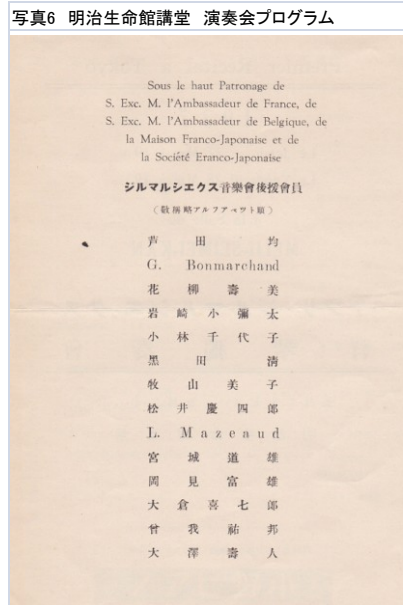
3. 日本の楽壇に支えられた活動

1) ジル＝マルシェックス音楽会後援会

ジル＝マルシェックスは、5月27日、28日にフランス大使と日仏会館、日仏協会の後援により、明治生命館講堂で二夜連続の演奏会を開催した。演奏会で配布されたプログラム（写真6）には、ジル＝マルシェックス音楽会後援会員として、政治家、実業家、芸術家など14名の名前¹⁰が記され、ジル＝マルシェックスへの支援が示されている。

披露された曲目は、表4、表5の通りである。

この演奏会で、ジル＝マルシェックスが日本研究の成果の一つとして作曲した《古き日本の2つの映像 *Deux Images du Vieux Japon*》が日本初演された。各大学における講演、演奏会が好評であった一方で、彼の作品〈吉原帰り〉はそのタイトルから日本文化を蔑んでいるとして、日本の聴衆の一部から非難を受けた¹¹。



	ノクターン ト長調
ショパン	バラード第1番、第4番
	スケルツォ 第2番
	版画(全3曲)
	映像第1集より 水の反映
	映像第2集より 金色の魚
ドビュッシー	前奏曲集第1巻より 沈める寺
	前奏曲集第2巻より
	月光の降り注ぐテラス
	前奏曲集第1巻より ミンストレル
ショパン	エチュード ハ長調、ヘ長調、変イ長調、ヘ長調、変ト長調、ハ短調
	ワルツ イ短調、嬰ハ短調、変ニ長調
	ポロナーズ 嬰ハ短調、変イ長調

フランク	プレリュード、コラールとフーガ
フォーレ	気まぐれなブーレ
シャブリエ	組曲「ラングドックにて」より 春の墓地の片隅
サンサーンス	ワルツ形式による練習曲 作品52-8
ジル＝マルシェックス	古き日本の2つの映像
	夜のガスパールより 水の精
	亡き王女のためのパヴァーヌ
ラヴェル	フォックストロット (ジル＝マルシェックス編曲)
ミヨー	ブラジルへの郷愁
プーランク	3つの無窮動
バルトーク	アレグロ・バルバロ
アルベニス	スペインの歌 作品232より やしの木陰、セギディーリヤ
グラナドス	スペイン舞曲 ホ短調
ファリャ	恋は魔術師より 火祭りの踊り
リスト	スペイン狂詩曲

¹⁰ 芦田均、G. Bonmarchand、花柳壽美、岩崎小彌太、小林千代子、黒田清、牧山美子、松井慶四郎、J. Mazeud、宮城道雄、岡見富雄、大倉喜七郎、曾我祐邦、大澤壽人

¹¹ 第5章第1節参照。

2) 日本現代作曲家連盟の演奏会への助演

ジル＝マルシェックスは、自身の講演や演奏会に加えて、日本現代作曲家連盟の第3回作品発表会にも助演した。

プログラム(写真7)には、清瀬保二(1900-1981)、池内友次郎(1906-1991)、江文也(1910-1983)の作品を演奏したことが記され、『ドキュメンタリー 新興作曲家連盟 戦前の作曲家たち 1930-1940』(1999: 150-151)にも詳細が報告されている。

写真7 日本現代作曲家連盟 演奏会プログラム



4. 日本の音楽界への影響・貢献

Société Franco-Japonaise des Amis de la Musique (日仏音楽協会) の設立

ジル＝マルシェックスは、Société Franco-Japonaise des Amis de la Musique (日仏音楽協会) の設立に関わり、自身も副会長の役職についた。この組織は、徳川頼貞が会長、池内友次郎などが実行委員を務め、1938年2月に設立されている¹²。また園部三郎(1906-1980)も設立に加わっており、「ジル＝マルシェックスが肝煎りで、日仏会館のマルセル・ロベール氏と、日本側からフランス文学の山内義雄氏」¹³が参加した事を記している。山内は、早稲田大学でジル＝マルシェックスの講演の通訳を務めた人物である。

会の設立に伴い、2月25日には華族会館で「日仏交換音楽会」が開かれた。ジル＝マルシェックスは、曲目について以下のように明らかにしている。

プログラムはバラエティに富み、松平頼則《フルートとピアノのためのソナチネ *Sonatine pour flûte et Piano*》、池内友次郎《古い日本の旋律にもとづくチェロのための幻想曲 *Fantasie pour violoncello sur violoncelle sur un air japonais ancien*》、清瀬保二《ピアノのための小組曲 *Petite suite pour piano*》、J.-B. Loeillet (1680-1730)《ピアノ、ヴァイオリン、チェロ

¹² 染谷周子、杉岡わか子、三宅巖 (1999: 287)

¹³ 園部三郎 (1971, 第29巻第10号; 115)

のためのソナタ 第 13 番 *Sonate No.13 en sol majeur pour piano, violon et violoncelle*》、R.Laparra (1876-1943) 《組曲 *Suite*》、Ravel 《パッサカイユ *Passacaille*》、G.Fauré 《聖歌 *Cantique*》であった¹⁴

また、この会の活動については園部が以下のように記している。

わたしも大いにはりきったのですが、そのころの大使夫人の意思が、どうもきわめて私的なサロンの集まりにしてしまう傾向にみられたのに反して、わたしと池内さんはフランス音楽の一般公開による日本への交流、日仏音楽の交流などを主張しましたので意見が合わず、二回の演奏会を催しただけで、その後第二次世界大戦勃発の兆と共に流れてしまいました。¹⁵

この会は、作曲家だけの私的な会ではなく、文化人も取り込み大々的な活動を期待されただけに、戦争のために存続できなかったことは大変残念である。

5. まとめ

1937年のジル＝マルシェックスによる音楽活動の特徴は、日本の音楽界と密接に関わって行われたことである。彼の演奏会は、日本の文化人で組織された後援会の支援によって開催された。そして彼は、日本作曲家連盟の演奏会に助演し、日本人作曲家の作品を演奏した。これらは、彼が1925年の初来日から計4回来日し、日本の音楽界と親交を深めていったからこそ為し得たことであろう。中でも、日本の音楽家らと共に日仏音楽協会の設立にも携わったことは、彼が目指した日仏文化交流を1つの形として実現させたといえる。その一方で、彼が5つのテーマでレクチャー・コンサートを行い、多角的に西洋音楽史を捉えて解説しながら作品を演奏し、日本の聴衆にその理解を促そうと試みたことも重要な事実である。

¹⁴ *France-Japon* No.25(Jan,1938) p.215

¹⁵ 園部三郎 (1971,第 29 巻第 10 号 : 115)

第 5 章

4 回の来日 (1925-1937 年) における日本音楽研究—
9 本の論文とレクチャー・コンサート、作品発表

ジル=マルシェックスは、4回の来日を通して日本音楽研究を続けた。ここでは、彼が著した9本の論文と彼に関する記事、また彼の作曲作品を検証することで、彼の日本音楽研究の内容と、彼と日本人作曲家の交流を示し、彼が日本の作曲界にどのような影響を与えたのかを明らかにする。

1. 1920-30年代の西洋における日本音楽研究

ジル=マルシェックスが日本音楽研究を行った1920-30年代において、西洋ではどのような日本音楽研究がなされていたのだろうか。アジア音楽の研究論文について調査したワトソン(1950:265-279)には、西洋の雑誌に記された日本音楽研究として308の論文が紹介されているが、そのうち1920-30年代には、114本が著されている。

代表的な日本の著述家としては、田邊尚雄(1883-1984)、須永克己(1900-1935)が挙げられる。また、西洋の著述家としては、日本に滞在して研究を行い、論文を多く記した、ピゴット(Piggott, Francis Taylor 1852-1925)¹、ペリ(Peri, Noël 1865-1922)²、カンゾネリ(Canzoneri, Vincent?-1978)が挙げられる。カンゾネリは、ジル=マルシェックスと同じように、国際文化振興会から援助を受け研究を行った³。

2. ジル=マルシェックスによる日本音楽研究の成果

1) 記事や論文の執筆

ジル=マルシェックスは、初来日後の1927年から1939年までの間に、日本音楽に関する9本の記事や論文を著した(表1)。これらは当初、*Revue Pleyel*

¹ 1888(明治21)年両親と初来日。その後、駐日イギリス大使館付武官としてたびたび来日。“The music and musical instruments of Japan”London:B.T.Batsford.1893は、1967年『日本の音楽と楽器』服部瀧太郎訳で出版されている。

² 1889(明治22)年にパリ外国宣教会宣教師として来日。布教のかたわら東京音楽学校で和声学、作曲法をおしえる。のち宣教会をはなれ、能など日本文化の研究に専念した。

³ 「目下本邦に滞在日本音楽を研究中なるが、その努力及成績見るべきものあり。最近研究費に窮しつつあるにより、七月より向こふ一年間月百五十円の奨学金を授与」『国際文化振興会月報』1937年3月号。

発行年月	雑誌名	ページ	タイトル
1927.3	Revue Pleyel	244-248	A Propos de la Musique Japonaise
1931.11	Revue Musicale	305-320	La Musique au Japon
1932.4	音楽世界	86-96	日本音楽の印象
1935.2	France-Japon	56-58	La Musique au Japon
1937.6	Contemporary Japan	264-276	Music in Japan
1937.7	婦人之友	89-91	日本婦人ト西洋音楽
1938.1	France-Japon	214-215	Quelque minutes avec le Pianiste Gil-Marchex
1938.1	France-Japon	216-217	Les Japonaises et la Musique Occidentale
1939.1	France-Japon	29-32	La Musique Moderne Japonaise

や *Revue Musicale* といったフランス発行の音楽雑誌に掲載されたが、ジル=マルシェックスが3回の来日を経た1935年以降、日仏文化交流を目的として発行されていた *France-Japon*⁴ や、『婦人ノ友』、*Contemporary Japan*⁵ といった日本発行の雑誌に掲載されたことが注目される。また、1927年に発表した論文はマトラス (Alice Mattulath 生没年不詳) によって翻訳され、1929年に *Musical Observer* に掲載された⁶。

2) 作品の発表

ジル=マルシェックスは、日本の文化から着想を得て《芸者の7つの歌 *Sept Chansons de Geishas*》と《古き日本の2つの映像 *Deux Images du Vieux Japon*》を作曲した。この2作品はどちらも1935年に楽譜が出版されている。前者は、1926年出版の詩集『*Chansons de Geishas*』⁷から選んだ詩をもとに作られた歌曲である。後者は〈出雲の秋月 *Lune d'Automne à Idzoumo*〉と〈吉原帰り *Retour du Yoshiwara*〉の2曲から成るピアノ曲である。《古き日本の2つの映像》は、彼の師であるコルトーに捧げられている。彼は、この作品の作曲にあたって、「日本音楽を模倣するのではなく、滞在時に聴いた旋律やリズムを取り入れ、日本で感銘を受けた数々の印象を描いた」として、それぞれの作品について以下のように楽譜に記している。

⁴ Gil-Marchex “La Musique au Japon” *France-Japon* No.5(1935) p.56

⁵ 日本外事協会発行。

⁶ Alice Mattulath “Musical vital to japanese life.” *Musical Observer* No.7(1929)

⁷ Steinilber-Oberlin et Hidetaké-Iwamura “Chansons de geishas traduites pour la première fois du japonais”

〈出雲の秋月〉

出雲は日本古来の神話が受け継がれる地方である。毎年 10 月（神無月）になると、死者たちの魂が全国からこの地に集まると言い伝えられている。日本人にとって月は恋心を募らせる不思議な存在である。悲恋に悩む人々は、かつて同じように満たされない恋に未練を残して世を去った死者たちの霊に対して、月の輝く夜ごとに祈りを捧げる。⁸

〈吉原からの帰り〉

北斎や広重は、しばしば江戸の遊郭であった吉原の情景を題材にして浮世絵を描いた。夜が明け始めるころ狭い通りから足早に家へ帰る好色な男たち。まだ夢心地の若者。客は提灯の光で足元を照らし、古い小唄を口ずさみながら千鳥足で引き上げていく。⁹

〈吉原からの帰り〉では、琴や三味線の音色を彷彿とさせる日本的なパッセージが多用され、〈出雲の秋月〉では、神楽の笛や太鼓を思い起こさせるような音づかいが為されており、どちらの作品においても、日本音楽の素材が彼の西洋的感性に活かされている。〈吉原からの帰り〉は、そのタイトルから、日本文化を蔑んでいるとして日本の聴衆の一部から非難を受けた¹⁰が、彼は「日常卑近な情景を北斎風内至広重風に、といふのは寫實的ではあるが憎悪に流れず、簡素な卑俗に墮しない手法で音楽的に表現しようと試みた」¹¹ドビュッシーに倣って作曲したのであった。

3) レクチャー・コンサート

ジル＝マルシェックスは、来日中、西洋音楽に関する数多くの講演を行ったが、他国で日本の音楽についての講演も行った。今回の調査で明らかになったのは、1935 年、フランス国立ギメ美術館において行われた『日本の音楽 La

⁸ Gil-Marchex, Henri *Lune d'Automne à Idzoumo* [Ed. by Eschig] Paris, (1935) p.3.

⁹ Gil-Marchex, Henri *Retour du Yoshiwara* [Ed. by Eschig] Paris, (1935) p.3.

¹⁰ 野村光一 (1937, 第 26 巻第 7 号)

¹¹ 1937 年に行った講演『民衆の現代音楽に及ぼしたる影響』からの引用。第 4 章第 2 節を参照。

musique au Japon』と題した講演と、1937年、フランス領インドシナやマレー諸島において行われた日本音楽に関する講演である。後者は、国際文化振興会の支援を受けて行われたものであり、この講演のために国際文化振興会から、邦楽のレコード10枚と幻燈25枚を借りたことが記録されている¹²。

3. 1925年の日本滞在における日本音楽研究

ジル＝マルシェックスは、1927年に初めて日本音楽に関する論文『日本音楽について A Propos de la Musique Japonaise』を著した¹³。ここでは、主にこの論文の検証によって、1925年の日本滞在中における彼の日本音楽研究を検証する。

1) 日本音楽との出会い

ジル＝マルシェックスは1925年に初めて日本を訪れた¹⁴。彼の来日は、「フランス音楽の精華を日本に紹介し且つ我が國固有の音楽を研究して彼の國に傳へるため」¹⁵であるという報道から、日本音楽研究の目的を含んでいることがわかる。彼は約3ヶ月の日本滞在中に東京、横浜、大阪、京都、神戸で演奏会を開いたが、その他にも日光や奈良を訪問した¹⁶。そして、「将来作曲をしたいので、日本演劇や能を見たい」¹⁷という彼の望み通り、能や歌舞伎を鑑賞し、日本の伝統文化を体感した。また、皇居においても音楽を聴く機会を得ている。これは、外国人演奏家で初めて御前演奏を成し遂げた事による特別待遇といえるだろう¹⁸。

¹² 『財団法人国際文化振興会月報』1937年7月号。

¹³ 第1節（表1）参照。

¹⁴ 第2章第1節参照。

¹⁵ 『讀賣新聞』1925年3月9日付。

¹⁶ Gil -Marchex”A propos de la musique Japonaise” *Revue Pleyel* No.44（1927）p.244

¹⁷ 『讀賣新聞』1925年3月9日付。

¹⁸ 第2章第2節参照。

2) 日本における音楽文化とその継承

日本文化に触れたジル＝マルシェックスは、西洋人に対してどのように日本音楽を伝えたのか。まず、能について以下のように述べた。

能は、日本人の伝統的な心意気を最もよく確認できる、日本初の演劇芸術である。超俗的な本質を有する叙情的な演目であり、詩、音楽、舞を組み合わせた動作や宗教的精神、面をかぶった役者と物語を解説する静かな合唱の存在によって、ギリシア悲劇とある類似性を示している。¹⁹

そして能の上演において音楽の役割は非常に重要であることを指摘して、横笛、鼓など使用される楽器の特性と謡について説明した。

驚くほどに表現力に富んだ横笛、その音色はときに非常に鋭く鳴り、ほとんど捕らえどころがない、ゆらぐような響きで長さを保っている。そして次に砂時計の形をした手で打つ鼓がふたつ。…太鼓は床の上に置かれ、祭礼の威厳あるゆったりとした動作で長い棒を用いてたたくのだが、着物の長い袖が大きな夜禽類の翼のごとく広がる。…演奏者たちは、楽器のリズムの動きと奇妙に合った大変短いもしくは非常に鋭いのどから出る叫びを発する。²⁰

メロディは単調な詠唱で、つぶやくような、ほとんどささやくようなものであり、そのささやきは謎めいた不思議な印象を引き起こす。悲壮な表現が甲高い音の横笛に割り当てられ、リズムを取る役は鼓奏者であり、すばやくて乾いた叫び声や、手の腹で打った鼓のこもった音で拍をつけ、長いうなり声も用いている。²¹

¹⁹ Gil-Marchex “A propos de la musique Japonaise” *Revue Pleyel* No.44 (1927)p.245

²⁰ 同上

²¹ 同上,p.246

このような描写から、実際に能の演目を観た彼の驚きと、視覚にも聴覚にも受けた刺激が伝わってくる。彼は、「(謡曲の) 詩は翻訳され、様々な人物像についての解説は出版されたが、音楽は不当にも常に無視されてきた。」²²と述べており、彼は、読者に対して、響きを想像させるような記述を用いることで、能の魅力を伝えようとした。この思いは、のちに彼の作曲にも反映されることとなったのである。

次に、歌舞伎について、その独特な舞と使用される楽器(琴、三味線、尺八、琵琶)を解説し、尾上菊五郎による舞については、「マシーン²³を彷彿させるような角の無い名人技の優雅なもの」²⁴と表現した。さらに皇居で聴いた皇室典礼の音楽は「中国、朝鮮から持ち込まれたこの音楽は大切に保存され敬虔な熱意でもって完全な形で守られている。」²⁵と記している。

彼は、これらに加えて、「茶摘みの唄、手まりで遊ぶ若い娘の唄、月の光の下の漁師の唄」などの日常生活における音楽にも目を向け以下のように述べた。

日本の生活の美へのたゆまぬ関心事は、ほぼ様式化することなしに、庶民の生活を変化させることができた。…実生活の全ての小さな出来事は、美しさの変わらぬ規則に秩序だてており、その美しい旋律は嘗てないものである。²⁶

また、彼は、日本が、西洋文化を受け入れながらも、日本の伝統文化を変わらず継承しているという現状を目の当たりにして驚きを述べた。

²² Gil-Marchex “A propos de la musique Japonaise” *Revue Pleyel* No.44 (1927)p.245

²³ おそらくロシア人舞踊家レオニード・マシーン (Leonide Massine 1896-1979) のことだと推測される。

²⁴ Gil -Marchex “A propos de la musique Japonaise” *Revue Pleyel* No.44 (1927)p.247

²⁵ 同上。

²⁶ 同上。

我々の風習は外部からの刺激であって、日本の古い精神の変化は何もなく、傷つけられない。日本は、西洋の実利主義のエゴイズムで下品な闇の中で惑わされない²⁷。

演奏旅行でヨーロッパ中を巡ったジル＝マルシェックスにとって、初めて直接に触れた日本の文化は特異なものであり、彼にとって大変印象に残るものであった。そして、その文化の中で育まれてきた日本音楽にも大きな魅力を感じたことが、研究を続けることとなった理由であると言える。

3) 日本音楽の特徴と西洋音楽への有効性

ジル＝マルシェックスは、日本音楽の特徴について、「和声と対位法は考慮されず、旋律には果てしない種類があり、リズムは格別な豊かさをもち、複雑さによって強い印象を与える。」²⁸と述べ、以下のように提言した。

現在ヨーロッパでは、版画や漆や磁器へ興味が強く持たれるが、日本を含む東洋の音楽については、軽蔑され理解されていない。しかし、それらは重要であり、西洋人作曲家にとって大変に有効なものとなるだろう²⁹。

彼は、1925年の初来日で、実際に日本文化に触れながら、日本文化に対する興味を深め、日本音楽の特質であるリズムと旋律が西洋音楽に生かされることを期待するようになったといえる。

²⁷ Gil –Marchex “A propos de la musique Japonaise” *Revue Pleyel* No.44 (1927)p.247

²⁸ 同上,p.248。

²⁹ 同上。

4. 1931-32年の日本滞在における日本音楽研究

1) 日本音楽研究の本格化

ジル＝マルシェックスは、初来日から6年後の1931年に再度来日した³⁰。今回彼はフランスの文化使節として、「佛蘭西近代音楽ノ紹介トラテン系楽人ノ音楽ニ對スル解釋ノ紹介」³¹を目的に日本を訪れたため、日佛會館や全国各地の大学などでレクチャー・コンサートを中心に演奏活動を行った。彼は演奏活動の傍ら、11月には*Revue Musicale*に『日本の音楽 La Musique au Japon』と題した15ページの長い論文を載せている³²。彼は、この論文においてポール・クロードル (Paul Claudel 1868-1955) や原勝郎 (1872-1924) などの著書³³より文章を引用して持論を展開していることから、日本文化について熱心に研究していた形跡がある。また彼は今回、3月と10月に2度来日し、合計約5ヵ月間という長期滞在によって日本の四季の移ろいを体感した。この経験によって、ジル＝マルシェックスは、日本人とフランス人に共通する、自然の美への意識を論じることとなったといえる³⁴。

また彼は、『日本の音楽 La Musique au Japon』において、以前の論文で紹介した能と歌舞伎の他に、文楽や浄瑠璃、舞楽についても解説しており、日本の伝統文化に対する造詣を深めたことがわかる。また、それらの演目に使用される楽器、例えば、琴、三味線、横笛、鼓などの和楽器に関しても、各々の奏法や全体の楽器編成に対する役割を詳しく述べた。日本の伝統文化や和楽器に対する彼の知識は、《古き日本の2つの映像 *Deux Images du Vieux Japon*》の作曲に対して生かされている³⁵。

³⁰ 第3章参照。

³¹ 『財団法人日佛會館第八回報告書』1932年3月、8頁

³² 第5章第2節参照

³³ ジル＝マルシェックスが引用した文献は以下の通り。

Paul Claudel “l’Oiseau noir dans le soleil levant” (1927)、Charles Vildrac “D’un voyage au Japon” (1927)、Hara Katsuro “Histoire du Japon des origines à nos jours” (1926)、Émile Hovelacque “Les peuples d’Extrême-Orient : Le Japon” (1921)

³⁴ 第5章第4節参照。

³⁵ 第5章第2節参照。

2) 音楽教育の現状

ジル＝マルシェックスは、この論文で初めて日本の音楽教育についても言及した。彼が音楽教育に興味を抱いた背景には、日本滞在中に大学などの教育機関を主な会場として演奏活動を行ったことがある。彼は演奏会開催のため、東京音楽学校へも2回訪れた。そして東京音楽学校について、「大変よく組織されておりピアノ、弦楽器、声楽を教えているが、能、琴、三味線のクラスもある。残念ながら、和声、フーガ、対位法、管楽器のクラスはない。」³⁶と述べた。また南葵音楽図書館³⁷については「徳川侯爵は、東京に、ヨーロッパの羨むような資本で音楽図書館を建てた。音楽雑誌が多く、その年の新書があり、先進的な考えの全てがある。」³⁸と記している。

3) フランス音楽と日本人の美意識

ジル＝マルシェックスは今回の訪問で日本に長期滞在し、日本の四季折々の自然の豊かさを知った。彼と親しく交流した松平頼則（1907-2001）は、雑誌記事で、ジル＝マルシェックスが「日本とフランスは四季の変化があるので似ている。ドイツはあまり太陽が照らないので暗い。だから日本人はフランス的であるのは当然だ。」³⁹と述べたことを紹介しているが、ジル＝マルシェックスは、自身の論文のなかで以下のように述べている。

日本人が自然と向かい合う美への姿勢は、クープラン、ラモーからラヴェル、イベールに至るまでフランス人の音楽に対する姿勢とまさに一致する。…慎みのある表現と精神的なものに対する敏感さのために、フランス音楽は、古い作品においても現代作品においても日本人に合っている。

³⁶ Gil-Marchex“La Musique au Japon” *La Revue musicale* No.120 (1931)

³⁷ 1918（大正7）年、東京飯倉に南葵音楽堂を創立した徳川頼貞（1892-1954）が、その地階にロンドンのW.H.カミングズの遺族より一部譲り受けたカミングズ・コレクションを置き、日本で初めて開設した私設音楽図書館。

³⁸ Gil-Marchex“La Musique Moderne Japonaise” *France-Japon* No.25(1939) p.30

³⁹ 松平頼則「証言・日本の作曲家とフランス」『ポリフォーン』第10号、1992年、139頁。

この考えによって、彼は「超人的な夢や恍惚とした物憂さ、荒々しい重々しさ」のあるドイツ音楽や「全てにおける過剰さ」のあるイタリア音楽に対してフランス音楽が日本人の美意識に最も合っていると述べた⁴⁰。

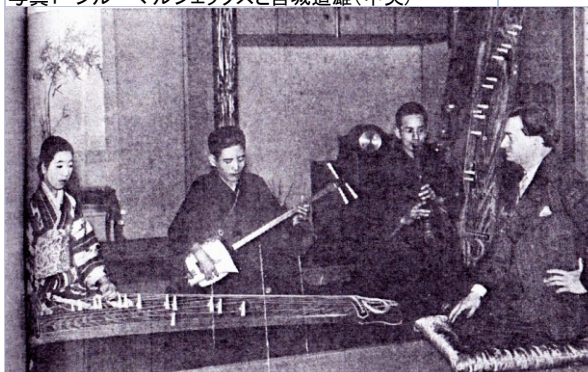
4) 日本音楽の現状と西洋音楽に対する重要性

ジル＝マルシェックスは、今回も日本における伝統文化の継承について賞賛した。それは以下の言葉で表わされている。

日本人は西洋音楽を貪欲な好奇心で受け入れているが、日本の伝統音楽は完全な形のままで維持されている。…同時にヨーロッパやアメリカで非常に大きな位置を占める西洋音楽が、日本でも同様に重要な役割を果たしている。…日本国民が驚異的な力で西洋音楽を吸収しているのは、受け継いできた本質と相いれないものを見分けて拒絶できたからである。…革新的なものや最新なものは、日本国民の生活に入る前に噛み砕かれる。日本人は何も放棄せず新しいものを得られる。⁴¹

また彼は、日本人作曲家が「最近、室内音楽作品においてピアノと三味線、尺八を組み合わせようと試みた…そのような試みをするには興味深い。」⁴²と述べ、洋楽と邦楽の両方を取り入れて新しい音楽をつくらうとしていることについても指摘している。彼はこの働きにおいて顕著な音楽家、宮城道雄（1894-1956）とも交流した（写真1）⁴³。ジル＝マルシェックスは、のちに宮城について

写真1 ジル＝マルシェックスと宮城道雄(中央)



⁴⁰ L'art français en extrême-orient, Un ambassadeur de la musique à Tokio "Intransigent", 24.11.1931

⁴¹ Gil-Marcheix "La Musique au Japon" *La Revue musicale* No.120 (1931)

⁴² 同上

⁴³ 「特選グラフセクション」『音楽世界』第4巻第2号、1932年2月。

「彼は、音楽上の基本原則を実際に学ぶことなく、彼自身の直観によって、日本音楽における様式で、和声とヨーロッパ特有の対位法を見事に取り入れて作曲した最初の人である。」⁴⁴と述べている。その一方で技術的な点では、「西洋の音階を用いることで、日本音楽は自らを衰えさせ、西洋芸術の退化した副産品となり得る」⁴⁵と危惧したことが注目される。

また、西洋の音楽家に対して、日本音楽の重要性について以下のように論じた。

日本の伝統と手法はこんなにも奇跡的に変わることなく残っており…この伝統と手法は私たちの音楽的芸術にとって革新の機会となるだろう。…白人は、ラテンやアングロサクソンを優位とする考え方で物事を捉えることにあまりに慣れすぎているため、西洋文化に従属していない音楽が民族芸能以上の重要性があることを認めがたい。それは誤りである。…この安易な軽蔑は無知の証である。私たちには確実に多くの学ぶべきことがある。…極東の音楽を真剣に研究するべきである。日本人は私たちの西洋音楽を研究しているではないか⁴⁶

この言葉は、西洋の音楽家達への投げかけと同時に、ジル＝マルシェックスが《芸者の7つの歌 *Sept Chansons de Geishas*》や《古き日本の2つの映像 *Deux Images du Vieux Japon*》を作曲する動機づけを示しているといえる。

5. 1937年の日本滞在における日本音楽研究

1) 国際文化振興会の支援

ジル＝マルシェックスは、1937年にフランス政府の文化使節として、また、日本の国際文化振興会からも招聘され来日した⁴⁷。国際文化振興会は1934年に設立された機関であり、ジル＝マルシェックスは、「外国人の東方文化研究に對

⁴⁴ Gil-Marchx“La Musique Moderne Japonaise” *France-Japon* No.25(1939) p.30

⁴⁵ Gil-Marchex“La Musique au Japon” *La Revue musicale* No.120 (1931)

⁴⁶ Gil-Marchex“La Musique au Japon” *La Revue musicale* No.120 (1931)

⁴⁷ 第4章参照。

する便宜供與」の項目で選ばれた。『国際文化振興会月報』には、彼に対して1年間「月式百円の補助」を与えたことが記されている⁴⁸。この支援に関して、彼自身が「今回は、国際文化振興会より厚い補助を頂き、長く滞在することが出来た」⁴⁹と述べており、結果的に8ヶ月間日本に滞在した。そして、これまでに増して多くの論文を書き、7月上旬から8月にかけては東洋音楽の研究と日本音楽に関する講演を含む演奏会の開催のために、フランス領インドシナやマレー諸島を訪れている。

2) 東京音楽学校の教育体制への批判

ジル＝マルシェックスは、以前にも論文の中で東京音楽学校のクラス編成について述べた⁵⁰が、今回は以下のように東京音楽学校の教育体制について言及し、明確に批判的な態度を示した。

日本政府が西洋音楽の教育を目的として東京音楽学校をつくってから…ドイツの影響は大変強い。特にピアノ教育において…ドイツの指導者優勢のもとに繁栄し、主な日本人教授はベルリンで音楽を学んだ。…上野の学校は現代音楽に興味を持つ若い作曲家の憧れに反抗的である。ここではバッハから勉強を始めブラームスで中断し、最先端の音楽を取り入れない。⁵¹

この発言の理由として、これまでの来日時に演奏活動を行った東京音楽学校において、今回の来日では演奏会を行っていないことが挙げられる、1931年彼の演奏会開催では、「校長は、とりわけジル＝マルシェックスの提案を受け入れ

⁴⁸ 「国際文化振興會記録 第四十五回理事會議事要録」昭和12年4月27日。

⁴⁹ Gil-Marchex“Quelque minutes avec le Pianiste Gil-Marchex”*France-Japon* No.25(1938) p.215

⁵⁰ 第5章第4節参照

⁵¹ Gil-Marchex“La Musique Moderne Japonaise”*France-Japon* No.25(1939) p.30

ることをためらった後考え直し、同校の大講堂を提供し」ており、今回は恐らく彼の演奏会の開催を断った⁵²であろうことが考えられる。

3) 日本の作曲界の進歩と新たな提案

ジル=マルシェックスは、第4章第4節でも述べたように、日本人作曲家たちと交流を深めてきた。彼らの紹介に関して詳しくは第6節で後述するが、彼らが1937年には独自の作品を生み出すようになっていたことから、以下のように述べた。

長い間、日本の音楽はドイツ音楽の足跡を追っていたが、私の一回目の滞在から日本は大きな進歩を遂げた。作曲家の傾向について述べると、日本はドイツ音楽の影響が支配的であったが、現在は、フランス、ロシア、スペインの作品が最先端であり、この影響はとりわけ好ましいものとなり、日本の音楽を良い方向へ向かわせた。⁵³

このように、日本の作曲界がドイツ以外の国に対しても目を向け始めた事を受けて、彼はさらに助言した。

これまで日本人は伝統的音楽を保つ一方で西洋音楽に上手く適応してきた。…その技術はすぐに模倣の域を超えるだろう。日本がブラームスの、もしくはドビュッシーの垂流になってはいけない。若き日本人音楽家はフランスに西洋音楽の技術を学びにきているが、残念ながらアジア音楽を無視している。彼らは“日本の”音楽技術だけでなく“アジアの”、つまり中国やオランダ領東インドの技術を学ばなくてははいけない。⁵⁴

⁵² Œuvres No.64 Concerts de propagande donnés par M.Gil Marchex à Tokio 8 Décembre 1931 M.D. de MARTEL, Ambassadeur de la République Française au Japon à Son Excellence Monsieur BRIAND Ministre des Affaires Etrangères à Paris

⁵³ *France-Japon* No.25(1938) p.215

⁵⁴ *France-Japon* No.25(1938) p.216

彼が、東洋の音楽にも目を向けることを助言した理由として、1937年に国際文化振興会の支援によってアジアの国々で東洋音楽研究を行ったことが挙げられる⁵⁵。

また1934年から1937年にかけて幾度か来日し、楽譜の出版や演奏という形で世界に日本の作曲家を知らせたチェレプニン（Alexander Tcherepnin 1899-1977）に関しても、以下のように評価した。

チェレプニンは、日本に新しい和声の法則を作り出しているところである。西洋のリズムの厳格さに支配されずに、これら若き作曲家たちはより東洋風に作曲している。彼は、その意味で多大なことを為した。⁵⁶

このように、ジル=マルシェックスは、あらゆる角度から日本音楽界の進展をフランスに伝えた。

6. 日本人作曲家の紹介

1) 日本における交流を通して

ジル=マルシェックスは、今回の来日で日本人作曲家と積極的に交流した⁵⁷。例えば、1937年6月には、日本現代作曲家連盟の第3回作品発表会に助演しており、江文也、清瀬保二、池内友次郎の作品を演奏している。そして、ジル=マルシェックスは、フランスの音楽雑誌に、日本で作品を演奏した清瀬保二、江文也、池内友次郎、大澤壽人に加えて、松平頼則（1907-2001）、荻原利次（1910-1992）、伊福部昭（1914-2006）の名前を挙げて紹介した。

松平はオーリックやプーランクに影響を受け…清瀬の音楽は、大衆の旋律とリズムに根源を置く。厳密には全く真似ていないが、荻原も

⁵⁵ジル=マルシェックスの東洋音楽研究については詳細不明。今後の研究課題としたい。

⁵⁶ *France-Japon* No.25 (1938) p.216

⁵⁷ 第4章第4節参照。

同じ方法で作曲する。バルトーク、ファリャ、プロコフィエフは、お気に入りの作曲家らしい。同様の影響は激しい楽曲を作る江に発見され…彼は台湾で生まれたので、日本人たち自身にとって十分に異国的に見える。北海道に住んでいる伊福部は、オーケストラをほとんど耳にしない…それにもかかわらず、信じられない巧みさでとりわけ交響曲を書く。私は彼（の音楽）にプロコフィエフやラヴェルを結びつける。これらの作曲家が日本を離れていない一方で、池内はパリの音楽学校でビューセルのクラスで学んだが、私達の国の芸術を十分によく反映している。大澤はアメリカで学んだが、シェーンベルクやベルクのポリフォニーの方法を彷彿させる。⁵⁸

そして、日本人作曲家にとっての課題は、「10世紀の初めからヨーロッパの芸術すべての基礎である和声と、古来の日本音楽の特質を持った対位法のバランスを整えることである」⁵⁹と具体的に助言した。

2) パリでの交流を通して

一方で、ジル＝マルシェックスは、来日時以外にも日本人作曲家の活躍に貢献した。

大澤壽人（1906-1953）は、1930年に渡米してボストン大学音楽学部とニューイングランド音楽院で学んだ後、1934年にパリに渡り、ポール・デュカ（Paul Dukas 1865-1935）とナディア・ブーランジェ（Nadia Boulanger 1887-1979）に師事した作曲家である⁶⁰。彼は、ジル＝マルシェックスが1925年11月25日に関西学院講堂で演奏会を行った際に、中等部に在籍する生徒であり、演奏を聴

⁵⁸ *France-Japon* No.37 (Jan,1939) pp.31-32

⁵⁹ *France-Japon* No.37 (Jan,1939) pp.32

⁶⁰ 大澤は後年神戸女学院で教鞭をとったことから、彼の遺品は長男の大澤嘉文によって2006年に神戸女学院へ寄贈された。遺品資料は自筆譜やパート譜、演奏会プログラム・ポスター、書簡、写真、録音テープなど、段ボール約43箱分、約3万点に及んでおり「大澤壽人遺作コレクション」と命名され、資料調査目録編纂のため生島美紀子を代表としたプロジェクトが立ち上げられた。このプロジェクトによって、これまでにシリーズ演奏会「大澤壽人スペクタクルⅠ・Ⅱ・Ⅲ」の開催、楽譜の出版、目録の刊行が行われている。

いて感銘を受け、音楽の道を志した⁶¹。ジル＝マルシェックスは、パリで留学中の大澤と親交を深め、彼の作品を日仏において初演した。まず、1935年11月8日にパリの Maison Gaveau において大澤壽人の作品の演奏会が開かれ、ジル＝マルシェックスは、《ピアノ協奏曲第2番 *Deuxième Concerto pour piano et orchestre*》のソリストを務めた。そして、1937年7月3日にジル＝マルシェックスは、海員会館でひらいた自身のリサイタルにおいて《丁丑春三題 *Trios morceaux de printemps "Teichu"*》の世界初演を行った。また、1937年4月7日日比谷公会堂で開かれた、神戸女学院同窓会主催「大澤壽人作曲指揮交響演奏会」において、ジル＝マルシェックスは友情出演し、プログラムにないドビュッシーの作品を演奏した⁶²。

外山道子（1913-2006）は、パリでピアノをジル＝マルシェックスに師事し、作曲をナディア・ブーランジェに学んだピアニスト、作曲家である。1937年には国際現代音楽祭において外山の《やまとの声 *Voix du vieux Japon*》が入賞した⁶³。これは、国際コンクールにおける日本人で初めての入賞であった。

大澤と外山は、晩年に日本の大学で教鞭をとり⁶⁴、日本の音楽界の発展に貢献したことから、ジル＝マルシェックスは、意義のある活動をしたといえることができる。

7. まとめ

本章では、ジル＝マルシェックスの日本音楽研究と作曲家の紹介について詳しく述べた。彼は、9本の論文を著して、日本の伝統文化とその継承だけでなく、日本の音楽教育におけるドイツ音楽偏重への批判や、日本作曲界が西洋音楽を取り入れながら発展していく様子をフランスに伝えた。彼の研究は、1937年には国際文化振興会からの支援を受けており、日本からも注目されていたと言える。ジル＝マルシェックスは、来日ごとに日本人作曲家と親交を深め、日

⁶¹ 生島（2012：14）

⁶² 生島（2009）、同（2012）。

⁶³ *France-Japon* No.20 (Mai-Juin1938) p.221

⁶⁴ 外山は大阪音楽短期大学（現・現大阪音楽大学）にて教鞭をとった。

本人作曲家についての紹介記事をフランスの雑誌に寄稿した。また、日本だけでなく、パリにおいても外山にピアノのレッスンをを行い、大澤の作品を世界初演して大澤の楽壇デビューを成功させた。

結論

全章を通して、これまで明らかにされていなかったジル＝マルシェックスの 4 回の来日時の音楽活動と日本音楽研究について述べた。これによって、彼が 1925 年の初来日以降も、長期間にわたって日本の音楽界と関わりを持ち、日仏文化の相互交流を図ったことが明らかになった。

第 1 章で述べたように、1910 年代後半から日本には多くの外国人演奏家が来日した。しかし、ジル＝マルシェックスは他の来日演奏家とは一線を画した存在であるといえる。なぜなら、彼は演奏だけでは伝えることのできない、ピアノ音楽史、演奏法、ヨーロッパの楽壇の動向を、言葉によって伝えるとともに、日本を訪れていない間にも、他国で自身の演奏活動をしなが、日本音楽に関する論文を著し、日本音楽に関する講演を行うことで、日本の楽壇とフランス音楽の、また、フランスの楽壇と日本音楽のかけ橋となろうとしたからである。彼がこの試みによって日仏の両政府から援助を受けたことも、彼の活動の特異性を示す要因である¹。

これまで第 2 章から第 4 章で述べたように、彼が果たした、日本の楽壇とフランス音楽のかけ橋としての役割、つまり、4 回の来日における音楽活動は以下のものであった。

まず、彼は 1925 年の初来日における 22 回の演奏会によって、日本では未知のものであった古今のフランス音楽、並びにヨーロッパの近現代音楽を紹介し、大きな衝撃を与えた。特に帝国ホテルにおける 6 夜の演奏会では、『主観的演奏会』『追想的演奏会』『舞踊音楽演奏会』の 3 つのテーマによって曲目を構成し、全ての演奏作品に対する解説を自身で演奏会プログラムに記すことで、日本の聴衆にフランス・ピアノイズムだけでなく、ピアノ音楽史の知識や当時音楽の中心地であったパリの、最新の音楽動向を知らせた。また演奏活動のなかには、外国人演奏家で初めてとなる御前演奏も含まれていた。彼が演奏において重視したものは、音の正確性ではなく、音楽の自由な表現であった。彼は日本の聴衆に、テクニックを魅せる名人芸を披露するのではなく、あくまで芸術としての音楽を聴かせようとした。彼の情感豊かな演奏は、彼らに、バロック、古典派、ロマン派の作品の新たな魅力を伝え、近現代の作品へ興味を抱かせた。ジル＝マルシェックスの演奏会を訪れた文化人は数多く、柴田南雄、野村光一、中島健蔵、小松耕輔、中野好夫、梶井基次郎などの著書に、彼らの受けた感銘が記されている。そして、松平頼則、清瀬保二、石田一郎、大澤

¹ フランス外務省がなぜジル＝マルシェックスを選び、支援したのかについての検証は、今後の課題としたい。薩摩治郎八やミシェル・ド・ランスによる紹介では、フランスの哲学者ディドロ (Denis Diderot 1713-1784) の末裔であるという記述があるが、真偽は不明。

壽人、井口基成などの音楽家が影響を受け、彼らは日本の音楽界を担う存在となっていた。

次に、ジル＝マルシェックスは、1931年に2回来日した。彼の来日は、在日フランス大使から外務大臣に宛てた手紙の検証により、フランス外務省がドイツ音楽偏重であった日本音楽界の状況を把握した上で、主体的に支援したことがわかった。そしてジル＝マルシェックスは、レクチャー・コンサートによって、西洋音楽、特にフランス音楽の魅力を伝えようとし、その普及に努めた。5日間にわたる東京と大阪でのレクチャー・コンサートは、コルトーの委嘱によってエコール・ノルマル音楽院で行われたものに基づいており、『宗教的感銘に依る作品の解釈』『童心の感銘に依る作品の解釈』『幻想的性質の作品に依る解釈』『民衆的感銘に依る作品の解釈』『描写的作品の解釈』の5つのテーマによって構成された。ジル＝マルシェックスは、これらのレクチャー・コンサートで、当時芸術の中心地であったパリにおける芸術潮流をそのまま日本に持ち込んだのであった。そして彼は、日仏会館と全国各地の大学におけるレクチャー・コンサートで、『フランスピアノ音楽史』『フランス音楽と日本人の感受性』をテーマに、フランス音楽の紹介に努めた。特に『フランス音楽と日本人の感受性』では、日本人の美意識について言及し、日本人の感性がフランス音楽に相応しいことを示した。そして、講演を聴いた須永克己は、ジル＝マルシェックスの講演内容に刺激を受けて、のちに自らの日本音楽論を展開してゆくこととなった。また、作曲家の松平頼則は、ジル＝マルシェックスにピアノのレッスンを受けて、フランス音楽を柱としたプログラム構成で演奏会を行い、ジル＝マルシェックスとの交流を通して知った近現代音楽から新しい語法を汲み取って作曲活動を行った。

最後に、ジル＝マルシェックスは、フランス外務省の支援に加え、彼の日本音楽研究に対する国際文化振興会からの援助により、1937年に来日した。今回の来日でとりわけ特徴的なのは、日本の作曲家と協力して音楽活動を行ったことである。彼は、独自の作品を生み出すようになった日本人作曲家たちと交流を深め、現代作曲家連盟の演奏会に助演して、清瀬保二、江文也、池内友次郎の作品を演奏した。さらに彼は、日仏音楽同好会の設立に携わり、フランスと日本の作曲家の関係を深めようと試みた。また、ジル＝マルシェックスの演奏会には、日本の文化人によって後援会が組織されたことから、彼が日本の音楽界とつながりを深めていたといえる。そして彼は、今回の来日においてもレクチャー・コンサートを行い、『16世紀から20世紀におけるヨーロッパ舞踊音楽』『パリにおけるショパンの音楽生活』『ドビュッシーにおける異国の影響』『象徴主義時代の音楽』『民衆音楽が現代

作曲家に及ぼす影響』の 5 つのテーマで講じた。そのうち『民衆音楽が現代作曲家に及ぼす影響』では、民衆音楽が諸民族の感受性を理解する鍵であり、それにより 19 世紀以降の西洋音楽が発展してきたことを日本の聴衆に説いている。彼は、日本の聴衆に西洋音楽史を様々な切り口から説明し、演奏することで理解を促すとともに、音楽の新しい聴き方、学び方を日本の聴衆に伝えた。

このように、ジル＝マルシェックスによる 4 回の来日における音楽活動は、演奏活動から講演活動、そして日仏の音楽界を結ぶ交流活動へと、日本の音楽界の歩みに寄り添いながら、形を変えて行われた。

また彼は、第 5 章で述べたように、フランスの楽壇と日本音楽のかけ橋となるために、日本の伝統文化や日本人作曲家の作品、また、彼らの活動をフランスの楽壇に紹介した。彼は、初来日時に日本の伝統芸能や日本音楽に感銘を受け、以後それらを研究対象とした。これには、彼が作曲家として日本音楽の素材を用いて独自の作品を生み出す目的もあった。彼は日本の伝統芸能における音楽の役割や用いられる和楽器の奏法について研究し、それらの音楽が生活に根付いていることに惹かれ、それらの特徴を旋律とリズムに見出した。そしてフランスの楽壇に対し、東洋音楽、特に日本音楽を分析して、その要素を作品の作曲に取り入れることを薦めたのである。これは、1935 年に彼自身の《芸者の 7 つの歌 *Sept Chansons de Geishas*》と《古き日本の 2 つの映像 *Deux Images du Vieux Japon*》によって体现された。その一方で、第 4 章で述べたようにジル＝マルシェックスは来日ごとに日本人作曲家と交流を深め、彼らの動向をフランスに伝えた。また、パリにおいても、彼は外山道子 (1913-2006) にピアノのレッスンをを行い、大澤壽人の作品を世界初演して大澤の楽壇デビューを成功させている。結果的にジル＝マルシェックスは、初来日後の 1927 年から 1939 年の間に日本音楽研究に関する 9 本の論文を日仏の雑誌に寄稿した。さらに彼は、1937 年に国際文化振興会の支援によってアジアの国々でも日本音楽に関するレクチャー・コンサートを行っている。

ジル＝マルシェックスは、演奏活動によって当時ドイツ音楽偏重であった日本の音楽界にフランス音楽を普及させるとともに、レクチャー・コンサートを行って、日本の聴衆に対して様々な切り口から西洋音楽史を講じ、演奏を聴かせた。彼の活動とフランス政府の対外政策、特に対ドイツという政治的意図との関連については、今後さらに研究を行う必要があるが、この彼の一連の活動を検証すると、結果的に、彼は日本の聴衆に対して単にフランス音楽や近現代作品を知らせたのではなく、バロックから近現代まで引き継がれて

きたヨーロッパ諸国の芸術の伝統を伝えたことがわかる。また、彼が日本音楽を研究し作曲家との交流を深めたことは、松平や大澤などを筆頭とした日本の作曲界の新たな活動の流れをつくる原動力となった。彼の日本音楽研究に関する執筆活動、講演活動、演奏活動や作曲活動は、フランスで報道され、彼はピアニストのみならず、日本音楽研究者の一人としても認識されていくこととなった。これらのことからジル＝マルシェックスは、日本へフランス音楽を紹介するだけでなく、長期にわたって日本の音楽家の活動を支え、フランスへ日本音楽を伝えることで日仏文化交流において重要な役割を果たしたといえる。

参考文献

- Canzoneri, Vincent 1938. "Background of Japanese Music." *Japan Times Weekly*, No.1 : 28-30.
- . 1938. "Background of Japanese Music." *Japan Times Weekly*, No.2 : 29-30, 39.
- . 1940. "Music of Japan : an Appreciation" *Contemporary Japan*, Vol.9 : 296-304.
- Claudiel, Paul 1927. "l'Oiseau noir dans le soleil levant."
- Cohen, Aaron I. 1987. "Michiko Toyama", *International Encyclopedia of Women Composers* : 703.
- Gil-Marchex, Henri 1934. "A propos de la musique coréenne." *Monde Musical*, No.45 : 73-75.
- . 1935. "Schumann au Japon." *Revue Musicale*, numéro spécial , No.161 : 125.
- Hara, Katsuro 1928. "Histoire du Japon des origines à nos jours."
- Honegger, Marc 1970. "Gil-Marchex, Henri", *Dictionnaire de la musique*. 1, Les hommes et leurs œuvres.
A-K : 407.
- Hovelaque, Émile 1921. "Les peuples d'Extrême-Orient : Le Japon."
- Toyama, Mitchiko 1937. "Un aperçu rapide de la musique Japonaise", *France-Japon*, No.23 : 247-248.
- Ushiyama, Mitsuru 1941. "Western music in Japan", *Contemporary Japan*, Vol.10 : 1313-1317.
- Vildrac, Charles 1927. "D'un voyage au Japon."
- Waterson, Richard A. William Lichtenwager, Virginia Hitchcock Herman, Horace I. Poleman and Cecil Hobbs 1950. "Bibliography of Asiatic Musics, Tenth Installment" *Notes, Second Series*, Vol.7, No.2:265-279.
- 秋山邦晴 林淑姫編 2003 『昭和の作曲家たち 太平洋戦争と音楽』 東京：みすず書房。
- 秋山邦晴、清瀬保二 1976 「日本の作曲界の半世紀 (26) 新興作曲家連盟から現音への歩みのなかで (1) ——清瀬保二氏に訊く」『音楽芸術』第 34 巻第 3 号 : 56-63。
- 秋山邦晴、松平頼則 1976 「日本の作曲界の半世紀 (27) 新興作曲家連盟から現音への歩みのなかで (2) ——松平頼則氏に訊く」『音楽芸術』第 34 巻第 4 号 : 66-63。
- 秋山邦晴、松平頼則 1976 「日本の作曲界の半世紀 (28) 新興作曲家連盟から現音への歩みのなかで (3) ——松平頼則氏に訊く」『音楽芸術』第 34 巻第 5 号 : 60-67。
- 秋山邦晴、松平頼則 1992 「証言・日本の作曲家とフランス」『ポリフォーン』第 10 巻:138-144。
- 秋山龍英編著 井上武士監修 1966 『日本の洋楽百年史』 東京：第一法規出版。
- 赤倉清造 1932 「ラヴェルと其の作品の素描」『音楽世界』第 4 巻第 2 号 : 96-104。
- 生島美紀子 2009 「帰国後：名ピアニスト ジル＝マルシェックスとの親交」大澤資料プロジェクト『大澤壽人スペクタクルⅠ ホームソングからピアノ協奏曲まで』 : 15。
- . 2012 「プログラムノート Ⅱ部：1920・30年代パリ楽壇の輝きと日本の交流、そして戦中」大澤資料プロジェクト『大澤壽人スペクタクルⅢ 1930年代ボストン・パリの輝きから戦後のシャンソンまで』 : 13-16。
- 井口愛子 1931 「コハンスキー先生を思ひて」『月刊楽譜』第 20 巻第 1 号 : 10。
- 井口基成 1977 『わがピアノ、わが人生』 東京：芸術現代社。

- 池内友次郎 1937 「巴里のハイカイと東京の音楽」『月刊楽譜』第27巻第2号：96-97。
- 石川康子 2001 『原智恵子 伝説のピアニスト』 東京：KK ベストセラーズ。
- 石田一郎 1935 「オー・クレピュスキュル」『音楽新潮』第12巻第1号：88-90。
- 板倉加奈子 2005 『原智恵子の思い出』 東京：春秋社。
- 伊藤朝子 2007 『プロコフィエフの日本滞在と大田黒元雄の功績』愛知県立芸術大学大学院音楽研究科修了論文（未公刊）。
- 伊藤制子 2001 「フォーレ時代の日本におけるフランス音楽の受容—軍楽隊とその周辺および音楽雑誌事情を中心に」『フォーレ手帖』第12号：17-27。
- 2003 「洋楽受容におけるフランス音楽をめぐる思考とその形成——日本におけるフランス音楽受容を考えるための一試論」東邦音楽大学『研究紀要』第14号：28-37。
- 伊庭孝 1926 『音楽文化叢書』 東京：文化生活研究会。
- 1928 『日本音楽概論』 東京：厚生閣書店。
- 牛山充 1924 『音楽鑑賞の智識』 東京：京文社。
- 海老沢敏、中村洪介、佐野光司 1987 「近代日本における洋楽の受容（ラウンドテーブル）」日本音楽学会『音楽学』第33巻3号：187-192。
- 笈田光吉 1930 「我が楽壇に寄す」『月刊楽譜』第19巻第11号：20-23。
- 1931 「クロイツァー教授を迎えて」『月刊楽譜』第20巻第4号：47-48。
- 1931 「クロイツァー教授を送って」『月刊楽譜』第20巻第6号：90-92。
- 大田黒元雄 1915 『バッハよりシェーンベルヒ』 東京：山野楽器店。
- 1916 『印象と感想 第一音楽論集』 東京：音楽と文学社。
- 1917 『洋楽夜話』 東京：岩波書店。
- 1918 『バッハよりシェーンベルヒ 続』 東京：音楽と文学社。
- 1919 『音楽日記抄』 東京：音楽と文学社。
- 1920 『音楽日記抄 第二（1916年至1919年）』 東京：音楽と文学社。
- 1921 『音楽日記抄 第三（1920年3月至1921年10月）』 東京：音楽と文学社。
- 1925 「東洋的西洋音楽」『月刊楽譜』第14巻第8号：23-24。
- 1925 『名曲大観』 東京：第一書房。
- 1933 『音楽万華鏡』 東京：第一書房。
- 1935 『音楽生活二十年』 東京：第一書房。
- 1935 「日本に於けるドビュッシー運動」『月刊楽譜』第27巻第6号：2-7。
- 1938 「日本におけるフランス音楽の回想」『音楽評論』第6巻第3号：55-58。
- 大地宏子 2007 「日本におけるピアノ教育の二つのスタンス—井口基成と宅孝二の比較から」『鶴見大学紀要』第44号：43-49。
- 大塚正則 1931 「一九三一年の洋楽放送」『月刊楽譜』第20巻第12号：75-82。
- 岡田暁生 2006 「ドイツ音楽からの脱出？——戦前日本におけるフランス音楽受容の幾つかの

- モード」京都大学学術出版会『日仏交感の近代—文学、美術、音楽』：364-381。
- オレンシュタイン, アービー 井上さつき訳 2006 『ラヴェル 生涯と作品』 東京：音楽之友社。
- 柿沼太郎 1927 「名曲解説」『アルス西洋音楽講座』第2巻：1-89。
- 笠羽映子 1987 「日本とドビュッシー——明治・大正期を中心に」 早稲田大学比較文学研究所『比較文学年誌』第24号：142-165。
- 1988 「日本とラヴェル——日本と西洋音楽をめぐる一考察」 早稲田大学比較文学研究所『比較文学年誌』第24号：142-165。
- 片山杜秀 2004 「作曲家と作品とその時代」『ロームミュージックファンデーション SP レコード復刻 CD 集：日本 SP 名盤 SP 復刻選集1 ロームミュージックファンデーション』；49-72。
- 2006 「Program Note」『オーケストラ・ニッポニカ 大澤壽人交響作品 関西・東京連続演奏会』：6-11。
- 加藤善子 2000 「近代日本における西洋音楽の『聴衆』—西洋音楽は階級文化たりえたのか」大阪大学大学院人間科学研究科『人間科学研究』第2巻：129-141。
- 2003 「『芸術』の概念をつくりだした学生たち—クラシック音楽の愛好スタイルからみる西洋文化の受容」『大学史研究』第19号：32-45。
- 神吉恵美 1998 「ジル＝マルシェックスのピアノ演奏会」 共同通信社『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』：170-175。
- 監入亀輔 1931 「クロイツァー教授の講習を聴く」『音楽世界』第3巻第5号：84。
- 1931 「一九三一年からの覚え書」『音楽世界』3巻第12号：12-19。
- 1931 「クロイツァー教授の講習を聴く」『音楽世界』第3巻第5号：84-91。
- 木戸敏郎、中村洪介、芳賀徹 1991 「外からの触発と日本の文化」『音楽之友』第49巻第7号：18-33。
- 清瀬保二 1983 『清瀬保二著作集 われらの道』 東京：同時代社。
- 熊沢彩子 2002 「アレクサンドル・チェレプニンと日本—昭和初期の作曲における影響」昭和音楽大学『研究紀要』第22号：1-16。
- 倉辻龍男 1931 「クロイツェル教授を聴く」『月刊楽譜』第20巻第6号：120。
- グレイ, セシル 大田黒元雄訳 1933 『現代音楽概観』 東京：第一書房。
- 黒川いさ子 1931 「クロイツァー先生」『月刊楽譜』第20巻第4号：44-46。
- K・M生 1932 「京城楽壇便り」『音楽世界』第4巻第5号：156。
- 神月朋子 2008 「昭和初期における洋楽の普及と創造—音楽雑誌の記事分析を通して」埼玉大学教育学部『埼玉大学紀要』Vol.57 No.2：157-170。
- 2009 「近代日本の芸術音楽とフランス音楽の関わりについての試論：1920年代の『音楽新潮』フランス音楽特集号を対象に」 埼玉大学教育学部『埼玉大学紀要』Vol.58 No.2：249-260。

- . 2011 「近代日本芸術音楽創造に対するフランス派の影響試論」 埼玉大学教育学部『埼玉大学紀要』Vol.60 No.2 : 141-147。
- クロイツァー, レオニード 笈田光吉訳 野村光一記 1931 「『ペダル』の話」『月刊楽譜』第20巻第7号 : 2-5。
- クロイツァー, レオニード 笈田光吉訳編 1934『新編ピアノ演奏法講義』 東京 : 音楽世界社。
- 後藤暢子 1984 「日本における表現主義音楽の受容」『思想』No.723 : 152-161。
- 小林茂 2005 「1925年の器楽的幻覚--アンリ・ジル=マルシェックスの演奏旅行と梶井基次郎」早稲田大学比較文学研究室『比較文学年誌』第41号 : 1-26。
- . 2008 「アンリ・ジルマルシェックスの演奏会詳細追補」 早稲田大学比較文学研究室『比較文学年誌』第44号 : 145-148。
- . 2010 『薩摩治郎八—パリ日本館こそわがいのち』 京都 : ミネルヴァ書房。
- コハンスキー, レオニード 訳者不明 1931 「日本に於ける洋琴教授法に就て」『月刊楽譜』第20巻第1号 : 2-5。
- 小松耕輔 1927 『音楽と民衆』 東京 : 蘆田書店。
- . 1927 「現代仏蘭西音楽と我音楽界との交渉」『日仏文化』第1輯 : 1-10。
- . 1929 『現代仏蘭西音楽』 東京 : アルス。
- . 1931 「音楽とラヂオ放送」『月刊楽譜』第20巻第1号 : 72-81。
- . 1952 『音楽の花ひらく頃 わが思い出の楽壇』 東京 : 音楽之友社。
- . 1957 『懐かしのメロディー 音楽家の回想』 東京 : 文芸春秋新社。
- . 1961 『わが思い出の楽壇』 東京 : 音楽之友社。
- コルトー, アルフレッド 松本太郎訳 1931 「クロード・ドビュッシーのピアノ曲 (1)」『月刊楽譜』第20巻第3号 : 41-45。
- . 1931 「クロード・ドビュッシーのピアノ曲 (1)」『月刊楽譜』第20巻第4号 : 72-77。
- . 1931 「クロード・ドビュッシーのピアノ曲 (2)」『月刊楽譜』第20巻第6号 : 74-79。
- . 1931 「クロード・ドビュッシーのピアノ曲 (3)」『月刊楽譜』第20巻第7号 : 65-71。
- 薩摩治郎八 1991 『せ・し・ぼ・ん—わが半生の夢』 東京 : 山文社。
- 佐野仁美 2010 『ドビュッシーに魅せられた日本人 フランス印象派音楽と近代日本』 京都 : 昭和堂。
- 獅子文六 1967 『但馬太郎治傳』 東京 : 新潮社。
- 芝崎厚士 1999 『近代日本と国際文化交流—国際文化振興会の創設と展開』 東京 : 有信堂高文社。
- 柴田南雄 1995 『わが音楽わが人生』 東京 : 岩波書店。
- 柴田南雄、高階秀爾 1982 「対談 現代への投影—音楽と美術のはざままで—」サントリー音楽財団『音楽沸騰 1919~1938』 : 24-45。
- 志保花明 1932 「巴里に挙げた音楽の日章旗—世界の原智恵子さん」『音楽世界』第4巻第11

- 号：54-67。
- ジャンケレヴィッチ、ヴラミール 福田達夫訳 『ラヴェル』 東京：白水社。
- 白石朝子 2011 「アンリ・ジル＝マルシェックスの日本における音楽活動と音楽界への影響—1925年の日本滞在をもとに」『愛知県立芸術大学紀要』第40号：240-260。
- . 2011 「アンリ・ジル＝マルシェックスの日本における音楽活動と音楽界への影響—1931-32年の日本滞在をもとに」愛知県立芸術大学音楽学部音楽学コース紀要『ミクストミュージック』第6号：56-72。
- . 2012 「アンリ・ジル＝マルシェックスによる日仏文化交流の試み—1937年の日本における音楽活動をもとに」『愛知県立芸術大学紀要』第41号：135-147。
- . 2013 「アンリ・ジル＝マルシェックスによる日仏文化交流の試み—4度の来日（1925-1937）における日本音楽研究と作曲家との交流をもとに」『愛知県立芸術大学紀要』第42号：119-131。
- シュミッツ、ロベール 須永克己訳 1931 「極東諸国の聴衆の感受性」『月刊楽譜』第20巻第7号：6-9。
- 菅原明朗 1930 「一九三〇年を送る」『月刊楽譜』第19巻第12号：2-4。
- 須永克己 1933 「音楽と日本国民性（一）」『調査時報』第3巻：8-11。
- .1936 『明日への音楽』東京：名曲堂。
- 染谷周子、杉岡わか子、三宅巖 1999 『ドキュメンタリー新興作曲家連盟 戦前の作曲家たち 1930-1940』東京：国立音楽大学附属図書館。
- 園部三郎 1971 「日本の演奏界とフランス音楽」『音楽の友』第29巻第10号：112-115。
- 高木東六 1933 『ピアノ演奏技巧 世界音楽講座III-18』東京：春秋社。
- . 2003 『愛の夜想曲』東京：日本図書センター。
- 瀧久雄 1932 「浪花狂想曲」『音楽世界』第4巻第1号：164-170、第4巻第3号：117-122。
- 武内博 1995 『来日西洋人名事典』東京：日外アソシエーツ株式会社。
- 田中規矩士 1931 「日本の好きなクロイツァー先生」『月刊楽譜』第20巻第4号：49。
- 辰野隆 1946 『随筆選集』東京：要書房。
- 長木誠二 1999 「日本における亡命ユダヤ人音楽家」『SP時代の名演奏家 日本洋楽史 来日アーティスト編』山野楽器：82-86。
- 東京芸術大学百年史編集委員会編 1987 『東京芸術大学百年史』東京音楽学校篇 第1巻 東京：音楽之友社。
- . 2003 『東京芸術大学百年史』東京音楽学校篇 第2巻 東京：音楽之友社。
- 藤堂雍子 2008 『古沢淑子楽譜コレクション目録 フランス歌曲研究会所蔵東京芸術大学音楽学部声楽研究会寄託資料』東京：藤堂雍子。
- 戸ノ下達也、長木誠司 2008 『総力戦と音楽文化—音と声の戦争』東京：青弓社。
- 富尾木知佳 1916 『西洋音楽史綱』東京：共益商社。

- 中島健蔵 1974 『証言・現代音楽の歩み 音楽とわたくし』 東京：講談社。
- 中島健蔵、清水脩、増澤健美 他 1956 「日本作曲界の歩み」『音楽芸術』第14巻第8号：52-62。
- 中野好夫 1985 『主人公のいない自伝 ある城下市での回想』 東京：筑摩書房。
- 中村洪介 1980 「フランスの国家型援助」『音楽芸術』第38巻第11号：46-47。
- . 1997 「日本と世界をつなぐもの—ジャポニズムから20世紀へ」『音楽芸術』第55巻第12号：18-21。
- . 2002 『西洋の音、日本の耳 近代日本文学と西洋音楽』 東京：春秋社。
- . 2003 『近代日本洋楽史序説』 東京：東京書籍。
- 中村理平 1993 『洋楽導入者—日本近代洋楽史序説』 東京：刀水書房。
- 名草芽生 1932 「天才少女甲斐美和子さん」『少女倶楽部』第10巻第9号：132。
- ニコルス、ロジャー 渋谷和邦訳 1996 『ラヴェル 生涯と作品』 東京：泰流社。
- 日佛會館発行 1926 『第二回財団法人日佛會館報告書』 東京：日佛會館。
- . 1932 『第八回財団法人日佛會館報告書』 東京：日佛會館。
- . 1938 『第十四回財団法人日佛會館報告書』 東京：日佛會館。
- 野辺地瓜丸 1950 「野辺地さんの末梢的音楽談義」『音楽芸術』第8巻第10号：82-88。
- 野村光一 1931 「一九三〇年の楽壇一瞥」『月刊楽譜』第19巻第12号：21-22。
- . 1931 「クロイツァーを聞く」『音楽世界』第3巻第6号：7。
- . 1931 「クロイツァーの獨奏」『月刊楽譜』第20巻第6号120。
- . 1934 『レコード音楽読本』 東京：中央公論社。
- . 1942 「自伝（五）」『音楽公論』第2巻第6号：98-105。
- . 1952 「コルトオの聴き方」『芸術新潮』第3巻第10号：161-164。
- . 1965 「クロイツァー、シロタ、レヴィ以前と以後—日本のピアノ音楽」『音楽芸術』第23巻第7号：6-9。
- . 1975 『ピアノ回想記』 東京：音楽出版社。
- 野村光一、中島健蔵、三善清達 1978 『日本洋楽外史』 東京：ラジオ技術社。
- 野村生（野村光一） 1931 「クロイツァー教授のピアノ講習會」『月刊楽譜』第20巻第5号：36。
- . 1931 「林龍作氏の提琴獨奏會」『月刊楽譜』第20巻第6号：121。
- 乗杉嘉壽、伊庭孝、堀内敬三他 1931 「東京音楽学校批判座談會」『音楽世界』第3巻第2号：14-29。
- 花岡千春 2006 「洋楽導入期から第2次大戦までの日本のピアノ曲について（1）幸田延、瀧廉太郎、山田耕筰、信時潔の作品とその周辺について」国立音楽大学大学院『音楽研究』：1-21。
- . 2007 「洋楽導入期から第2次大戦までの日本のピアノ曲について（2）清瀬保二、橋本國彦の作品とその周辺について」国立音楽大学大学院『音楽研究』：1-22。

- 林龍作 1931 「ナポリ回想記」『月刊楽譜』第20巻第5号：32-35。
- ハンカ、ペツォルト、訳者不明「日本人と西洋音楽」『音楽界』第9巻第4号：73-75。
- 樋口隆一、林淑姫、岡部真一郎ほか 2013 『五線譜に描いた夢—日本近代音楽の150年』東京：明治学院大学。
- 平田公子 1999 「須永克己の日本音楽観」『福島大学教育学部論集 人文科学部門』第67号：19-28。
- 平本恵子 2002 「松平頼則のピアノ曲の研究—1930年代を中心として」『エリザベト音楽大学研究紀要』第22号：27-42。
- 2004 「1930年代における松平頼則のピアノ曲に見られる創作理念と作曲家としての位置」広島芸術学会『藝術研究』第17号：1-15。
- 船山隆 1975 「ラヴェルと私たちの時代——その『現代性』と『新しさ』と」『音楽芸術』第33巻第6号：18-29。
- プロコフィエフ、セルゲイ 園部四郎、西牟田久雄共訳 1964 『プロコフィエフ自伝・評論』東京：音楽之友社。
- プロコフィエフ、セルゲイ サブリナ・エレオノーラ、豊田菜穂子訳 2009『プロコフィエフ短編集』横浜：群像社。
- 別宮貞雄 1971 「フランス音楽と日本の作曲と」『音楽の友』第29巻第10号：116-120。
- 星谷とよみ 1993 『夢のあとで—フランス歌曲の珠玉 古沢淑子伝』東京 文園社。
- 細川周平、片山杜秀 『日本の作曲家 近現代音楽人名事典』 東京：日外アソシエーツ。
- 堀内敬三 1926 「年頭偶感」『月刊楽譜』第15巻第1号：2-3。
- 1942 『音楽五十年史』東京：鱒書房。
- 1968 『音楽明治百年史』東京：音楽之友社。
- 堀成之 1984 「日本ピアノ文化史-14-ジル=マルシェックスの来日（フランス・ピアノリズムの紹介）」日本音楽舞踊会議『音楽の世界』第23巻第11号：12-19。
- 増澤健美、中島健蔵、吉田秀和他 1956 「日本作曲界の歩み」『音楽芸術』第14巻第9号：34-47。
- 松平頼則 1931 「ジル・マルシェックスを訪ふ」『音楽新潮』第8巻第5号：13-15。
- 1954 「松平頼則の音楽と人間の形成」『音楽芸術』第12巻第7号：8-19。
- 1988 「私の音楽語法と現代音楽」『今日の音楽』第2号：4-5。
- 松平頼則、湯浅譲二 1969 「対談 素材を乗り越える」『音楽芸術』第27巻第6号：30-36。
- 松本太郎 1932 「巴里音楽院長アンリー・ラボー氏と語る」『音楽世界』第4巻第5号：96-106。
- 1952 「コルトオの演奏講座」『芸術新潮』第3巻第9号。
- 水野久一郎 1968 「日本の洋楽—その輸入と変遷過程に対する批判的考察」『同朋学報』第18号：269-308。
- 皆川弘至 2004 「クラシック音楽文化 受容の変遷—外来演奏家によるコンサート史への一考察」『尚美学園大学芸術情報学部紀要』第4号：71-164。

- 宮沢縦一編著 1965 『明治は生きている 楽壇の先駆者は語る』 東京：音楽之友社。
- 宮沢縦一 1982 「都市と音楽生活 5—東京」サントリー音楽財団『音楽沸騰 1919～1938』24-45。
- 村上紀史郎 2009 『バロン・サツマと呼ばれた男—薩摩治郎八とその時代』 東京：藤原書店。
- . 2012 『音楽の殿様 徳川頼貞』 東京：藤原書店。
- 門馬直衛 1930 「音楽の社会性と資本主義化」『月刊楽譜』第19巻第12号：5-7。
- 柳澤健 1934 「国際文化事業とは何ぞや」 外交時報社『外交時報』第70巻第1号：71 - 92。
- 山根銀二 1950 「清瀬保二論—対談による」『音楽芸術』第8巻第6号：65-78。
- 山本尚志 1999 「洋楽と日本の間で—名演奏家が今問いかけるもの」『SP時代の名演奏家 日本洋楽史 来日アーティスト編』山野楽器：87-91。
- . 2004 『日本を愛したユダヤ人ピアニスト レオ・シロタ』 東京：毎日新聞社。
- . 2006 『レオニード・クロイツァー その生涯と芸術』 東京：音楽之友社。
- 吉田正 1932 「仙台楽境の近況」『音楽世界』第4巻第5号：152。
- ロザンタール, マニュエル、マルセル・マロナ編、伊藤制子訳 1998 『ラヴェル その素顔と音楽論』 東京：春秋社。

ジル＝マルシェックスの音楽活動と日本音楽研究に関する
雑誌記事、新聞記事一覧

アンリ・ジル＝マルシェツクスの音楽活動に関する雑誌記事(1925年5月～1926年1月)				
年月	雑誌名	巻号	題名	著者
1925年5月	音楽新潮	2(5)	挿絵 佛国大洋琴家ヂルマルシェツクス	薩摩治郎八
			九月来朝する佛国大洋琴家ヂル・マルシェツクスの紹介	
1925年6月	音楽新潮	2(6)	ジル・マルシェツクスのこと	大田黒元雄
1925年7月	音楽新潮	2(7)	ジルマルシェツクスの日本に於ける演奏	主 幹 (柿沼太郎)
1925年8月	音楽新潮	2(8)	ラヴェルのピアノ技巧について(上)	ジルマルシェツクス 小松耕輔訳
1925年9月	音楽新潮	2(9)	ラヴェルのピアノ技巧について(下)	ジルマルシェツクス 小松耕輔訳
			ジルマルシェツクス演奏曲目中の近代作品について	大田黒元雄
	音楽と蓄音機	12(9)	佛国洋琴家アンリーヂルマルシェツクス氏の来朝と大音楽會 佛国洋琴家アンリーヂルマルシェツクス	
1925年10月	音楽新潮	2(10)	ジルマルシェツクス氏を迎ふ	主 幹 (柿沼太郎)
	月刊楽譜	14(10)	口絵 今秋来朝する仏蘭西のピアニスト、ジル・マルシェツクス	
1925年11月	音楽評論	No.3	写真の人 ジル・マルシェツクス氏	伊庭生
	月刊楽譜	14(11)	ジル・マルシェツクス氏と語る	鹽入亀輔
1925年12月	月刊楽譜	14(12)	今年度楽界の回顧	門馬直衛
1926年1月	音楽評論	No.4	レヴィツキとジルマルシェツクスとを対比して	近衛秀麿 野村光一 小泉治 鈴木賢之進 大田黒元雄 堀内敬三 門馬直衛 弘田龍太郎 柿沼太郎 高折宮次 増澤健美 牛山充 小松耕輔
			ジル・マルシェツクス氏の送別宴「近代音楽の夜」記	伊庭生
1926年1月	月刊楽譜	15(1)	年頭偶感	堀内敬三

アンリ・ジル＝マルシェツクスの音楽活動に関する雑誌記事(1931年3月～1931年6月)				
年月	雑誌名	巻号	題名	著者
1931年3月	音楽世界	3(3)	楽壇万華鏡	A-a
			音楽新聞 フランス洋琴界の鬼才ヂル・マルシェツクス氏 再び来朝	
1931年4月	音楽新潮	8(4)	口絵 来演したジル・マルシェツクス氏 音楽會消息 ジル・マルシェツクス・ピアノ独奏會	
	月刊楽譜	2(4)	口絵 フランス楽曲を熱演したジュールマン・シェツクス氏 ジルマルシェツクスの独奏會	
1931年5月	音楽新潮	8(5)	ヂル・マルシェツクスを訪ふ	松平頼則
	音楽世界	3(5)	フランス音楽と日本人の感受性	ヂルマルシェツクス
1931年6月	音楽世界	3(6)	音楽新聞	

アンリ・ジル＝マルシェツクスの音楽活動に関する雑誌記事(1931年10月～1932年5月)				
年月	雑誌名	巻号	題名	著者
1931年9月	月刊楽譜	20(9)	月刊楽報 例年にもまして今秋楽壇の賑ひ	
1931年10月	音楽新潮	8(10)	音楽會消息	
	音楽世界	3(10)	二色刷口絵 今月来朝するヂルマルシエツクス氏	ミシェル・ド・ランス常盤雅彦訳
			鬼才ヂル・マルシェツクス	
			音楽新聞 ジル・マルシエツクス氏近く来朝す	
	月刊楽譜	20(10)	口絵 コルトオとヂルマルシエツクス	青柳瑞穂訳
			ピアノ技法の心理的基礎に関する講演への序論(アンリ・ヂルマルシエツクス)	
			鬼才ヂル・マルシェツクス	ミシェル・ド・ランス常盤雅彦訳
			コルトオよりヂルマルシエツクスへの手紙 1931年5月28日 於巴里	トレンド 佐野いつ子訳
			ファンジア・ベチカに就てーヂルマルシエツクスの演奏會曲目参照	
			ヂルマルシエツクスに依る五つの音楽解釈についての講座	広告
フィルハーモニー	5(10)	御知らせ	広告	
1931年11月	音楽新潮	8(11)	音楽會消息 ギル・マルシェツクス演奏會	
	月刊楽譜	20(11)	グラフセクション 作曲家モーリス・ラヴェルと洋琴家ジル・マルシェツクス氏	
	ムジカ	1(1)	仏蘭西エラール ピアノ演奏中のジルマルシエツクス氏	
1931年12月	音楽世界	3(12)	グラフセクション ギルマルシエツクス氏の洋琴解釈講	鹽入龜輔
			1931年からの覚え書	
	月刊楽譜	20(12)	1931年の洋楽放送	大塚正則
1932年1月	音楽世界	4(1)	なごや・あらべすく	渡邊登喜雄
			浪速狂想曲	瀧 久雄
1932年2月	音楽世界	4(2)	グラフセクション 宮城道雄氏の三曲合奏を聞いているジルマルシエツクス氏	近江屋二郎
			贅六通信	
	音楽新潮	9(2)	音楽會消息 ギルマルシエツクス告別演奏會	
月刊楽譜	21(2)	口絵 宮城道雄宅を訪問したヂルマルシエツクス氏		
1932年3月	音楽新潮	9(3)	ドビュッシイのプレリュード演奏方法に就て(上)(ヂル・マルシェツクスに據る)	松平頼則
	音楽世界	4(3)	浪速狂想曲	瀧 久雄
1932年4月	音楽新潮	9(4)	ドビュッシイのプレリュード演奏方法に就て(下)(ヂル・マルシェツクスに據る)	松平頼則
	音楽世界	4(4)	日本音楽の印象	ジールマルシエツクス 府上俊延 訳
1932年5月	音楽世界	4(5)	仙台楽境の近況	吉田正
			京城楽壇便り	K・M 生

アンリ・ジル＝マルシェツクスの音楽活動に関する雑誌記事(1937年5月～8月)				
年月	巻号	雑誌名	題名	著者
1937年5月	6(5)	音楽評論	ジルマルシェツクスピアノ独奏會	
	14(5)	音楽新潮	5月下旬久方ぶりに現代音楽演奏会を開く 佛國洋琴名手ジルマルシェツクス氏	
			音樂會消息 編輯室より	
26(5)	月刊楽譜	五月の演奏會		
1937年7月	26(7)	月刊楽譜	音樂會記録 ジルマルシェツクス氏洋琴獨奏會	野村光一
1937年8月	14(8)	音楽新潮	1937年度演奏會春のシーズン總決算	

アンリ・ジル＝マルシェツクスの音楽活動に関する新聞記事(1925年3月～1925年10月)				
月日	新聞名	見出し	著者	
3月9日	東京朝日新聞	佛國洋琴家の鬼才来朝す		
	讀賣新聞	フランスから青年洋琴家 ゼルマルシェツクス氏が 夫人をつれて今秋来朝		
3月17日	The Japan Times	M.Gil-Marchex, french pianist will visit Tokyo.		
3月20日	報知新聞	日本に紹介される生きた藝術品 来朝するヂ氏夫人 はフランス一の美人		
9月8日	東京朝日新聞	いよいよ来朝する佛一流のピアニスト ゼルマルシ ェツクス氏来月初旬入京		
10月2日	東京日日新聞	樂壇風聞		
10月4日	讀賣新聞	オンガク 佛國洋琴家ゼル氏来朝		
	東京朝日新聞	佛ピアニスト入京 ジルマル・シェツクス氏		
	The Japan Times	Noted french pianist here		
10月9日	東京朝日新聞	プログラムくらべ ゼ氏の神技をはじめ珍しい鳥居 維子さんの獨奏	野村光一	
	The Japan Times	Gil-Marchex, french pianist, in first concert tomorrow		
	The Japan Advertiser	Six recitals by Henri Gil-Marchex (広告)		
10月11日	東京日日新聞	樂壇風聞		
	都新聞	ピアノ名手 ゼ氏の演奏 昨夜ホテルで 音楽だより ゼ氏第二回演奏會		
10月12日	The Japan Times	Henri Gil-Marchex scores success in premier concert		
10月13日	東京日日新聞	ジルマルシェツクスはいふ	本人談	
10月14日	東京朝日新聞	ゼルマルシェツクスを聴く(上)	増澤健美	
	東京日日新聞	音樂評 驚くべき音響の詩人ゼルマルシェツクス(1)	小松耕輔	
10月15日	讀賣新聞	ゼル・マルシェツクス氏のピアノ演奏を聴く(主観的 音楽第一回演奏會)	平田義宗	
	東京朝日新聞	ゼルマルシェツクスを聴く(下)	増澤健美	
	東京日日新聞	音樂評 驚くべき音響の詩人ゼルマルシェツクス(2)	小松耕輔	
	時事新報	静かなる聴衆 私の藝術が判るのか—佛國ピアニスト の疑ひ 夕刊一席話	本人談	
	The Japan Times	Six recitals by Henri Gil-Marchex (広告)		
10月16日	東京日日新聞	音樂評 驚くべき音響の詩人ゼルマルシェツクス(3)	小松耕輔	
	The Japan Advertiser	Six Recitals by Henri Gil-Marchex (広告)		
10月22日	讀賣新聞	オンガク ゼル氏洋琴演奏會		
10月23日	都新聞	音楽だより ゼルマルシェツクス氏獨奏會		
	The Japan Times	Tomorrow's events Six Recitals by Henri Gil-Marchex (広告)		
	The Japan Advertiser	FOURTH RECITAL BY GIL-MARCHEX		
10月27日	東京日日新聞	樂界その折々 ゼルマルシェツクス		

アンリ・ジル＝マルシェツクスの音楽活動に関する新聞記事(1925年11月～1925年12月)				
月日	新聞名	見出し	著者	
11月3日	東京朝日新聞	先進的ピアニスト ギル・マルシェツクス氏(上)	増澤健美	
11月4日	東京朝日新聞	先進的ピアニスト ギル・マルシェツクス氏(下)	増澤健美	
11月10日	讀賣新聞	オンガク フランス音楽の夕		
11月11日	The Japan Times	Today's Events		
11月12日	The Japan Advertiser	Mr.Henri Gil-Marchex gives farewell concert.		
11月14日	京都日出新聞	女子學習院 創立記念祝賀会 學藝餘興に打興ぜらる		
11月17日	東京朝日新聞	學藝だより ギル・マルシェツクス氏ピアノ大演奏會		
11月18日	讀賣新聞	オンガク ギル氏洋琴演奏會二演奏會		
11月20日	都新聞	音楽だより ギルマルシェツクス氏演奏會		
11月23日	The Japan Times	Henri Gil-Marchex ,French Pianist, in Pleasing Ricial		
11月28日	The Japan Times	M Henri Gil-Marchex, French Pianist , Delights Kobe		
11月29日	大阪毎日新聞	佛國ピアニスト ジ氏演奏 十二月一二両日中央公會堂で		
11月30日	大阪時事新報	創立した大阪音楽協會 その主催音楽會		
12月2日	大阪毎日新聞	音楽の精髓をいかになく發揮 ギ氏の演奏會		
	大阪朝日新聞	名ピアニスト ギル氏演奏會		
12月3日	京都日出新聞	マ氏の演奏會 4日夕市公會堂で		
	大阪時事新報	ピアノを前のヂルマン シェツクス氏		
12月4日	The Japan Advertiser	French pianist plans to give return concert.		
12月8日	The Japan Advertiser	Henri Gil-Marchex will give his farewell piano recital.		
12月10日	讀賣新聞	オンガク ギルマルシェツクス氏送別ピアノ演奏會		
12月11日	東京朝日新聞	今年の樂壇(2)		柿沼太郎
	The Japan Advertiser	Many musical concerts here this week-end		
12月12日	横濱毎朝新報	佛國洋琴家 大演奏會 十四日高工で		
12月14日	横濱貿易新報	大ピアニスト ギルマルシェツクス氏演奏會 十四日夜高工講堂		
12月15日	讀賣新聞	ジルマルシェツクス氏の演奏會は今夕六時から		
12月19日	東京朝日新聞	學藝だより ギル・マルシェツクス氏無料獨奏會		
12月23日	The Japan Advertiser	Gil-Marchex presents piano recital in farewell to Tokyo.		

アンリ・ジル＝マルシェツクスの音楽活動に関する新聞記事(1931年3月～1931年4月)			
月日	新聞名	見出し	著者
3月17日	東京朝日新聞	春華やかな樂壇 ギルマルシェツクス氏等一流楽人続々来る	
	大阪朝日新聞	フランスの名ピアニスト来朝	
3月18日	東京朝日新聞	親しみ深く 名ピアニスト入京	
3月22日	東京朝日新聞	ジルマルシェツクスの夕	牛山充
3月25日	東京朝日新聞	ジル・マルシェツクス氏獨奏	
3月30日	神戸新聞	けふのラヂオ ピアノ獨奏	
4月5日	東京朝日新聞	洋楽 ギルマルシェツクス (洋琴名手)	
4月8日	東京朝日新聞	『日本精神とフランス音楽』 ギルマルシェツクス氏の講演を紹介	小松耕輔
4月9日	東京朝日新聞	ジ氏第二回獨奏會	牛山充
	大阪朝日新聞	佛國名ピアニスト 獨奏會を開く 十一日朝日會館で	
4月13日	神戸新聞	ジルマルセツクス氏を迎へて神戸で音楽會	
4月15日	京都帝國大学新聞	ジルマルセツクス氏の講演と演奏の夕	
4月27日	帝國大学新聞	ジ氏の講演	

アンリ・ジル＝マルシェツクスの音楽活動に関する新聞記事(1931年10月～1932年1月)				
月日	新聞名	見出し	著者	
10月5日	大阪朝日新聞	ジルマルシェツクス氏 きのふ来朝す		
	福岡日日新聞	佛の名ピアニスト マルセリス氏来る		
10月6日	東京朝日新聞	ジルマルシェツクス氏 三度来朝す まづラヂオで来朝第一聲		
	山形新聞	ラヂオ ピアノ獨奏 アンリーザルマルシェツクス		
	福岡日日新聞	佛國の新進 洋琴家ヂルマルシェツクス氏「三つの映像」を演奏		
10月21日	東京朝日新聞	ジ氏獨奏會		牛山充
11月10日	名古屋新聞	逝く秋にふさわしい佛國巨匠の演奏		
11月11日		ヂルマルシェツクス氏のピアノ獨奏會		
11月13日	三田新聞	名ピアニスト義塾で演奏		
	名古屋新聞	ヂルマルシェツクス氏のピアノ獨奏會		
11月14日	名古屋新聞	けふ公演するマルシェツクス氏		
12月5日	京都帝國大学新聞	ジルマルシェツクス氏 ピアノリサイタル ジルマルシェツクスへの讃歌	長廣敏雄	
	12月21日	東京帝國大学新聞	1931年を顧る 沈静ながらも順調な発達	堀内敬三
1月12日	福岡日日新聞	ラヂオ (大阪JOK)		

アンリ・ジル＝マルシェツクスの音楽活動に関する新聞記事(1937年3月～11月)			
月日	新聞名	見出し	著者
3月28日	東京朝日新聞	洋琴家ヂ氏来朝 (神戸電話)	
	大阪朝日新聞	四度目のニッポン フランス作曲家ヂルマルシェツクス氏来朝	
3月29日	東京朝日新聞	洋琴家ヂ氏入京	
	讀賣新聞	マ氏都入り 異才ピアニスト	
5月10日	東京帝國大学新聞	近代感覺的 洋琴演奏家	颯田琴次
5月19日	早稲田大学新聞	民謡と現代音楽 ジルマルシェツクス氏が来園	
5月20日	日本大学新聞	佛國音楽使節 藝術科で講演と演奏	
5月26日	早稲田大学新聞	現代作曲家に及せる民衆音楽の影響 ジルマルシェツクスの講演より (1)	山内義雄
		感激の名講演 聴衆起立して拍手 ジ氏の講義に熱狂!	
6月2日	早稲田大学新聞	現代作曲家に及せる民衆音楽の影響 ジルマルシェツクスの講演より (2)	山内義雄
6月9日	早稲田大学新聞	現代作曲家に及せる民衆音楽の影響 ジルマルシェツクスの講演より (3)	山内義雄
6月14日	一橋新聞	郷土音楽助長が作曲家の役目 ヂルマルセエツクス氏の講演	
6月28日	東京帝國大学新聞	新しい演奏會 ジルマルシェツクス氏を聴く	辰野隆
		初夏 音楽のつどひ ジ氏象徴主義解剖	
11月25日	三田新聞	ジルマン氏の”サヨナラ演奏会”	

ジル＝マルシェックスの日本における音楽活動に関するフランスの雑誌記事(1937年5月-1938年1月)			
発行年月	雑誌名	ページ	タイトル
1937.5	France-Japon	114	Informations littéraires et artistiques
1937.7		149-151	Une Fête Franco Japonaise à Tokio (le 24 Avril 1937)
1938.1		26	Le Pianiste Gil-Marchex au Japon
1938.1		215-216	Quelques Minutes avec le Pianiste Gil-Marchex de Retour du Japon

ジル＝マルシェックスの日本における音楽活動に関するフランスの新聞記事(1926年1月-1938年6月)		
発行年月	新聞名	タイトル
1926.1.23	des Débats	Les Tournées de M.Henri Gil-Marchex
1926.2.15	Paris-Midi	Gil-Marchex au Japon
1931.2.24	Paris-Midi	Au Départ du Transsibérien avec le Compositeur-Voyageur Gil-Marchex
1931.4.23	des Débats	La Musique Française au Japon
1931.4.23	Paris-Soir	Gil-Marchex au Japon
1931.8.1	Nouvelles Littéraires	Le Théâtre Classique au Japon
1931.9.12	Chautecler	Une Tournée de Conférences de M.Gil-Marchex
1931.11.2	Intransigeant	L'art Français en Extrême-Orient, Un Ambassadeur de la Musique à Tokio
1938.6.2	Candede	Debussy,Ravel au Japon

国際文化振興会関連資料のジル＝マルシェックスに関する記事(1937年3月-1939年7月)			
発行年月	雑誌名	ページ	タイトル
1937.3	K.B.S.Quarterly 1936.10-1937.3	4	Exchange Professors, Lectures and Fellowships
1938.3	K.B.S.Quarterly 1937.4-1938.3	11	Encouragement of Studies on Japan
1939.4	佛蘭西に於ける日本の文化事業	84	第4章 演劇、映画、音楽、スポーツ (3) 音楽と舞踊
1939.7	国際文化	7	佛蘭西の對外文化事業

ジル＝マルシェックスによる日本音楽についての記事・論文			
発行年月	雑誌名	ページ	タイトル
1927.3	Revue Pleyel	244-248	A Propos de la Musique Japonaise
1931.11	Revue Musicale	305-320	La Musique au Japon
1932.4	音楽世界	86-96	日本音楽の印象
1935.2	France-Japon	56-58	La Musique au Japon
1937.6	Contemporary Japan	264-276	Music in Japan
1937.7	婦人之友	89-91	日本婦人ト西洋音楽
1938.1	France-Japon	214-215	Quelque minutes avec le Pianiste Gil-Marchex
1938.1	France-Japon	216-217	Les Japonaises et la Musique Occidentale
1939.1	France-Japon	29-32	La Musique Moderne Japonaise

資料編

ジル＝マルシェックスによる公演内容

1 1925年の日本滞在における音楽活動

1925年の日本滞在中における音楽活動は、表1の通り22公演である。既に先行研究で14回の演奏会¹については曲目が明らかにされているが、これらは当時のプログラムをそのまま記したものであり誤訳や不明瞭な点があったため²、ここでは、出来る限り現在使用されている曲名で示すこととする。また、演奏会に関する新聞記事をもとに補足説明を行う。さらに、その他の8公演（表1①-⑧）が新たに判明したため、その詳細を記載する。

10月3日	来日	11月25日	関西学院ホール（神戸）
10月10日	帝国ホテル(1)	12月1日	大阪中之島中央公會堂
10月11日	帝国ホテル(2)	12月2日	大阪中之島中央公會堂
10月17日	帝国ホテル(3)	12月3日	オリエンタルホテル(神戸) ③
10月24日	帝国ホテル(4)	12月4日	岡崎市公会堂（京都）
10月25日	帝国ホテル(5)	12月8日	送別宴 ④
11月1日	帝国ホテル(6)	12月12日	帝国ホテル(慈善演奏会) ⑤
11月7日	日佛會館	12月13日	帝国ホテル
11月11日	丸の内日本工業倶楽部	12月14日	横濱高等工業学校講堂 ⑥
11月13日	女子學習院(御前演奏) ①	12月15日	日本青年會館 ⑦
11月21日	上野音楽学校講堂	12月22日	報知講堂 ⑧
11月22日	日本青年會館 ②	12月23日	退京

1) 演奏活動

① 帝国ホテルにおける6夜の演奏会

ジル＝マルシェックスは、主観的音楽演奏会（10月10日、11日）、追想的音楽演奏会（10月17日、24日）、舞踊音楽演奏会（10月25日、11月1日）と題し、帝国ホテルにおいて6回シリーズの演奏会を行った³。プログラムは表2-1から表2-6のとおりである⁴。

バッハ	平均律 プレリユードとフーガ C-dur、c-moll
ベートーヴェン	ソナタ 第32番 作品111
	プレリユード 作品28
	17番、14番、21番、15番、24番
ショパン	エチュード 作品10-1(もしくは10-7)、 10-3、作品10-4(もしくは25-7)、 作品25-11(もしくは10-2)、25-4
ルーセル	ピアノのための組曲作品14より プレリユード
シュミット	影 作品64より 第3曲 この影、その印象
フランク	プレリユード、コラールとフーガ

モーツァルト	幻想曲 c moll
ベートーヴェン	ソナタ第23番 作品57 熱情
フォーレ	ノクターン 第6番 作品63 Des dur 即興曲 第3番 作品34 As dur
ドビュッシー	雪の上の足跡 前奏曲集第1巻より
ショパン	スケルツォ第2番
シューマン	交響的練習曲

¹ 小林茂(2005)による。また、同(2010)には、11月22日と12月14日の演奏会が加えて報告されたが、詳細は明らかにされていない。また、「14日は、帰国の船に乗るための横浜に移動して、その横浜で、出発前の最後の演奏会を開いた」という記述は誤りであると考えてよい。

² 作品番号がなく調性のみ記載である場合など。

³ 本論29頁参照。

⁴ 演奏会プログラムをもとに作成。そのなかで調性のみ記載されており該当する曲目が複数あるものは、(もしくは○○)の形で示した。

ベートーヴェン	ソナタ 第31番 作品110
クープラ	ドードー-或いはゆりかごの愛
シューマン	子供の情景
ショパン	子守歌、エチュード2曲
ドビュッシー	版画(全3曲)
ラヴェル	夜のガスパール
リスト	メフィストワルツ

リュリ	パサカイユ (ジル=マルシェックス編曲)
パーセル	古代英国及び愛蘭土舞踊[ママ]
ラモー	ソローニユの馬鹿者
	タンブラン
	ミュゼット
バッハ	イギリス組曲第5番より サラバンド、パスピエ
	イギリス組曲第6番より ガヴォット
スカルラッティ	ジグ e-moll[ママ]
モーツァルト	トルコ行進曲 ピアノソナタ第11番第3楽章
シューベルト	16のレントラー「ウイーンの淑女たちのレントラー」と2つのエッセーズ Op.67, D734
ロッシーニ	ヴェネツィアの競艇 (歌曲のため編曲?)
	踊り(ナポリのタランテラ) (歌曲のため編曲?)
ムソルグスキ	オペラ『ソロチンツィの定期市』より ゴバック (ラフマニノフ編曲?)
グリーク	ノルウェー民俗舞曲
リスト	ハンガリー狂詩曲 第2番
シャブリエ	気まぐれなブーレ
ラヴェル	亡き王女のためのパヴァーヌ
バルトーク	アレグロ・バルバロ
ドビュッシー	前奏曲集第1巻より
	デルフィの舞姫たち、バックの踊り
サンサーンス	ワルツ形式の練習曲 作品52-6

ショパン	バラード (全4曲)
ドビュッシー	映像 第1集より 水の反映
	映像 第2集より 金色の魚
	前奏曲集第1集より 沈める寺、西風の見たもの、 亜麻色の髪の乙女、ミンストレル
クープラ	ひるがえるパヴァレ
ダカン	かっこう
ブーランク	3つの無窮動
ジャン・クラ	2つの風景より 海の風景
イペール	巡り会いより 花売り娘たち、 クレオールの娘たち、おしゃべり娘たち
リスト	伝説S. 175より 海の上を歩くパオラの聖フランチェスコ

フランシスク	オルフェの宝 (ジル=マルシェックス編曲)
シューマン	謝肉祭
ウェーバー	舞踏への勧誘
ショパン	マズルカ 作品30-2(もしくは33-4)、 作品33-2
	ワルツ 作品34-2、作品64-2、 作品70-3
	英雄ポロネーズ
ファリヤ	三角帽子より 粉屋の踊り
アルベニス	スペインの歌作品232より やしの木陰、セギディーリヤ
ドビュッシー	子供の領分より ゴリウオーグのケーキウォーク
ミヨー	ブラジルの郷愁
ストラヴィンスキー	ピアノ・ラグ・ミュージック
ラヴェル	五時フォックス・トロット (ジル=マルシェックス編曲)

② 日佛會館と丸の内日本工業倶楽部における演奏会

ジル=マルシェックスは、帝国ホテルの演奏会を成功させた後、日佛會館と丸の内日本工業倶楽部で演奏会を行った。プログラムは、表3⁵、表4の通りである。丸の内日本工業倶楽部では、「フランス音楽の夕」と題して⁶、当時の現代フランス音楽の中にクープラ、ダカンのバロック音楽を配置したプログラムで行われた。

バッハ	平均律 プレリユードとフーガ C-dur, c-moll
クープラ	翻るパヴァレ
ドビュッシー	前奏曲集第1集より 沈める寺、西風の見たもの、 亜麻色の髪の乙女、ミンストレル
アルベニス	スペインの歌作品232より やしの木陰、セギディーリヤ
シューマン	謝肉祭
ラヴェル	夜のガスパール

フランク	プレリユード、コラルとフーガ
フォーレ	即興曲 第3番 作品 34
ドビュッシー	映像第1集より 水の反映
	映像第2集より 金色の魚
	前奏曲集第1集より 亜麻色の髪の乙女、ミンストレル
	版画より グラナダの夕暮れ、雨の庭
クープラ	翻るパヴァレ
ダカン	かっこう
ブーランク	3つの無窮動
ラヴェル	夜のガスパール
ディエメ	水夫の歌 作品12

⁵ 小林茂 (2005 : 22)

⁶ 『讀賣新聞』1925年11月10日付。

③ 女子学習院における御前演奏（表 1①）

続いて、ジル＝マルシェックスは御前演奏を行った。11月14日付『京都日出新聞』は、11月13日の女子学習院の創立記念祝賀会に関する記事を以下のように載せている。

皇后陛下が東伏見宮妃殿下、賀賜宮妃、東久邇宮妃、竹田宮妃、李王世子妃各殿下並びに一木宮相、松浦院長以下職員、学生幼児等の奉迎を受けさせられ御入場…講堂に臨御フランス人ジルマルチツクス氏のピアノ演奏を御聴取。

ジル＝マルシェックスがこの祝賀会に参加することになった経緯は定かではないが、閑院宮殿下が足を運ばれた11日の演奏会における成功がその一因であると考えられる⁷。御前演奏を行ったことは彼の成果の一つとされ、12月23日付 *The Japan Advertiser* や1926年1月23日付 *Journal des débats*、2月15日付 *Paris-Midi* が「アンリ・ジル＝マルシェックスはこれまでどんな優秀な外国人芸術家でさえ許されなかった御前演奏を初めて成し遂げた演奏家である」と記している。

④ 上野音楽学校講堂における演奏会

ジル＝マルシェックスは、上野音楽学校で演奏会を行った。プログラムは表5の通りである⁸。それには、これまで演奏していないラヴェル《クーブランの墓》、ゲーゼン《万華鏡》、エネスコ《組曲作品10》が組み込まれ、これらは、日本初演であった。11月23日付 *The Japan Times* に演奏会の様子が報告されており、「これまでジル＝マルシェックスの演奏を聴いた熱心なファンが訪れていた…月光ソナタ、ショパンのノクターン、ワルツ、スケルツォが聴衆の心を奪った。」と記されている。

ベートーヴェン	ソナタ 第14番 作品27「月光」
ショパン	ノクターン 作品37-2
	ワルツ cis-moll
	スケルツォ 第2番
ゲーゼン	万華鏡 作品18
エネスコ	組曲第2番作品10より トッカータ
サティ	太った人形のスケッチとからかいより トルコ風のチロル舞曲、やせた踊り
ラヴェル	クーブランの墓より プレリュード、リ ゴードン、メヌエット、トッカータ
ドビュッシー	前奏曲集第1集より 亜麻色の髪の乙女、ミンストレル
グリーグ	夜曲 抒情小品集 作品54-4
	ノルウェー民俗舞曲
リスト	スペイン狂詩曲

⑤ 日本青年會館における演奏会（表 1②）

11月18日付『讀賣新聞』は、「日本青年館が主催となりジル氏演奏を民衆的に聴かせる

⁷ 『第二回日仏會館報告書』に「日本工業倶楽部ニ演奏会ヲ催ホシタルニ、閑院宮殿下ハ姫宮殿下御同列ニテ御台臨ノ榮ヲ賜ハリ」という一文が載せられている。

⁸ 小林茂（2005：22）

爲めに二十二日午後二時から外苑日本青年館で演奏会を催ふし、氏が今迄演奏した中で評判のよかつたものゝみをやる」という一文を載せた。同様に、17日付『東京朝日新聞』と20日付『都新聞』にも宣伝が載せられた。

⑥ 関西学院ホールにおける演奏会

ジル＝マルシェックスは、神戸を訪れ、関西学院ホールで演奏会を行った。プログラムは表6の通りである⁹。フランス近現代の作品はドビュッシーのみであるが、このリサイタルには大澤壽人が訪れており、影響を受けたことが明らかになっている¹⁰。

ベートーヴェン	ソナタ 第23番 作品57「熱情」
シューマン	交響的練習曲
ドビュッシー	前奏曲集第1集より デルフィの舞姫たち、パルクの踊り、 沈める寺、西風の見たもの、 亜麻色の髪乙女、ミンストレル
ショパン	ワルツ 2曲
リスト	ハンガリー狂詩曲 第2番

⑦ 大阪中之島中央公會堂における連続演奏会

神戸での演奏会を終えたジル＝マルシェックスは大阪へ移動し、大阪中之島中央公會堂で2夜連続の演奏会を行った。11月29日付『大阪毎日新聞』と11月30日付『大阪時事新報』に記事が載せられ、プログラムも明記されている。それらによると、この演奏会は新しく創立された大阪音楽協会¹¹の主催事業第1回目であり、ジル＝マルシェックスが「日本では餘り聴く機会のない十七、十八世紀の作品と現代の新進作家とを携へて来朝して居るから欧州のピアノ音楽を完全に理解する爲には教へられる點が多い筈である」¹²して、表7-1、表7-2のプログラムが示されている。

バッハ	プレリュードとフーガ
スカルラッチィ	ジーグ e moll
モーツァルト	トルコ行進曲 ピアノソナタ第11番 第3楽章
ベートーヴェン	ソナタ 第14番 作品27「月光」
ファリヤ	三角帽子より 粉屋の踊り
アルベニス	スペインの歌作品232より やしの木陰
ムソルグスキー	ゴパック オペラ『ソロチンツィの定期市』より (ラフマニノフ編曲?)
ストラヴィンスキー	ピアノ・ラグ・ミュージック
バルトーク	アレグロ・バルバロ
リスト	メフィストワルツ
	バラード 第1番
ショパン	プレリュードから2曲 エチュードから3曲 英雄ポロネーズ

フランシスク	オルフェの宝 (ジル＝マルシェックス編曲)
フランク	プレリュード、コラールとフーガ
ラヴェル	夜のガスパール
ラヴェル	五時フォックス・トロット (ジル＝マルシェックス編曲)
ラモー	ミュゼットとタンブラン
ドビュッシー	版画
プーランク	3つの無窮動
サン・サーンス	ワルツ形式の練習曲 作品52-6

⁹ 小林茂 (2005 : 23)

¹⁰ 序論 6 頁参照。

¹¹ 「有沢潤、鈴木仁十郎、山本爲三郎の三氏を理事に、荒木和一氏を監事とし…この協会創立の趣旨は、餘に寂しい我が楽壇により輝かしい音楽の世界を拓く点にある」『大阪時事新報』1925年11月30日付

¹² 『大阪時事新報』1925年11月30日付。

演奏会後には、当日の様子が新聞に掲載され¹³、初日の演奏について『大阪毎日新聞』は、「これ以上望み得られない程の健實さと同時に繊細さを見せて」¹⁴おり、バッハやモーツァルトの作品では、「濃淡の色合いの極めて細かい、近代的な輝きが添えられ、ベートーヴェンの「月光曲」に至つては作曲者がドイツ人であることを忘れさせるほどの細かい美しさがあり…第三部ではショパンの幾曲かがこの人独特の美しいタッチで演奏された」¹⁵と報道している。また、『大阪朝日新聞』は、ジル＝マルシェックスが、バッハの作品で「柔らかいタッチで複雑した音色と技巧なハーモニーの美しい繪を展開したのが聴衆を惹きつけ」¹⁶、スカルラッティやムソルグスキー、リストの作品といった「速いテンポの中では、魂を掻きむしられるばかりいゝ楽音を聴かせた。ベートーヴェンの月光の曲も従来感情や技巧ばかりのフランス人を超へて理性美に突き込んで行く氏の姿が見える。この點からも氏が現代藝術史上の新人であることが許されやう」¹⁷と記載した。

⑧ オリエンタルホテルにおける演奏会（表1③）

ジル＝マルシェックスは大阪での演奏会の翌日、再び神戸で演奏会を行った。11月28日付 *The Japan Times* は、11月25日に行われた演奏会の報告と12月3日のオリエンタルホテルにおける演奏会の宣伝を載せた。プログラムは、表8の通りである。

ベートーヴェン	ソナタ 第32番 作品111
シューマン	謝肉祭
ファリヤ	三角帽子より 粉屋の踊り
アルベニス	スペインの歌作品232より やしの木陰 セギディーリヤ
ラヴェル	亡き王女のためのパヴァーヌ
バルトーク	アレグロ・バルパロ
ドビュッシー	版画(全3曲)
リスト	伝説S. 175より 海の上を歩くパオラの 聖フランチェスコ

⑨ 岡崎市公会堂における演奏会

ジル＝マルシェックスは、オリエンタルホテルでの演奏会と同じ内容（表9）で、翌日京都の岡崎市公会堂でも演奏した。1925年12月3日付『京都日出新聞』には、プログラムが明記されている。

ベートーヴェン	ソナタ 第32番 作品111
シューマン	謝肉祭
ファリヤ	三角帽子より 粉屋の踊り
アルベニス	スペインの歌作品232より やしの木陰、セギディーリヤ
ラヴェル	亡き王女のためのパヴァーヌ
バルトーク	アレグロ・バルパロ
ドビュッシー	版画(全3曲)
リスト	伝説S. 175より 海の上を歩くパオラの聖フランチェスコ

¹³ 『大阪毎日新聞』1925年12月2日付、『大阪朝日新聞』1925年12月2日付、『大阪時事新報』1925年12月3日付。

¹⁴ 『大阪毎日新聞』1925年12月2日付。

¹⁵ 『大阪毎日新聞』1925年12月2日付。

¹⁶ 『大阪朝日新聞』1925年12月2日付。

¹⁷ 同上

⑩ 薩摩邸における演奏会（表 1④）

『音楽評論』¹⁸によると、神田駿河臺の薩摩邸内のヴィラ・モン・カプリスで催され「来客は薩摩氏の知人に限られたので男女合はせて十八九人」でありジル＝マルシェックスが「コンサートの緊張した儀式ばつた態度ではなく、譜を見ながら落ち寛いだ様子」で演奏した。曲目は「ストラヴィンスキイの、1925年6月に作曲されたといふ、ごく新しいソナタ¹⁹やダリウスミローやドビュツシイ、ケラツクのソナタなど」であったと記されている。

⑪ 帝国ホテルにおける連続演奏会（表 1⑤）

ジル＝マルシェックスは再び帝国ホテルで演奏会を行った。『月刊楽譜』第15巻第1号は、東京女学館新築後援會同窓白菊會主催、薩摩治郎八後援であることを紹介し²⁰、12月8日付 *Japan Advertiser* が演奏会に関する記事を載せた。演奏曲目は表 10-1、10-2 の通りである。ジル＝マルシェックスが12日は特にピアノ音楽史を意識して演奏曲目を構成し、13日はプーランクやグラナドスの作品を日本初演したことがわかる。この2点において、これらの演奏会は、彼が最初に行った6夜の連続演奏会と同様に重要なものであるといえよう。

表10-1 帝国ホテル(12月12日)

第1部	18世紀の音楽	第2部	19世紀の音楽	第3部	20世紀の音楽	
リュリ	バサカイユ	ロッシーニ	ヴェネツィアの競艇	ドビュツシー	前奏曲集第1巻より	
ラモー	ミュゼットとタンブラン	ショパン	フルツ2曲		版画より 雨の庭	
	ソローニュの馬鹿者		エチュード2曲	ミヨー	ブラジルの郷愁	
ダカン	かつこう	子守歌	ストラヴィンスキー	ピアノ・ラグ・ミュージック		
クーブラン	ドードー或いはゆりかごの愛	リスト	ラ・カンパネラ	プーランク	3つの無窮動	
クーブラン	ひるがえるパヴァーレ			ラヴェル	五時フォックストロット	
スカラッティ	ジューグ					
モーツァルト	トルコ行進曲					

表10-2 帝国ホテル(12月13日)

ショパン	プレリュード作品28より 1番、3番、6番、7番、8番、15番、16番、17番、18番、20番、23番、24番
ショパン	エチュード 作品10-1(もしくは10-7)、10-3、10-4、10-5(もしくは25-9)、10-6、10-8、 10-9(もしくは25-2) 作品25-6、25-11、25-12
プーランク	散策より 自動車で、馬にまたがって、飛行機で、乗合自動車で、鉄道で、自転車で、大急ぎで(乗合馬車で)
ルーセル	ピアノのための組曲作品14より ロンド
イベール	巡り会いより 花売り娘たち、クレオール娘たち、氣どった娘たち、羊飼娘たち、おしゃべり娘たち
グラナドス	スペイン舞曲集作品37より アンダルーサ
バルトーク	アレグロ・バルパロ
ストラヴィンスキー	ピアノ・ラグ・ミュージック
ムソルグスキー	ゴパック オペラ『ソロチンツィの定期市』より (ラフマニノフ編曲?)
リスト	ラ・カンパネラ

¹⁸ 伊庭生 (1926,1 : 13)

¹⁹ 1924年に作曲されたソナタと推測される。

²⁰ 12月4日付 *The Japan Advertise* によると、12日の演奏会は、「麻布高木町で新しい学校を作る計画がある東京女学館のための慈善演奏会」であったことがわかる。また小林茂は、薩摩治郎八の二人の妹が東京女学館を卒業していることに触れ、「妹二人のため母校が校舎新築をするに当たっての同窓会後援事業に協力して、収益の提供を行った」(小林, 2010) と記している。

⑫ 横浜高等工業学校講堂における演奏会（表 1⑥）

12月12日付『横浜毎朝新報』は、演奏会についての短い宣伝を載せ、14日付『横浜貿易新報』は顔写真を含む詳しい記事を掲載した。プログラムは表 11 の通りである。

ベートーヴェン	ソナタ第14番 作品27「月光」
ショパン	子守唄 作品57
	ワルツ 作品64-2, 英雄ポロネーズ
シューマン	謝肉祭
ラモー	ミュゼットとタンブラン
ダッカン	かつこう
ドビュッシー	前奏曲集第1集より 沈める寺
	版画より 雨の庭
ラヴェル	亡き王女のためのパヴァーヌ
リスト	ハンガリー狂詩曲 第2番

⑦ 日本青年会館における演奏会（表 1⑦）

12月15日付『讀賣新聞』が「オンガク」の記事の欄に、「ジル＝マルシェツクス氏演奏會は今夕六時から外苑青年會館」という一文を載せている。

⑧ 報知講堂における演奏会（表 1⑧）

12月19日付の東京朝日新聞が短い宣伝を載せ、24日付 *The Japan Advertiser* が演奏会の詳細を報告している。それには以下のように記されている。

ジル＝マルシェツクスは日本とのお別れと音楽愛好家の温かい受け入れへの感謝としてコンサートを企画し、無料で特別な招待もなく行われたので会場には人が溢れ、遅れてきた者は立ち席でさえ入ることが出来なかった。当日は3部構成で演奏され、第1部ではフランクのプレリュード、コラールとフーガ、ショパンのプレリュード作品 28-15「雨だれ」、ワルツ 2曲、軍隊ポロネーズ、第2部ではドビュッシーの作品で構成されたプログラム、そして第3部では、ラモー、ダッカン、モーツァルト、ラヴェル、リスト、アルベニス、サン・サーンスの作品が披露され、聴衆から大喝采を受けた。

2) ジル＝マルシェツクスによる演奏曲目一覧

これまで述べてきたように、ジル＝マルシェツクスは、22回の演奏会を行った。彼が、1925年の来日で演奏した全曲目を一覧にして示すと表 12-1、表 12-2 の通りである。これらの表から、ジル＝マルシェツクスが、バロック時代から近現代の作品まで膨大な数の演奏レパートリーを持っていたことがわかる。また、ミヨーの《ブラジルの郷愁》(1921年)、プーランクの《散策》(1923年) やイベールの《巡り会い》(1924年) など 1920年以降に楽譜出版された作品が数多く含まれていることには大変驚かされる。バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、ショパン、リストといった、当時の日本の聴衆にも聴き馴染みにあ

る作品の中に、このような近現代の作品を含めてプログラムを構成したジル＝マルシェックスの構成力と、彼の演奏技術は、単に日本初演作品の多さだけではなく、もっと評価されるべきであるといえる。

作曲者	曲目	初演奏日
フランシスク	オルフェの宝(ジル＝マルシェックス編曲)	11月1日
リュリ	パサカイユ(ジル＝マルシェックス編曲)	10月25日
パーセル	古代英國及び愛蘭土舞踊[ママ]	10月25日
クーブラン	ドードー或いはゆりかごの愛 ひるがえるバヴォレ	10月17日 10月24日
ダカン	かっこう	10月24日
ラモー	ソローニュの馬鹿者 タンブラン ミュゼット	10月25日 10月25日 10月25日
バッハ	平均律 プレリユードとフーガ C-dur, c-mol イギリス組曲第5番より サラバンド、パスピエ イギリス組曲第6番より ガヴォット	10月10日 10月25日 10月25日
スカルラッティ	ジーク e-moll[ママ]	10月25日
モーツァルト	幻想曲 c-moll トルコ行進曲 ピアノソナタ第11番第3楽章	10月11日 10月25日
ベートーヴェン	ソナタ 第14番 作品27「月光」 ソナタ 第23番 作品57「熱情」 ソナタ 第31番 作品110 ソナタ 第32番 作品111	11月21日 10月11日 10月17日 10月10日
シューベルト	16のレントラー「ウイーンの淑女たちのレントラー」と2つのエコセーズ Op.67, D734	10月25日
ショパン	プレリユード 作品28 14番、15番、17番、21番、24番	10月10日
	プレリユード 作品28 1番、3番、6番、7番、8番、16番、18番、20番、23番	12月13日
	エチュード 作品10-1(もしくは10-7)、10-3、10-4、作品25-11	10月10日
	エチュード 作品10-9(もしくは25-2)、作品10-6、作品25-6、12	12月13日
	エチュード 作品10-8(もしくは25-3)、作品10-5(もしくは25-9)	10月17日
	子守歌 作品57	10月17日
	スケルツォ 第2番	10月11日
	バラード 第1番、第2番、第3番、第4番	10月18日
	マズルカ 作品30-2(もしくは33-4)、作品33-2	11月1日
	ワルツ 作品34-2、作品64-2、作品70-3	11月1日
	英雄ポロネーズ	11月1日
シューマン	ワルツ cis -moll	11月21日
	ノクターン 作品37-2	11月21日
	謝肉祭	11月1日
リスト	交響的練習曲 子供の情景	10月11日 10月17日
	メフィストワルツ	10月17日
	伝説S. 175より 海の上を歩くパオラの聖フランチェスコ	10月24日
	ハンガリー狂詩曲 第2番	10月25日
	スペイン狂詩曲	11月21日
ラ カンパネラ	12月13日	
ロッシーニ	ヴェネツィアの競艇(歌曲のため編曲?) 踊り(ナボリのタランテラ)(歌曲のため編曲?)	10月25日 10月25日
ウェーバー	舞踏への勧誘	11月1日
フランク	プレリユード、コラールとフーガ	10月10日
サン・サーンス	ワルツ形式の練習曲 作品52-6	10月25日
フォーレ	ノクターン 第6番 作品 63 即興曲 第3番 作品 34	10月11日 10月11日
シャブリエ	気まぐれなブルーレ	10月25日
グリーグ	ノルウェー民俗舞曲 夜曲 抒情小品集 作品54-4	10月25日 11月21日

作曲家	曲目	初演奏日
ドビュッシー	映像第1集より 水の反映	10月24日
	映像第2集より 金色の魚	10月24日
	前奏曲集第1集より 沈める寺、西風の見たもの、亜麻色の髪乙女、ミンストレル	10月24日
	前奏曲集第1巻より 雪の上の足跡	10月11日
	版画(全3曲)	10月17日
	前奏曲集第1巻より デルフィの舞姫たち、バックの踊り	10月25日
ラヴェル	子供の領分より ゴリウオーグのケーキウオーク	11月1日
	夜のガスパール(全3曲)	10月17日
	亡き王女のためのパヴァーヌ	10月25日
	クーブランの墓より プレリユード、リゴードン、メヌエット、トッカータ	11月21日
ディエム	水夫の歌 作品12	11月7日
シュミット	影 作品64より 第3曲 この影、その印象	10月10日
ルーセル	ピアノのための組曲作品14より プレリユード	10月10日
	ピアノのための組曲作品14より ロンド	12月13日
プーランク	3つの無窮動	10月24日
	散策より 自動車で、馬にまたがって、飛行機で、乗合自動車で、鉄道で 自転車、大急ぎで(乗合馬車で)	12月13日
ジャン・クラ	2つの風景より 海の風景	10月24日
イベール	巡り会いより 花売り娘たち、クレオール娘たち、おしゃべり娘たち	10月24日
	巡り会いより 気どった娘たち、羊飼娘たち	12月13日
サティ	太った人形のスケッチとからかいより トルコ風のチロル舞曲、やせた踊り	11月21日
ミヨー	ブラジルの郷愁	11月1日
ムソルグスキー	ゴパック オペラ『ソロチンツィの定期市』より (ラフマニノフ編曲?)	10月25日
バルトーク	アレグロ・バルバロ	10月25日
ファリャ	三角帽子より 粉屋の踊り	11月1日
アルベニス	スペインの歌作品232より やしの木陰、セギディーリヤ	11月1日
グラナドス	スペイン舞曲集作品37より アンダルーサ	12月13日
ストラヴィンスキー	ピアノ・ラグ・ミュージック	11月1日
グーゼン	万華鏡 作品18	11月21日
エネスコ	組曲第2番作品10より トッカータ	11月21日

2. 1931年-32年の日本滞在における音楽活動

ジル＝マルシェックスは、1931年に2度来日した。まず3月から約1カ月の間に東京の他、大阪、神戸、京都を訪れ、12回の演奏、講演活動を行った(表13)。そして10月の再来日においては約4ヶ月の滞在中、名古屋、京都、大阪、神戸、福岡と全国各地を訪れ、京城、奏天、大連へも足を運んだ。(表14)。

日	来日	4月11日	朝日會館(大阪)
3月17日	来日	4月14日	神戸下山手通青年會館
3月18日	華族會館	4月15日	京都帝國大学
3月21日	朝日新聞社講堂	4月21日	東京帝國大学
3月23日	華族會館(共演 林龍作)	4月25日	東京音楽学校
3月28日	日佛會館	4月27日	シベリヤ經由で帰国
3月30日	ラジオ放送出演		
4月7日	朝日新聞社講堂		

日	シベリヤ鉄道で来邦	10月30日	文化學院	12月4日	土佐堀 Y.M.C.A.ホール
10月5日	シベリヤ鉄道で来邦	11月13日	名古屋醫科大学	12月7日	土佐堀 Y.M.C.A.ホール
10月6日	ラジオ放送出演	11月14日	名古屋市公會堂	12月8日	土佐堀 Y.M.C.A.ホール
10月13日	東北帝國大学	11月22日	東京音楽学校	12月9日	京都帝國大学
10月17日	東北帝國大学	11月25日	日本青年會館	1月6日	華族會館
10月19日	朝日新聞社講堂	11月26日	日比谷公會堂	1月12日	ラジオ放送出演
10月22日	文化學院	12月1日	慶応義塾大学	1月14日	日本青年會館
10月23日	文化學院	12月2日	土佐堀 Y.M.C.A.ホール	2月7日	横濱出帆海路帰国
10月26日	文化學院	12月3日	土佐堀 Y.M.C.A.ホール		
10月27日	文化學院				

1) 全国各地における演奏活動

まず、全国各地における演奏活動とラジオ放送の出演について述べる。

① 東京

ジル＝マルシェックスは日佛會館に滞在し、東京を中心に演奏活動を行った。華族會館、朝日新聞社講堂においてそれぞれ 3 回、また日本青年會館や日比谷公會堂においても演奏会を行っている。

a. 華族會館における演奏会

彼は華族會館において 3 回の演奏会を行った。1 回目に披露された曲目は、表 15-1 の通りである。当日配布されたプログラムには、「松韻会主催、常磐会後援」と「スタンウェイピアノ使用（竹内樂器店）」の記載があった。

フランシスク	オルフェの宝物 (ジル＝マルシェックス編曲)
ラモー	ミュゼットとタンブラン
クーブラン	翻るバウオレ
バッハ	ガヴォット
スカルラッティ	ジグ
ラヴェル	夜のガスパール
プーランク	2つのノヴェレット
ドビュッシー	前奏曲集第2巻より 月光の降り注ぐテラス バックの踊り
バルトーク	アレグロ・バルバロ
フランク	プレリユード、コラルとフーガ

2 回目には彼の友人であるヴァイオリニスト林龍作

(1897-1960)²¹の助演によりプログラムが構成されている

(表 15-2)²²。3 回目 (1932 年 1 月 6 日) には、日佛會館

主催による「ジル＝マルシェックス留別会」が開かれ、彼は、ショパン、ドビュッシー、アルベニス、グリーク、サン・サーンスの作品を演奏した。また、ソプラノ歌手宮川

シューマン	謝肉祭	ウーバー	舞踏への招待
ドビュッシー	前奏曲集第1巻より 雪の上の足跡、ミンストレル	ショパン	ポロネーズ
	版画より グラナダの夕暮れ、雨の庭	助演 林龍作	
ストラヴィンスキー	ピアノ・ラグ・ミュージック	ヴィタリ	シャコンヌ
ラヴェル	亡き王女のためのパヴァーヌ	モーツァルト	メヌエット
リスト	メフィスト・ワルツ	フォーレ	ドリー

美子 (1911-1996) も彼の伴奏により演奏を披露した。この会にはフランス、ベルギー両国大使も訪れ、会員とその家族等 350 名が訪れるという盛会であった²³。

b. 朝日新聞社講堂における演奏会

ジル＝マルシェックスは、朝日新聞社主催、フランス大使館後援により朝日新聞社講堂においても3回演奏会を行った。『東京朝日新聞』には演奏会直前に宣伝が載せられており、それによると曲目は表16-1から表16-3の通りである。

²¹ 『月刊楽譜』第20巻第4号には「林龍作氏帰朝第一回提琴獨奏會、5月17日、日本青年館、ショルツ伴奏」の広告が載せられている。また、この演奏会の批評として同雑誌第20巻5号に野村光一によって「林氏の音色が眞に綺麗なこと…勿論氏がフランスに於いて技術を習得されたゆゑである」と記された。

²² 『音楽會消息』『音楽新潮』第8巻第4号84頁

²³ 『財団法人日仏會館第八回報告書』

3回目には、イタリア人作曲家テデスコ (Mario Castelnuovo-Tedesco 1895-1968) の日本初演が行われた事が注目される。演奏会後には牛山充 (1884-1963) や野村光一による批評が新聞や雑誌に載せられた。牛山は、2回目の演奏会が「ベートーヴェン、シューマン、ショパン及びリ

ドビュッシー	前奏曲集第2巻より 月光の	プーランク	三つの無窮動
フォーレ	即興曲第3番	ミヨー	ブラジルの郷愁より4曲
アルベニス	スペインの歌作品232より やしの木陰、セギディーリヤ	ストラヴィンスキー	ピアノ・ラグ・ミュージック
セヴラック	春の墓地の片隅	ラヴェル	亡き王女のためのパヴァーヌ
サン・サーンス	ワルツ形式の練習曲 作品52		夜のガスパール(全曲)
			五時フォックス・トロット (ジル=マルシェックス編曲)

ストに対する氏の極めて個性的な解釈に接する機会」²⁴となったと述べ、また野村は、前回の来日と比較して以下のように記している

ベートーヴェン	ソナタ第14番 作品27「月光」
シューマン	謝肉祭
ショパン	プレリュード第15番「雨だれ」
	スケルツォ 第2番
	子守歌
	ワルツ cis moll
	英雄ポロネーズ
リスト	ハンガリー狂詩曲第2番
ドビュッシー	版画(全3曲)
グリーグ	ノルウェー民族舞曲 (アンコール)

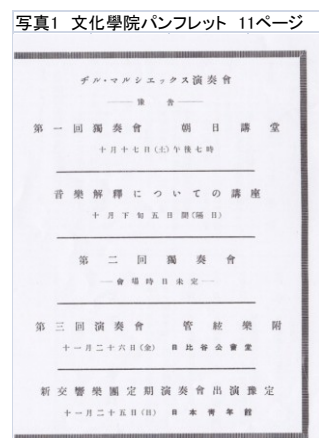
ショパン	ソナタ 第2番
ドビュッシー	映像第1集より 水の反映、ラモー礼讃
	映像第2集より
シャブリエ	10の絵画風小品集より
テデスコ	ピエディグロッタ
ブラームス	パガニーニ変奏曲

氏は元来荒削りな血気に逸る洋琴家であつたやうに思ふ。従つて氏は往年ところどころ間違ひをやり整頓されない完璧で無い弾き振りをしたのであつた。然し、今日に於いては、年の功と充分な経験とによつて、氏は益々技を練り、態度に落ち着きを現して、欺様な缺点を除去しゐる。しかもその上、氏本来の驚くべき指先能力に寄つて益々洋琴家としてすぐれた資質を發揮しつつあるのである。…氏はあらゆる近代佛蘭西樂曲中最も至難な最も絢爛なラヴェル—特に「夜のガスパール」—に最上の弾き振りを見せてゐるのである²⁵。

このように、彼の演奏が高評価を得たことは、第3章第1節で述べた彼のフランスでの活躍に裏付けられている。

c. その他の演奏会

彼は、日本青年會館と日比谷公會堂においても演奏会を行った。文化学院での講座(第2節第1項で詳しく述べる)で配布されたプログラムに宣伝が載せられた(写真1)。それ



²⁴ 牛山充「ジ氏第二回獨奏會」『東京朝日新聞』1931年4月9日付

²⁵ 野村生(1931,第20巻第4号:103)

によると 11 月 25 日には新交響樂團と、また 26 日には管弦樂團[マ]と共演する予定であることが見受けられる。そして翌年 1 月 14 日には、日本青年會館でリサイタルを行ったことが記されている²⁶。

② 地方（大阪、神戸、名古屋）における演奏活動

ジル＝マルシェックスは、東京以外にも大阪、神戸、名古屋を訪れて演奏活動を行った。

a. 大阪（朝日會館）

ジル＝マルシェックスは、4月11日に清樂会主催により、大阪朝日會館で演奏会を催した。

ベートーヴェン	32の変奏曲	バルトーク	アレグロ・バルパロ
フランク	前奏曲、コラールとフーガ	ドビュッシー	版画より グラナダの夕暮れ、雨の庭
ラモー	ミュゼットとタンブラン	サン・サーンス	ワルツ形式の練習曲 作品52
クーブラン	翻るパヴァーレ	ショパン	ノクターン E dur
ダカン	かっこう		ワルツ c moll
スカルラッティ	ジューク		スケルツォ 第2番
ラヴェル	亡き王女のためのパヴァーヌ	リスト	ハンガリー狂詩曲 第2番

表17のように長時間のプログラムが披露されている²⁷。

b. 神戸（神戸下山手通青年會館）

1931年4月13日付『神戸新聞』には、「日佛楽壇の藝術的交流のため佛國政府から補助を得て来朝した眞に稀に見る天才洋琴家」ジル＝マルシェックスが、「14日…神戸下山手通青年會館で神戸に於ける晴れの演奏会を開催することとなつた。」と記載されている。

c. 名古屋（名古屋市公会堂）

1931年11月10日付『名古屋新聞』は、啓心會主催、名古屋新聞社後援により演奏会を催すジル＝マルシェックスを写真入りで紹介し、「眞の音楽藝術にひたらうとするものには、千載一遇のチャンスであらう」

ベートーヴェン	ソナタ 第23番 作品57「熱情」
ショパン	前奏曲第15番「雨だれ」
	3つの練習曲
	ポーランド舞曲[ママ]
ドビュッシー	二つの前奏曲[ママ]
ラヴェル	亡き王女のためのパヴァーヌ
バルトーク	アレグロ・バルパロ
アルベニス	二つのスペイン舞曲
リスト	ハンガリー狂詩曲

と13、14日にも宣伝記事を載せた。この演奏会は、名古屋醫大の長松英一博士が尽力して行ったもので、名古屋としては初めての二十数ページに及ぶプログラムが作られた。曲目は、表18の通りである。当日の聴衆は約千人ほどで「聴衆も奏者も静かなアトモスフィアを楽しんだ」が、一方で「(名古屋の楽壇の) お歴々は一人も顔をみせなかつた」²⁸と報告されている。

③ 3回のラジオ放送出演

1931-32年の滞在中、ジル＝マルシェックスはラジオ放送に3回出演した。放送日には、新聞

²⁶ 『財団法人日佛會館第八回報告書』

²⁷ 「佛國名ピアニスト 獨奏會を開く」『大阪朝日新聞』1931年4月9日付

²⁸ 渡邊登喜雄（1931,第4巻第1号：156）、当日配布されたプログラムについての詳細は不明。

のラジオ番組欄にプログラム（表19-1、19-2、19-3）が載せられ、地方においても、例えば、山形（10月6日付『山形新聞』掲載）などでもジル＝マルシェックスの演奏を聴くことができた。JOAK（日本放送協会東京放送局）洋楽主任の大塚正則は彼のラジオ放送出演に対して以下のように述べている。

三月と十月にフランスのアンリー・ジル＝マルシェックス氏と四月に独逸のレオニド・クロイツァー氏等の各洋琴巨匠を…迎へ得たことは無上の幸福であり…AKとしても之等樂聖の放送を成し得た事は一つの誇りであり且又一般好樂家と全國千萬のラヂオファンに多大の貢献をした。²⁹

ジル＝マルシェックスとクロイツァー³⁰という、フランス・ピアノズムとドイツ・ピアノズムの相対する演奏家による演奏を同じ時期に楽しむことができたのは、日本の聴衆にとって大変貴重な機会であったに違いない。

ラモー	ミュゼットとタンブラン
ダカン	かっこう
スカルラッティ	ジーク
モーツァルト	トルコ行進曲
ショパン	ワルツ 作品34-3
	ワルツ 作品64-2
	エチュード2曲[ママ]
ドビュッシー	前奏曲集第1巻より バックの踊り

ドビュッシー	映像第1集より 水の反映、ラモー礼讃
	映像第2集より
ラヴェル	鏡より 道化師の朝の歌
アルベニス	スペインの歌作品232より
ファリャ	アンダルシア幻想曲
バルトーク	アレグロ・バルバロ
リスト	ハンガリー狂詩曲 第2番

シューベルト	16のレントラー「ウイーン の淑女たちのレントラー」 と2つのエコセーズ Op.67
ロッシニ	ヴェネツィアの競艇 (歌曲のため編曲?)
	踊り(ナポリのタランテラ) (歌曲のため編曲?)
ドビュッシー	前奏曲集第2巻より 月光の降り注ぐテラス
	前奏曲集第1巻より バックの踊り、ミントレル 版画より

2) 日佛會館と各大学におけるレクチャー・コンサート、演奏会

次に、教育機関において行われたレクチャー・コンサートと演奏会について示す。会場としては、ジル＝マルシェックスが滞在した日佛會館に加え、全国各地の大学が挙げられる。彼の講演テーマは、それぞれの会場において訳者が異なるため若干の違いはあるが、大きく二つに分けられる。ひとつは、『フランス音楽と日本人の感受性』、もうひとつは『フランスピアノ音楽史』である。また、京都帝國大学、慶応義塾大学、東北帝國大学、東京音楽学校における演奏会を紹介し、それぞれの内容の違いを示す。

²⁹ 大塚正則（1931,第20巻12号:77）

³⁰ 第1章参照。

①『フランス音楽と日本人の感受性』

a. 日佛會館

ジル＝マルシェックスは、3月28日日佛會館で『日本精神とフランス音楽』と題するレクチャー・コンサートを行った。これが、彼の日本における初めてのレクチャー・コンサートである。演奏された曲目は表20の通りであり、4月8日付『東京朝日新聞』で、小松耕輔が「近来まれにみる興味と暗示に富んだ講演であった」と述べている。また、この講演の筆記が、『音楽世界』1931年5月号に載せられており、第3章第2節で詳しく記した。

フランシスク	オルフェの宝 (ジル＝マルシェックス編曲)
クーブラン	翻るバヴァレ
ダカン	かっこう
ラモー	ミュゼットとタンブラン
ショパン	エチュード プレリュード
フランク	プレリュード、コラールとフーガ
ドビュッシー	前奏曲集第1集より 沈める寺、西風の見たもの
サティ	小曲2曲
ブーランク	ノヴェレット2曲
ラヴェル	五時フォックス・トロット (ジル＝マルシェックス編曲)

b. 京都帝國大学

彼は、4月15日に京都帝國大学において『日本人の感受性とフランス音楽』のテーマでレクチャー・コンサートを行った。プログラムは「フランス古代から近代に至るラモー、クーブラン、ダアキン、ショパン、ドビュッシー、ラヴェル等」の作品であった。曲目の詳細は資料に記載がないが、おそらく日佛會館と同じプログラムではないかと推測される³¹。

②『フランスピアノ音楽史』

a. 東京帝國大学

ジル＝マルシェックスは4月21日に東京帝國大学で「佛蘭西ニ於ケル洋琴音楽ノ發達」³²をテーマにレクチャー・コンサートを行った。「聴衆は非常に多く…来賓の中に獨、白、佛、伊の大使、ペルシャ公使等の名士及本學の教授夫人家族」³³が訪れ、「題名の如く佛國音楽の歴史的發達を音楽の伴奏により實演したが、氏の名技に言葉は分からぬながら、傾聴する者多く盛會」³⁴であった。

b. 名古屋醫科大学

彼は、1932年1月13日、名古屋醫科大学において「十六世紀から現代にいたるフランス音楽について」と題したレクチャー・コンサートを行った。会場には60人ほど集まり、彼の言葉は長松英一博士の通訳により「上品なユーモアを混へながら文學的な見解を多分に加へて」語る

³¹ 『京都帝國大學新聞』1931年4月15日付。

³² 『財団法人日仏會館第八回報告書』1932年3月、9頁。

³³ 『帝國大學新聞』1931年4月27日付。

³⁴ 『帝國大學新聞』1931年4月27日付。

れた³⁵。

③ 慶応義塾大学、京都帝国大学、東北帝国大学、東京音楽学校における演奏会

慶応義塾大学、京都帝国大学、東京音楽学校では、講演を伴わないピアノリサイタルが行われた。曲目構成には、各大学の要望が反映され³⁶、慶応義塾大学と京都帝国大学では、フランス音楽のみで構成されたが、東北帝国大学、東京音楽学校では、バッハ、ベートーヴェン、シューマン、リスト、バルトーク、アルベニスの作品も取り入れているところが注目される。

a. 慶応義塾大学

11月13日付、11月26日付『三田新聞』には、ジル＝マルシェックスによる「佛蘭西音楽の夕」の記事が掲載された。演奏会は「佛國の大使より塾長宛に紹介」³⁷があり実現したもので、「1500人の学生」³⁸が出席した。曲目は表21の通りであり、当日配布されたプログラムには、「日本楽器會社供提山葉ピアノ使用」との記載に加え「どうぞ此フランスの音楽の夕を十分に楽しまれ、フランスの藝術に對する平生のあこがれを満足さして下さい」と記されている。

表21 慶応義塾大学(12月1日)			
フランスク	オルフェの宝 (ジル＝マルシェックス編曲)	ブーランク	二つの小品
フランク	プレリュード、コラールとフーガ		3つの無窮動
ラヴェル	夜のガスパール	ミヨー	ブラジルの郷愁
ドビュッシー	前奏曲集第1集より 沈める寺、西風の見たもの、亜麻色の髪 of 乙女、バックの踊り、ミンストレル	サン・サーンス	ワルツ形式の練習曲作品52-6

b. 京都帝国大学

12月9日、京都帝国大学では、ピアノリサイタルとして、表22のプログラムが演奏された。

この演奏会には、「本學々生、関係者、交響樂團後援會以外は入場を許さず」行われ、「夜の

表22 京都帝国大学(12月9日)			
ドビュッシー	映像第1集より 水の反映、ラモー礼讃	ドビュッシー	前奏曲集第1集より 沈める寺、西風の見たもの、亜麻色の髪 of 乙女、バックの踊り、ミンストレル
	映像第2集より 金色の魚		前奏曲集第2巻より 月光の降り注ぐテラス
	版画より グラナダの夕暮れ、雨の庭	ラヴェル	鏡より 道化師の朝の歌
子供の額分より ゴリウオーグのケーキウォーク	亡き王女のためのパヴァーヌ		
ラヴェル	夜のガスパール(全曲)		五時フォックストロット(ジル＝マルシェックス編曲)

³⁵ 渡邊登喜雄 (1932,第4巻第1号:156)

³⁶ Œuvres No.64 Concerts de propagande donnés par M.Gil Marchex à Tokio 8 Décembre 1931 M.D. de MARTEL, Ambassadeur de la République Française au Japon à Son Excellence Monsieur BRIAND Ministre des Affaires Etrangères à Paris

³⁷ 「名ピアニスト 義塾で演奏」『三田新聞』1931年11月13日付

³⁸ Œuvres No.64 Concerts de propagande donnés par M.Gil Marchex à Tokio 8 Décembre 1931 M.D. de MARTEL, Ambassadeur de la République Française au Japon à Son Excellence Monsieur BRIAND Ministre des Affaires Etrangères à Paris

ギアスパルは氏でなくては味はえぬところがある。…近頃はないいゝ夜ですつかりうれしくなつた。」³⁹との批評が記されている。

c. 東北帝国大学

ジル＝マルシェックスは、10月13日に東北帝国大学でレクチャー・コンサートを行い、17日に学内の法文学部講堂で演奏会を行った。現存するパンフレットから、演奏会は杜都洋楽同好會主催、仙臺ワグネルクエンテット[マ]後援による『杜の楽壇第1回定期演奏会』であった。曲目は表23の通りである⁴⁰。

ベートーヴェン	ソナタ第23番 作品57「熱情」
ショパン	前奏曲 第15番「雨だれ」
	スケルツォ 第2番
	三つの練習曲へ長調変ト短調ハ短調[マ]
	英雄ポロネーズ
ドビュッシー	前奏曲集第1集より沈める寺、ミンストレル
ラヴェル	水の戯れ
ムソルグスキー	オペラ『ソロチンツィの定期市』よりゴバック
アルベニス	スペインの歌作品232より やしの木陰、セギディーリヤ
バルトーク	アレグロ・バルバロ
リスト	ハンガリー狂詩曲 第2番

d. 東京音楽学校

ジル＝マルシェックスは、1931年に4月25日と11月22日の二回、東京音楽学校で演奏会を開いた。東京音楽学校においては、他の大学と異なり、レクチャー・コンサートではなくリサイタルの形式をとっている。11月22日のプログラムは表24の通りである。

在日フランス大使は、東京音楽学校での演奏会について、「校長は、とりわけ、ジル＝マルシェックスの提案を受け入れることをためらった後考え直し、同校の大講堂を提供した。その場所では、数百人の若い音楽家たちが集まった」と記している⁴¹。彼のこの経験も、次回の来日における東京音楽学校に対する批判へとつながっていく⁴²。

クーラン	お気に入り 翻るバヴァレ	ラヴェル	水の戯れ
ダカン	かっこう	ドビュッシー	子供の領分より ゴリウオーグのケイクウオーク
ラモー	メヌエット	シャブリエ	10の絵画風小品集より 牧歌、スケルツォ・ワルツ
	リゴードン	バルトーク	アレグロ・バルバロ
	ミュゼットとタンブラン	アルベニス	スペインの歌作品232より やしの木陰、セギディーリヤ
バッハ	ガヴオット	リスト	海の上を歩くパオラの聖フランチェスコ
スカルラッティ	ジーク	ショパン	ノクターン Op.37-2
シューマン	謝肉祭(全曲)		スケルツォ 第2番
フォーレ	ノクターン第6番		ワルツ Op.64-2
			英雄ポロネーズ

³⁹ 瀧久雄(1931,第4巻第1号:166頁)

⁴⁰ 吉田生(1931,第4巻第5号:152頁)には、「昨秋の當地方に於ける音楽會…其中で最も高級なものは、ハイフェッツ及びジル・マルシェックス両氏の獨奏會である」との記載がある。

⁴¹ Œuvres No.64 Concerts de propagande donnés par M.Gil Marchex à Tokio 8 Décembre 1931 M.D. de MARTEL, Ambassadeur de la République Française au Japon à Son Excellence Monsieur BRIAND Ministre des Affaires Etrangères à Paris

⁴² 第5章第2節参照。

3) 新たにプログラムに取り入れられた作品

これまで述べたようにジル＝マルシェックスは1931年の2度の来日時に全国各地でレクチャー・コンサートや演奏会を行った。これらの演奏曲目には、表25の通り1925年の来日時のものに新たな曲目が加えられていた。彼が得意としたショパンやラヴェルの作品に加え、1924年に

作曲されたテデスコ《ピエディグロッタ》や1928年に作曲されたプーランク《2つのノヴェレツテ》は、当時最も新しい作品の1つであり日本初演という意味でも意義のある演奏だったといえよう。

作曲者	曲目	初演奏日
クーブラン	お気に入り	11月22日
ベートーヴェン	32の変奏曲	10月24日
ショパン	ソナタ第2番	10月19日
シャブリエ	10の絵画風小品集より 牧歌、スケルツォ・ワルツ	10月19日
ドビュッシー	前奏曲集第2巻より 月光の降り注ぐテラス	3月18日
	映像第1集より ラモー礼讃	4月7日
ラヴェル	鏡より 道化師の朝の歌	10月6日
	水の戯れ	11月22日
セヴラック	組曲「ラングドックにて」より 春の墓地の片隅	3月21日
ファリャ	アンダルシア幻想曲	10月6日
テデスコ	ピエディグロッタ	10月19日
プーランク	2つのノヴェレツテ	3月18日

4) マーテル在日フランス大使からブリアン外務大臣に宛てた手紙（1931年12月18日付）

第3章（39頁）で述べたように、1931年の来日におけるジル＝マルシェックスの活動内容を政治的な面から解釈できる資料が、マーテル在日フランス大使からブリアン外務大臣に宛てた手紙である。ここで全文を掲載する。

8 Décembre 1931

M.D.MARTEL Ambassadeur de la République Française au Japon

A son Excellence Monsieur BRIAND Ministre des Affaires Etrangères à Paris

Concerts de propagande donnés par M.Gil-Marchex à Tokio

M.GIL MARCHEX, qui est, depuis deux mois au Japon, a donné plusieurs concerts de propagande, conformément aux engagements qu'il avait pris au moment où il avait sollicité son admission comme pensionnaire à la Maison franco-japonaise. Le succès obtenu par notre compatriote a été, cette fois-ci beaucoup plus décisif qu'au printemps dernier. La personnalité et le talent de M.GIL MARCHEX, qui est déjà venu trois fois en Extrême Orient, sont connus et appréciés de tous les milieux musicaux japonais, même de ceux qui, jusqu'à ces derniers temps, s'étaient montrés le moins favorables aux tendances et aux méthodes de notre Ecole Moderne.

Le Directeur du Conservatoire d'Ueno, notamment, après avoir hésité à accueillir l'offre que lui avait faite M.GIL MARCHEX, s'est ravisé et a mis à notre disposition la grande salle de son établissement où plusieurs centaines de jeunes musiciens ont pu entendre les chefs-d'œuvre des maîtres français. Cette manifestation a considérablement amélioré nos relations avec le Conservatoire, où M.MARCHEX pense pouvoir donner quelques cours d'interprétation.

A l'Université Keio, le succès de notre concert de propagande n'a pas été moins vif : 1500 étudiants étaient présents à cette soirée. L'organisation de la séance avait été cette fois un peu différente : sur l'initiative du Recteur, M. Hayashi, un droit d'entrée d'ailleurs minime, avait été prévu et la somme ainsi recueillie a été affectée à la caisse de la Société pour le développement des études françaises à Keio.

En province enfin, M. GIL MARCHEX s'est fait entendre à Sendai, à Osaka, à Kyoto, il a été reçu partout avec beaucoup d'empressement.

Chez un peuple qui a le souci de faire honneur à ses traditions artistiques et l'ambition d'égaliser les nations occidentales en s'assimilant leurs formules, il n'est pas indifférent de montrer que si, dans le domaine de la musique, les Allemands ont su, pendant les vingt ou trente dernières années imposer ici leurs conceptions, ils n'ont néanmoins pas été, en Europe, les seuls créateurs ou les seuls maîtres. Et que la France a produit, elle aussi, une école originale dont les Japonais auraient tout intérêt à connaître les chefs d'œuvre et à suivre les enseignements.

1931年12月8日

M.D.MARTEL 在日フランス共和国大使 より

(パリの) M.BRIAND 外務大臣閣下へ

ジル＝マルシェックス氏による東京でのプロパガンダのための演奏会

ジル＝マルシェックス氏は 2 か月前より日本に滞在しており、複数のプロパガンダの演奏会を開催しました。これは日仏會館の研究生としての入館を依頼した際の約束事項に従ったことです。今回我が同胞の獲得した成功は、前回の春よりもはるかに決定的なものでした。ジル＝マルシェックス氏の人柄と才能は、彼はもう三度極東を訪れていますが日本音楽界に広く知られ、直前まで私達の現代

派の傾向と手法に対して好意を示していなかった人々にも高く評価されています。

とりわけ上野の音楽学校の校長は、ジル＝マルシェックス氏の提案を受けることを躊躇した後、意見を変えて同校の大講堂を提供し、その場では数百人の若き音楽家たちがフランスの巨匠たちの作品を聴くことができました。この催しは、著しく我々と音楽学校の関係を改善し、同校においてジル＝マルシェックス氏は演奏の授業をいくつか行うことができると考えています。

我々の宣伝用演奏会は、慶応義塾大学においても成功しました。その夜の演奏会には1500人の学生が出席しました。今回の演奏会の構成は、通常と少々異なっていました。学長の林氏の意見で、入場料を（少額ですが）設定し、集まった金額を同大学のフランス研究発展のための協会の資金に使用します。

さて地方では、ジル＝マルシェックス氏は、仙台、大阪、京都で演奏しました。いずれの地でも彼は大変好意的に迎えられました。

自らの芸術的伝統に配慮し、西洋の様式を吸収しながら西洋人と肩を並べようという野心をもつ（日本）国民に対して、この20-30年の間、音楽の分野でドイツ人が自分たちの考えを吹き込むことができたことができたとしても、ドイツ人はヨーロッパでは、唯一の創造者、あるいは巨匠ではないということを示すことは意味があります。そして、日本人がその巨匠を知りたい、学びたいと大変興味を抱くであろう独自の楽派を、フランスも生み出したことを示すのは重要であるでしょう。

3. 1937年の日本滞在における音楽活動

4度目の来日をしたジル＝マルシェックスは表26の通り、約8ヶ月間に計21回の音楽活動を行った⁴³。形式としてレクチャー・コンサートを主としており、3つのテーマの内容については第4章第2節に著した。ここでは、資料の精査により明らかになった活動内容を記す。

表26 アンリ・ジル＝マルシェックスの音楽活動(1937.3-11)

3月28日	入京	6月10日	東京商科大学
4月11日	華族會館	6月23日	東京帝國大学
4月24日	日本青年會館	6月26日	関西日仏會館
4月27日	華族會館	7月3日	海員會館
4月28日	華族會館	7月4日	華頂會館
5月11日	華族會館	11月9日	華族會館
5月12日	日本大学	11月12日	日佛會館
5月20日	早稲田大学	11月13日	関西日佛會館
5月24日	ラジオ出演	11月15日	慶応義塾大学
5月27日	明治生命講堂	11月17日	華族會館
5月28日	明治生命講堂	11月21日	退京
6月4日	丸ノ内保険協会		

⁴³ 『第14回日佛會館報告書』には「夏季休暇ヲ利用シ、8、9月ハマニラニ演奏旅行ヲナシタリ」と報告されている。

1) 華族会館におけるレクチャー・コンサート

ジル＝マルシェックスは、前回の来日のように華族会館で一連のレクチャー・コンサートを行った。『日佛會館報告書』（1938）によると、

テーマは、『十六世紀ヨリ二十世紀ニ至ル欧羅巴舞踊音楽—アントアン、フランシスク及リュリイヨリロツシニ及シヨパン迄』（4月27日）、『同一前回ノ續キ』（5月11日）、『巴里ニ於ケルシヨパンノ音楽生活』（11月9日）、『ドビュシイニ於ケル異國ノ影響』（11月17日）で、講演は「都度拍手ヲ

シヨパン	マズルカ
リスト	ハンガリー狂詩曲第2番
ムソルグスキ	ゴバック オペラ『ソロチンツィの定期市』より (ラフマニフ編曲?)
グリーグ	ノルウェー民族舞曲 (抜粋2曲)
アルベニス	2つのスペイン舞曲
フアリヤ	火祭りの踊り
バルトーク	アレグロ・バルバロ
ドビュシイ	子供の領分よりゴリウオーグのケイク・ウオーグ 前奏曲集第1集より 沈める寺、デルフィの舞 姫たち、バツクの踊り
ミヨー	ブラジルの郷愁
ラヴェル	亡き王女のためのパヴァーヌ 五時フォックス・トロット (ジル＝マルシェックス編曲)

博セリ」と報告されている。5月11日、11月9日、11月17日に披露された曲目は、表27-1から表27-3の通りである。5月11日のレクチャー・コンサート(表27-1)については、第4章第3節に詳細を記した。その他2公演については詳細不明であるが、プログラムによるとシヨパンをテーマにしたレクチャー・コンサート(表27-2)では、《ノクターン》、《バラード》、《エチュード》な

シヨパン	ノクターン ト長調
	バラード第1番
	エチュード 5曲
	マズルカ ロ短調
	ポロネーズ 嬰ハ短調
	子守歌
	プレリュード 6曲
	スケルツォ第2番
	別れのワルツ 作品69-1

ど彼の作品の重要な形式を網羅されており、ドビュシイをテーマにしたものでは《版画》、《前奏曲集》、《映像》、《喜びの島》の中にラヴェルの《夜のガスパール》が配置されている。ラヴェルの作品がどのように語られたのかが興味深い。

ドビュシイ	版画より 塔 前奏曲集第2巻より月光の降り注ぐテラス
ラヴェル	夜のガスパールより 水の精 映像第2集より 金色の魚
ドビュシイ	喜びの島
	版画より グラナダの夕暮れ
	前奏曲集第1巻より 帆、西風の見たもの、
	前奏曲集第2巻より 風変わりなラヴィエヌ將軍 前奏曲集第1巻より ミンストレル

2) 各大学におけるレクチャー・コンサート

ジル＝マルシェックスは、5月12日に訪れた日本大学を始め、早稲田大学、東京商科大学、東京帝国大学、慶応義塾大学、東北帝国大学、武蔵野音楽学校でレクチャー・コンサートを行った。そのうちプログラムなどが明らかになった5大学での公演を日付順に記す。

① 日本大学

ジル＝マルシェックスは、本郷金助町芸術科大講堂で『作家ドビュツツイ[マ]と其の時代』と題して講演と演奏を行った。国際文化振興会の高田武郎の通訳により「三時間余りに亘

る独奏講演に盛況を極めた聴衆は、幾度かジルマン・シェックス氏[マ]にアンコールを送った。」⁴⁴とされる。

② 早稲田大学

ジル＝マルシェックスは、5月20日大隈大講堂において『民衆の現代音楽に及ぼしたる影響』と題してレクチャー・コンサートを行った。プログラムは表28の通りであり、講演内容については、第4章第3節に著した。レクチャー・コンサートには「駐日大使モール・アンリー夫妻、一等通訳官ボンマルシャン、参事官クナベル氏等も同伴来場、千余名あまりの学生とともに熱心に傾聴し…終了した時は拍手が鳴りやまず、聴衆全部起立して感謝の意を表するといふ空前の場面があつた…近来にない感銘深き科外講義として学生間より感謝状が殺到し学園當局を非常に喜ばせた」⁴⁵と報告されている。

表28 大隈大講堂(5月20日)

シャプリエ	気まぐれなブーレ
アルベニス	2つのスペイン舞曲
ファリヤ	火祭りの踊り
プロコフィエフ	年老いた祖母の物語
バルトーク	アレグロ・バルバロ
ドビュッシー	版画より グラナダの夕暮れ、雨の庭
	子供の領分より ゴリウオーグのケイク・ウオーク
	前奏曲集第1集より ミンストレル
セヴラック	組曲「ラングドックにて」より 春の墓地の片隅
サティ	木製の人形の2つのスケッチ
プーランク	3つの無窮動
ミヨー	ブラジルの郷愁
ストラヴィンスキー	ピアノ・ラグ・ミュージック
ラヴェル	五時フォックス・トロット(ジル＝マルシェックス編曲)

③ 東京商科大学

ジル＝マルシェックスは、6月10日兼松講堂において『民衆音楽が現代作曲家に及ぼせる影響[マ]』と題して講演、演奏を行った。『一橋新聞』第250号には「三科よりの学生を始め、音楽学校の生徒も多数出席して、盛況であつた、氏は演奏の順序に従ひ、十数曲を演奏しつつ説明した」と記されている。そのテーマから、おそらく早稲田大学での講演と同じプログラムで演奏したことが推測される。

④ 東京帝国大学

ジル＝マルシェックスは、表29のプログラムにより法文経第25番教室において『象徴主義時代の音楽生活』と題して、文学部学友会と帝大音楽部の主催によりレクチャー・コンサートを行った。『帝國大學新聞』第680号には、当日「日佛會館長マゾオ博士がジルの講演を鈴木健郎学士に全譯させたパンフレットを千部寄贈し…仏蘭西語を譯せぬ聴衆もそれがため

表29 法文経第25番教室(6月23日)

フランク	プレリユード、コラル及フーガ
リスト	海の上を歩くパオラの聖フランチェスコ
フォーレ	ノクターン 第6番
グリーグ	ノクターン ヘ長調
サティ	サラバンド第6番
ドビュッシー	前奏曲集第1集より 沈める寺、西風の見たもの
	前奏曲集第2巻より 月光の降り注ぐテラス
	前奏曲集第1集より バックの踊り、ミンストレル
	セヴラック
ラヴェル	夜のガスパール

⁴⁴ 『日本大學新聞』第275号、昭和12年5月20日付。

⁴⁵ 『早稲田大学新聞』第713号、昭和12年5月26日付。

に、耳にジ氏の解説を聴きながら、明快な翻譯テキストを読み、その間に演奏されるピアノの名曲を味はひつゝ休息するといふ頗る複雑な態度を勞せずして持続し得た」⁴⁶と記されている。またレクチャー・コンサートを聴いた辰野隆は、以下のように指摘している。

近代の仏蘭西音楽に對する場合には、詩魂と繪ごころとが欠くべからざるものであるからドビュシイやラヴェルの音楽を聴いて耳を楽しませると同時に、詩調とピトレスクをも味はひ得なければ演奏會は全しと謂ひ難い。ジ氏の演奏・講演は、繋る見地から、日本の音楽愛好者に新しい聴き方を教へるのであつた。

この指摘から、詩や美術と音楽の影響関係を示し、講義を行ったことが推測される。

⑤ 慶応義塾大学

ジル＝マルシェックスは、11月15日三田慶応義塾大學二十一番教室において『象徴主義時代の音楽界』と題して、三田フランス文學會慶応義塾塾監局主催のもと、井汲清治の通訳付で講演、演奏を行った。曲目は表30の通りである。

フランク	プレリュード、コラール及フーガ
リスト	海の上を歩くパオラの聖フランチェスコ
フォーレ	ノクターン 第6番
グリーグ	ノクターン ヘ長調
サティ	サラバンド 第6番
ドビュシイ	前奏曲集第1集より 版画より 雨の庭
ラヴェル	夜のガスパールより 水の精 亡き王女のためのパヴァーヌ
ジル＝マルシェックス	古き日本の2つの映像

3) その他のレクチャー・コンサートと演奏会

ジル＝マルシェックスは、日佛會館、関西日佛學館、海員會館、華頂會館でそれぞれ講演もしくは演奏会を行った⁴⁷。7月3日に海員會館で行われた演奏会は、捜真女學校同窓會関西支部主催であり、7月4日華頂會館で行われた講演会は、音楽文化クラブ主催、大阪毎日新聞社京都支局後援により、『民衆音楽のフランス現代作曲家への影響』と題して、市村恵吾の通訳付きで行われた。また、11月23日関西日佛學館で行われた講演は、『象徴主義

フランシスク	オルフェの宝物 (ジル＝マルシェックス編曲)
バーセル	イギリスの踊り[ママ]
クーブラン	お気に入り
ラモー	ミュゼット、リゴードンとタンブラン
バッハ	ガボット 二短調
スカルラッティ	ジーク ハ長調
モーツァルト	トルコ行進曲 ピアノソナタ第11番第3楽章
シューベルト	16のレントラー「ウイーンの淑女たちのレントラー」
ロッシニ	踊り(ナポリのタランテラ) (歌曲のため編曲?)
ショパン	ワルツ2曲
	マズルカ ロ短調
	ポロネーズ 変ロ長調
ムソルグスキー	ゴバック オペラ『ソロチンツィの定期市』より
グリーグ	ノルウェー民族舞曲
アルベニス	2つのスペイン舞曲
ファリャ	火祭りの踊り
バルトーク	アレグロ・バルバロ
ドビュシイ	子供の額分より ゴリウオーグのケイク・ウォーク
ミヨー	ブラジルの郷愁
ラヴェル	五時フォックス・トロット(ジル＝マルシェックス編曲)

⁴⁶ 『帝國大學新聞』680号、昭和12年6月28日付。

⁴⁷ 明治生命講堂における5月27-28日の連続演奏会は、第4章第3節を参照。

時代の音楽生活』と題され、京都帝國大学音楽學部と関西日仏學館の共催によるものであった。また資料から判明したプログラムは、表 31-35 の通りである。

シヨパン	ノクターン ト長調
	バラード第1番、第4番
	ワルツ
	スケルツォ第2番
ドビュッシー	映像第1集より 水の反映
	映像第2集より 金色の魚
	前奏曲集第2巻より 月光の降り注ぐテラス
	前奏曲集第1巻より パルクの踊り、ミヌストレル
大澤嘉人	丁丑春三題
ファリヤ	三角帽子より 粉屋の踊り
	恋は魔術師より 火祭りの踊り
バルトーク	アレグロ・バルバロ
リスト	スペイン狂詩曲

シャプリエ	気まぐれなプーレ
アルベニス	2つのスペイン舞曲
ファリヤ	恋は魔術師より 火祭りの踊り
プロコフィエフ	年老いた祖母の物語
バルトーク	アレグロ・バルバロ
ドビュッシー	版画より
	子供の領分より ゴリウオーグのケイク・ウオーク
	前奏曲集第1巻より ミヌストレル
	セヴラック
サティ	木製の人形の2つのスケッチ
プーランク	3つの無窮動
ミヨー	ブラジルへの郷愁
ラヴェル	五時フォックス・トロット (ジル＝マルシェックス編曲)

ドビュッシー	版画より 塔
	前奏曲集第2巻より
ラヴェル	夜のガスパールより 水の精
ドビュッシー	映像第2集より 金色の魚
	喜びの島
	版画より グラナダの夕暮れ
	前奏曲集第1巻より 帆、西風の 見たもの亜麻色の髪の乙女、
	子供の領分より ゴリウオーグのケイク・ウオーク
	前奏曲集第1巻より ミヌストレル
	前奏曲集第2巻より 風変わりなラヴィーンヌ將軍

フランク	プレリュード、コラールとフーガ
リスト	海の上を歩くパオラの聖フランチェスコ
フォーレ	ノクターン 第6番
グリーグ	ノクターン ヘ長調
ドビュッシー	前奏曲集第1巻より 沈める寺、パルクの踊り
	版画より 雨の庭
ラヴェル	夜のガスパールより 水の精
	亡き王女のためのパヴァーヌ
プーランク	3つの無窮動

4) 新たにプログラムに取り入れられた作品

これまで述べてきたように、ジル＝マルシェックスは、1937年の来日においてレクチャー・コンサートを中心とした活動を行った。今回新しくプログラムに取り入れられた作品は、表 36 の通りである。これまで演奏したことのないプロコフィエフの作品も含まれている。また、ジル＝マルシェックスの《古き日本の2つの映像》や大澤壽人の《丁丑春三題》をリサイタルプログラムに取り入れ初演したことは、彼が初来日から12年の間に築いてきた日仏の交流の結果であるといえよう。

作曲者	曲目	初演奏日
シヨパン	別れのワルツ 作品69-1	11月9日
ドビュッシー	前奏曲集第1巻より 帆	11月13日
	前奏曲集第2巻より 風変わりなラヴィーンヌ將軍	11月13日
	喜びの島	11月13日
ファリヤ	恋は魔術師より 火祭りの踊り	5月11日
プロコフィエフ	年老いた祖母の物語	5月20日
ジル＝マルシェックス	古き日本の2つの映像	5月28日
大澤壽人	丁丑春三題	7月3日